
日本群島、戦国、姫竜王

瓦vもすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本群島、戦国、姫竜王

【Nコード】

N8408H

【作者名】

瓦Vもすけ

【あらすじ】

無数の島々が弓状に広がる日本群島。百年続いた戦国時代も、中央海域を制圧した織田信長の台頭により、終演へと近づいていた。かつて北陸を統一した雷怨寺豪千が死んで、五年の歳月が流れている。今は一四歳と若い雷怨寺夢幻が当主の座に着いているが、北陸の結束は過去の物となっていた。傍若無人な姉妹の国盗り物語。

姫竜王、帰還する（前書き）

日本が小さな島々に分散していて、海竜の住む世界。

北陸全域が架空の世界になっています。
殆ど異世界ファンタジーのノリです。

姫竜王、帰還する

昇り始めた朝日に照らされ、海は穏やかに輝いていた。

晴れ渡る空に、まばらな雲が流れていく。粘りのある潮風は、いくぶん冷たい。

それは懐かしい、北陸の気配だった。

帰ってきたのだ、雷怨寺に。

倶利伽羅海峡くりからかいきょう抜ける屋形船の屋根の上に寝そべって、千は、許婚の顔を思い浮かべていた。

雷怨寺夢幻らいおんじむげん――。

「夢幻さまも当年一五歳。そろそろ北陸の君主として正妻を定め、跡取りをもつけねばなりません。候補は沢山ありますけれども、夢幻さまが、どうしても千でなければ嫌だ嫌だと駄々を捏ねられています。はあ、困ったものです」

半年ぶりに訪ねてきた姉から、千は、夢幻の話が聞かされた。

それはもう、数日間、朝昼晩と時間の許す限りに。

千が帰省だけでも承諾するまで、延々と。

千が初めて夢幻と出会ったのは、五歳の時、旧・雷怨寺城でだった。

生意気なヤツが居たので、とりあえず海に蹴り落としたのが、二人の馴れ初めだった。

それから二人は『寺』で共に生活した。

『雷怨寺の子供たち』

と呼ばれた、大勢の子供たちと一緒に。

大勢集まれば自然と派閥が形成されるものだ。

夢幻は雷怨寺党を率いて、千は九狸党を率いて、二人は百回を越す戦端を開いた。

その多くに千たち九狸党は勝利した。

……千が自らの境遇——子供たちは、ただ武芸や学問を学ぶために寺に集められたのではなく、人質としてである——を理解したのは、随分と後のことだった。

ちょうど冬の海に夢幻たちを蹴りこんで、意気揚々と七十回快勝記念の宴を開いていたときだった。

夢幻が高熱を発して生死を彷徨い。

雷怨寺家の家老・津幡典禅つばたてんぜんが抜刀して乗り込んできたときだ。

さすがの千も、海に飛び込んで逃げて、事なきを得たが。

……大人げないじじいだった。

海の中まで追いかけて来やがった。

千が雷怨寺を去るとき。あの日、夢幻は何も言いはしなかった。一言も。

さようならとも、また会おうとも、行かないで欲しいとも。

ただ、夢幻は、恨めしそうに、上目遣いで千を見つめ、強く唇を噛みしめていた。

唇からは、糸のように細く、鮮やかな血が流れていたのが、千の心に焼き付いていた。

夢幻は、同じ年頃の男子と比べ背が低く、病気がちで身体の一つくりも貧相だった。

まともに竜に乗ることも出来ず、しがみついているのがやっとだった。

それが、今では。

「遅しく、なっただ」

呟いた千の頬が、だらしなく弛む。

今では竜を自在に操れるようになったそうだ。北陸随一の腕前であるらしい。

「是非とも、千と腕比べをしてみたい」
などと、明るく笑ったそうだ。

夢幻のやつめ。

「こしゃくなことを言う」

竜王である千に挑もうとは、何とも命知らずなやつだ。
でもちよつとくらいなら、顔を立ててやってもいい。

にまにまと、千は笑み崩れ、ごろごろと屋根の上を転がった。

気づくと、屋根の上に顔だけ出した姉が、冷たい目で千を見つめていた。

「な、なに？　姉ちゃん」

千は頬を赤く染めつつも、平静を装って起き上がると屋根の上にあぐらをかく。

姉が微笑んだ。

整った風貌を優しげに……よく見るといやらしく。

「別に。何も。天井から怪しげな音がするから何事かと覗いてみただけです」

おほほほっと笑いながら、姉は潮風におどる長い髪をかき上げて。

踏み台にしていた木箱から降りると、小屋に戻っていく。
千は赤い顔をしたまま、その場にしばらく寝転がった。

それから、船で二日を落ち着かなく過ごした。

「千！ 見えてきましたよ！ 雷怨寺城です！」

姉の声に、眠っていた千は跳ね起き、小屋から飛び出した。
千の表情が晴れ渡る。

そこに、確かに見えていた。朝霧に煙る向こう。

島々の間に、高く高く、ひときわ高く突き出した竜王山。

その麓には、千の育った寺がある。

そして、竜王山から少し離れた緩やかな海岸線に、広大な城域が
広がっている。

中心には、七層の大大守。

そこが、夢幻とわたし、二人の新居となる。

雷怨寺城だ。

姫竜王、帰還する（後書き）

二部構成です。

前半は千姫帰還編で、彼女のドタバタがメインです。

後半は、国盗り編で、戦とそれに付随する策謀オンリー。

年表

天正二年――

北陸の覇者、雷怨寺らいおんじ豪千。

『信長上等 全国制覇』

の旗を打ち立て、京都島を目指すも、水瓶島の沖合、嵐の海に沈む。

跡取り、雷怨寺 夢幻むげん――九歳。

許嫁、九狸くだぬき 千――九歳。

その姉、九狸 神楽かぐら――一二歳。

天正三年――

織田 信長。長篠海域において、長銃『竜殺し』を用い、武田の竜武士団を打ち破る。

雷怨寺家。近隣の人質を解放する。

千姫、神楽、京都島にわたる。九狸神楽、早々に京都島を離れ、北陸に帰還する。

天下一竜王杯が、京都の八幡湾で執り行われる。

千姫。参加するも予選敗退。森長可が優勝する。

天正四年――

毛利放火艦隊――信長の『巨大戦艦』を焼き沈める。

天下一竜王杯が、京都の八幡湾で執り行われる。

千姫。参加せず。森長可が優勝する。

天正五年――

織田 信長。『城塞艦隊』で毛利水軍を打ち破る。
岩山本願寺、孤立する。

天下一竜王杯が、京都の八幡湾で執り行われる。
千姫。森長可に破れ、準優勝となる。

天正六年――

上杉 謙信が他界する。

天下一竜王杯が、京都の八幡湾で執り行われる。

千姫、森長可を破り、優勝する。歴代最年少にして、初の女性竜王となる。

天正七年――安土城が完成。

雷怨寺家前々当主、雷怨寺隠居斎、死去。

天下一竜王杯が、京都の八幡湾で執り行われる。

千姫、決勝で前田慶次郎を下し、天下一竜王杯で、二連覇を達成する。

天正八年――

織田信長、岩山本願寺を攻略する。

織田信長が、柴田勝家に北陸平定を命じる。

夢幻――、一五歳。

千姫――、一五歳。

神楽――、一七歳。

千姫。北陸に帰還する。

想い人

五年ぶりに再会した雷怨寺夢幻は、随分と背が伸びていた。千と、同じくらいの高さまで。

つまり姉が言っていたほど、逞しくは見えなかった。

どちらかといえば、病弱そうだ、相変わらず。

もっとも虚言癖のある姉の言うこと。

千もそんなに信じてなかったので、まあ、やっぱりな、程度の感想だった。

でもちよつと、

……………男前だ。

昔の面影がそのまま残っている。

ほっそりとして頼りないが、京でも珍しい相変わらぬの白晳の美男子だった。

千はにやけそうになる表情を引き締め、しかめっ面を作った。大事なのは「おまえがそこまで頼むから嫌々ながら帰ってきてやったぞ」という態度だ。

若年ながらも、北陸の大君主、

雷怨寺夢幻が、口を開いた。

千と目を合わせることなく、姉の神楽をまっすぐに見ながら、

「千との婚約は、なかったことになったはずです」

千は斜め前方の畳に向けていた視線を、まじまじと夢幻に移した。それから、姉に視線を移す。

姉はその視線に、気づかない振りをして。

「夢幻さま」

花が咲くように微笑みになった。

「戦国の世の習い、両家の当主が話し合って決めたことです。わがままはいけませんよ」

「今はわたしが雷怨寺の当主です」

「まあ、呆れた。死んだ父親の遺言も守れないのですか？」

「あれは遺言ではない。それに破談はあなたのお父上、斑尾殿まだらおの了承も得ています」

千は、首を傾げた。

……あれ、おかしいな？

……確か、夢幻が私と結婚したいと駄々を捏ねたから、渋々、帰ってきたはずで……。

……なんだろう、まるで未練たらたら押しかけてきてなお振られているような錯覚が……。

「いや、まだ斑尾さまは了承されていませんぞ」

横に控えていた夢幻の教育係、家老の津幡典禅つばたてんぜんが口を挟んだ。

「戦が終わるまでの先送りだ。最終的には私の意志に従うとおっしゃった」

「うちの父はどうでもいいのです。生きてますし」

「当主でしょう、あの男が九狸の。とにかく戦国の世の習わしとして、両家の当主が話し合い、納得して決めたことです」

「男女の間に当主だとか戦国の世の習わしだとか無粋ですわ。大切なのは本人の意志でしょう」

「だから僕は」

「あなたの意見など聞いておりません」

神楽がつんつと顔をそらした。

「……典禅、お前から何か言っちゃってくれ」

らちがあかぬ、と言いたげに夢幻は家老に話を振った。

「むむむ、しかし神樂さまの申しよう、一理、ございますぞ？」

「一理以外の他の理が、何一つとして無いだろう」

疲れたように、夢幻。

「千里の道も一理からです」

禅僧のような面持ちで、神樂。

「それを言うなら一歩からだ」

「同じことです」

「一歩で一里も歩けるか」

「だいだらぼっちは、」

「わたしはだいだらぼっちではない」

「ああいえばこういう」

神樂はしなを作り、すねたように畳をいじいじ弄る。

「私が悪いのですか！？ とにかく、わたしは——……くっ、ええい！ とにかくこの話はすでに断っておいたはずです！」

真っ赤な顔で立ち上がり、夢幻が言う。

「……そこまで嫌なのか？」

「……私のことが？ 私のどこが？ 千は、夢幻と出会った幼少から別れるまでの日々の記憶を思い返す。」

「……蹴ったり殴ったり罵倒したりしたけど、時にはお互い笑い合ったこともあったはずだ。」

「……ちよつと反省する千である。」

「ああ、聞こえない聞こえない。典禅さま。何か聞こえますか？」

神楽が耳を塞ぎ、顔を左右に振る。

「むろん！ 爺には、天国で婚礼を喜ぶ大殿様の声が聞こえまする！」

典禅は、ずああああっ——と、天を向いて、涙を流した。

……典禅も歳を取って随分と丸くなったなあ、と千は姉と三文芝居を演じるかつての鬼家老を空ろな目で眺めた。

「まあ、それはすてきですこと」

神楽が両手を胸の前で組み合わせ、きらきらと目を輝かせる。それから、

「とにかく今は亡き豪千公との約束です。はんっ、今更あなたごときが破談になど出来ませんわね」

神楽は、胸元をはしたなく少しゆるめ、手で仰ぎ吐き捨てる。

夢幻は顔を歪めた。

「では、結婚しましょう」

え？ と千は顔を上げた。

今の流れで、そんなあつさり？

「ですが、今ここで離縁します」

千は顔をそらした。

……そんなあつさり。

「鬼畜ですわ。弄ぶだけ弄んでお捨てになると、そう仰るのですね！？」

神楽が立ち上がり、ほっそりとした指を夢幻に突きつけ糾弾する。
「弄んでなどいません！」

はあ、と千は大きなため息をついた。

……今間違いない、千は姉と夢幻に弄ばれている。

「……………なあ、ねーちゃん」

「なんですか、千？　今、お姉ちゃんがきつちりと責任を取らせま
すからそこでおとな」

「話が違う、ような気がする」

「わかっています。だからこそ姉がこうして」

「いや、そうじゃなくて。ねーちゃんの話がだよ。夢幻のやつが泣
いて泣いて私と、けっ、けっこ………会いたがっているって言うから、
私は顔だけでも見てやろうと、わざわざ帰って来てやったのであつ
て……………」

最後の方は、消え入りそうな声だ。

「わたしは、泣いてなどいない！」

夢幻が割って入って叫んだ。顔が赤い。

「あら、そうでしたかしら？」

神楽が首をかしげる。典禪に艶やかな流し目を送り、

「典禪さま、泣いておりましたよね？」

「典禪、わたしは泣いてなどいないな！？」

「泣いておりました」

「典禪！」

「相変わらず、泣き虫なんだな」

千が苦笑する。

「泣いてなどいない！　いないぞ！」

真っ赤な顔で、夢幻が千に食い付く。すでに目尻には少し涙が浮
かんでいる。

「わかったわかった」

千は愛想笑いで夢幻をなだめる。………こっちの方が泣きたかった。

夢幻がこの日初めて、真っ正面から千を見つめた。千は少し頬を染め、身を引いた。

「わたしには、想い人が居る」
夢幻が告げた。

千の呼吸が、一瞬止まる。

「かごめという方だ。すでに祝言は済ませている。そうだな、典禪？」

「……………」

「そうだな？ 典禪？」

「……はい、さようです」

千は唇を噛みしめた。

「べっ、べっ」

震える声で言う。

「別にわたしは、おまえなどに興味はない。京でよろしくやってい
る。おまえが、泣いてうるさいって言うから、里帰りのついでに寄
つてやつただけだ。……それだけだ」

「解っている。すまなかった」

夢幻が頭を下げた。

「何も」

「……解っていない。」

千は言えず、飲み込んだ。

「かごめさんを紹介するよ」
夢幻が立ち上がった。

紹介など、して欲しくはない。

千は固く眼を瞑り、唇をかみしめる。

夢幻が、ふすまを開く。

ふすまの向こうに、

……誰も、居なかった。

長い沈黙が降りた。

「夢幻さま」

神楽が最初に口を開いた。目を細めて、

「虚言ですか？」

「ちっ、違う！ 確かに彼女が」

「じゃあ、逃げられたのですね？」

「ち、違う。断じて違う。そ、そんなはずはない！」

「では、そのかごめさんとやは？ 今すぐ耳をそろえてきっちり出していただきますようか？」

「かごめー、かごめー。かごめさーん！」

夢幻が走り回って手当たり次第にふすまを開けていく。

「おいたわしや……夢幻さま」
よよよと神樂が泣き真似をする。

雷怨寺城の大天守閣は、七階が最上階だが、そこは小さな茶室となっている。

夢幻の寝室は六階。

今、千たちは、四階にいる。

この四階が夢幻の、つまり城主の政務室であり、私的な謁見の間にもなっている。

そう広くないこの階のふすまを全て開け終え、夢幻がとぼとぼ戻ってきた。

「……………夢幻」

同情するような、ほっとしたような、千の視線。

夢幻は赤い顔してぷるぷると首を横に振っている。

口がちよつとぱくぱくしてるが、言葉は出ないようだ。

ふうつと、神樂がため息をついた。

「まあ、それはそれとして妻が居るとか居ないとかは、この際、関係がないことです」

いや、あるだろう？ の視線で千は姉を見た。

「確かに！ 北陸で豪千公と覇を競った亀登は、二十七人ものそばめを持っておりましたぞ！」

典禪が叫んで、「……最後は全身滅多刺しに刺されましたが」

ささやかな声で、付け足した。

「そうです夢幻さま。あなたは北陸の覇者なのですから、女の一人や二人くらい、同時にものにも出来なくてどうするんですか」

「いやいや、典禪、ねーちゃん。それはちよつと」

「わたしは刺されたくはない！」

「いい加減にしない！」

神樂が大喝した。

「あなたたちはさっきからもう。聞き分けがないことばかり！」
神樂は頬を膨らませた。

それから、名案がひらめきましたって感じに両手を打ち合わせ、
「では、こうしましょう。その架空のかごめさんと」

「架空ではない！」

「架空ではないかごめさんと、千とで勝負いたしましょう」

「一体何の勝負だ？ 竜技か？」

「かごめさんを殺す気ですか！？」

千の言葉に、夢幻が抗議する。

「もちろん、女の魅力です。勝敗は、夢幻殿に決めていただきます」

「それなら答えは決まっています。わたしは——」

「七日後です」

夢幻の言葉を制して、神樂が続ける。

「七日後に、千とかごめと私の中から、夢幻殿に私を選んでいただきます」

「何で、ねーちゃんが入るんだ？ しかもねーちゃん確定か？」

「負けませんわよ！ 千！ 覚悟おし！ ——では、ごきげんよう」
神樂はびしっと千を指さしてから、微笑み、去っていった。

千はこの日、何度目かのため息をつく。

「……………まあいいや。もうどうでも。帰ってきた時点で私の負けだし。……色々と釈然としないけど、せつかく帰ってきたんだからゆつくりしていくさ。火六夜やみんなにも会いたいしな」

「言っておきますが、僕は」

「うるさいな、わかってるさ。私だって願ひ下げだ。おまえなんて」
千はしっしつと手を振って、顔を背ける。

「それに、わたしには京で待たしている奴がいる」
胸を張って言ったが、待たしてるのはただの友達たちで、ちょっとした見栄でしかない。

夢幻は、少し寂しそうに顔を逸らしてから、
「そうか」

とても優しい澄んだ笑顔を浮かべた。

千は少し眉をひそめてから、微笑む。

「まあ、元気そうで良かった」

夢幻も笑い返した。

「私ですよ。千。会いたかった」

「……………」

千の顔が赤くなる。

「あつ、変な意味ではない！　ただ、そう、懐かしいなと！」

「わ、わかってるよ」

ぶつきらばうに、千は呟いて顔をそらした。

その後二人は、しばらく言葉もなく、のんびりと座っていた。い

つ
の
間
に
か
典
禪
は
居
な
く
な
っ
て
い
た
。

終わり近き戦国時代

結局千は、たいした話をするともなく、夢幻の部屋を後にした。一つ階層を下りたところで、姉と典禪てんぜんが話し合っていた。

千に気づいて、二人は話を打ち切った。

典禪は夢幻のもとに戻っていき、千は姉と並んで雷怨寺城の廊下を歩く。

「さて。まず夢幻さまに挨拶した後、お父さまにも挨拶をと思っていましたが、大切な勝負があるわけで、時間を無駄にする余裕はなくなりました。これから七日の間、私たちは雷怨寺城に寝泊まりすることになります」

風や潮の流れで変化するが、雷怨寺城と父の居る九狸城は、船で二日の距離にある。

天候に恵まれても、往復するとそれだけで四日を使うことになる。「といっても、夢幻さまとは別の部屋です。残念ですか？ 残念ですね。……残念です。ですがちゃんと夜這いはかけますし、たまには姉妹水入らずで」

「ねーちゃん」

「何ですか？」

「私のこの怒りを拳に乗せて、さあどこにぶつけたらいいと思う？」握り拳を姉の顔の前に突き出し、微笑みを浮かべて千が問う。姉も微笑んで答えた。

「そこの壁に好きなだけぶつけてください」

「まずあやまれ」

「ごめんなさい」

姉は素直に頭を下げた。

「それで、何事なのこれ？」

じとりと姉を見る。

「求められて帰ってきたはずが、いつの間にか愛し合う二人の中を
引き裂こうと乱入した元許嫁になってない？ わたし？」

「おほほほっ」

「いや、おほほじゃなく」

神楽は、千の瞳をまっすぐに見つめた。

「千。恋は戦争です」

「だまれ」

「千。そんなはしたない言葉使いでは、お嫁の貰い手がありません
よ？」

「わたしより二才年上で未婚で相手のいないお姉さまに言われたく
はない」

「千。確かにあなたが怒る気持ちも分かります。ですがわたしは理
不尽で恨みがましい女とこの北陸で評判です。謝るなら今のうちで
すよ？」

「理不尽にもほどがあれ」

聞き分けのない子に困ったような態度で、ふう、と姉はため息を
ついた。

「かごめさんってだれ？」

千が訊ねると、

「稿美かごめ。海商、稿美家の娘です」

あっさりと、神楽はその言葉を出した。

「やっぱり前から知ってたの？」

「彼女のことは前から知っていましたが、婚姻の話は今日知りまし
た」

千がうつむく。

「ですがそれはふりだけです。先ほど典禪てんぜんから全てうかがいました。彼女は夢幻を好いているようですが、夢幻は彼女を愛していないし、彼女の愛に気づいてもいません……………酷い人ですね」

「じゃあなんで夢幻はそんな嘘をついたの？　そこまでして、私と……………」

「千」

きつい声音で、神楽が言う。

「夢幻は今でもあなたのことを愛してます」

「……………信じられない」

子供の頃、口にしたことはなかったけど、千は夢幻のことが好きだったし、夢幻は千のことを好きだと一度だけ言った。

しかし長い時間が経ってしまった。

遠く二人は離れてしまった。

京に染まった千と、北陸に残った夢幻。距離も、立場も。

そして、心は…………。

「わたくしが嘘を付いたことがありまして？」

「……………半分くらいはいつも嘘だ」

「じゃあ、半分はいつも本当です」

神楽は艶やかに微笑んだ。

「あなたと夢幻は、お互いに愛し合ってます」

「じゃあなんで」

「千、あなたは天下の情勢がどうなっているか、理解していますね？」

「してるさ。それは」

毛利の艦隊が織田に致命的な大敗を喫してから三年、ついに石山本願寺が立ち枯れるように陥落した。

かつて織田包囲網の中核だった武田は、徳川家康、織田信忠、滝川一益に追い立てられ、滅びの瀬戸際にある。

毛利は羽柴秀吉の猛攻にさらされ、戦線を後退させている。

この北陸海域でも、すでに四大宿老家の一つ、紅蟹家べにがにが織田へと寝返り、織田の先遣隊が進出して来ている。

織田領の最北城塞、北ノ庄では、柴田勝家を中心とした織田の北陸方面軍がいよいよ編成されつつある。

四海からの猛攻に耐えきり、逆に粉碎して見せた織田信長の所領は、六百万石に達していた。

中央海域の交易によって産み出される富も含めると、二千万石に相当する。

それが中央海域の技術によって、火砲や軍船に次々と仕立てられていく。

織田の天下は半ばまで成立している。

今の織田は領海を接する全ての敵を攻めてなお余りある軍勢と経済力を誇っている。

北陸を統治する雷怨寺家らいおんじは、織田の大艦隊を迎えるまでもなく、すでに崖っぷちに追い込まれている。

京で暮らし、多くの粹人と交流を持つ千は、日本群島の勢力図をかなり正しく理解していた。

「だけど、それとこの仕打ちに何の関係があるの？」

「夢幻はあなたのことが好きです。そして血なまぐさい戦に巻き込またくないから、京に追い返そうとしています。これが信じられないようならどうぞ千。しっぱを巻いて逃げ帰りなさい。もっとも」

神楽は千を挑発的に眺め、

「超一流の女を自認する私に言わせると殿方の気持ちなんて二の次三の次、大切なのは何よりも自分の気持ちです」

そつと愛おしそうに、自らの胸元に両手を添える。

「……姉ちゃんはまだ少し人の気持ちを思いやった方がいいよ」

妹の指摘に、神楽はつよく千のほっぺを引っ張ってから。

こほんと咳払いして、

「まずお会いなさい」

「誰に？」

「誰とでも」

神楽は微笑んだ。

「せっかく帰ってきたのですから、会える人みんなに会ってきなさいな。それから、今後について話し合いましょう」

それだけ言って、神楽は千に背を向けた。

千が退室した後、夢幻は典禪と向かい合っていた。

「もう一度、お考えください」

「彼女にはもう、人質は似合わない」

「人質ではなく、正室です」

夢幻は天守閣の窓から、北陸の海を眺める。

「典禪。雷怨寺家は、もう滅びたんだよ」

「馬鹿なことを仰るな！ まだまだ雷怨寺は健在ですよ！」

力強く、典禪がしかりつけた。

夢幻はゆっくりと頭を左右に振る。

「千を道連れにはしたくない」

夢幻は北陸の海を見下ろしながら、心の中で、千姫のことを思い描いていた。

美しく成長していた、想い人のことを。

形の良い口唇に薄くひかれていた桃色の紅が、目にまぶしく焼き付いている。

「彼女はもう、北陸の人間じゃないんだ」

万感の思いを込めて、その言葉を解き放った。

「彼女だけは生きていて欲しいんだ」
夢幻の目端から、小さく涙がこぼれた。

乱世の海商と、その娘

乱世は、海商の時代でもあった。

無数の島々に分かれた日本群島では、たった一島ですべてを自給自足することなど不可能である。

余る物を売り、必要な物は買い入れる必要があるが、近隣ではどうしても生産できる物が似通ってくる。

そのため、遠方の島々なら高く売れる商品も、近場だと買い手すら付かず、遠方の島々だと容易に手に入る品が、近隣の島だと全く手に入らないなどという現象が起こる。

だからといって、武将たちが自ら積み荷を積んで、航海することは出来ない。

だまし討ちもまた常道の戦国時代。

同盟関係にある大名どころか、配下の武将ですらいつ裏切るかわからない。

まして交流のない他国の船が、自領を通過していくことを見逃す大名などまず居ない。

そして商談に食い違いは付き物だが、名誉を重んじる戦国武将には、譲るに譲れない立場がある。

ほんの些細な商談のこじれや事故が、国家間の対立に発展することもある。

そこで、海商である。

海商を間に挟むことによって、武将同士の争いは避けることが出来る。

領海を行き来する海商が多くなるほど、余るものは売りさばけて、足りないものは補充されていく。

海商の航海は、戦乱に明け暮れる島々にとって、血流にも等しかった。

兵糧や武具の不足は、そのまま戦争の敗北を意味する。事実、海商の寄りつかない海域は、物資が不足、高騰し、戦どころではなくなった。

だから武將たちは、商人の往航を奨励し、保護もした。もちろん、それなりの通行料は、摂取する。

海商たちは、物資を運んだ。

海賊たちが横行し、海賊と変わらぬ戦国武將が幅をきかしている群島の海を。

安く買える品を求め、高く売れる島を目指し。

海商たちには、商品の善し悪しだけではなく、武將の目利きも要求された。

台頭する群雄に取り入った商人は台頭し、滅び行く群雄に肩入れた商人は、滅んでいった。

多くの海商たちが海に消え。少数の海商が、莫大な富を手にした。

乱世は、終焉に向かいつつある。

織田信長を筆頭に、多くの島々を支配下に治めた大名たちは、殆どの物資を自らの領海のみで賄えるようになった。

自然、海商たちにも敵対する大名との交易を禁じるようになった。商人にとっても、下克上の時代は、終焉を迎えつつあった。

稿美かごめの実家は、堺を根城にする日本群島四大海商の一つだった。

稿美一門——女たちを除いて、男だけ——の船が稼ぎ出す金は、百五十万石の領地から取れる収益に匹敵するとも言われている。かごめの父である稿美佑泰は、独特の癖を持っていた。

これぞと思う武將に娘を嫁がすのは、どこの海商でも同じことだが、稿美佑泰は、嫁ぐ先を娘自身に決めさせた。

そこはまあ、良いのだが、問題はその先だった。嫁いだ娘に、商売が出来るだけの船と品を与えると、「後はご自由に」と親子の縁を切るのである。

以後は娘を、完全に独立した海商として扱う。持ちかけられる商談には快く対応するが、益がないと判断すれば、容赦なく拒絶する。

稿美佑泰には年齢に開きのある九人の娘が居て、かごめの上の姉たちは全て嫁いでいるが、未だ海商を続けているのは、四女の楓ひとりだけだった。

武田の一門に嫁いだ長女は、最初、武田の御用商人として上手くやっていたのだが、武田の没落と共に商売も破綻した。

今は、仲の良かった次女の住む小田原で匿われている。

その次女もすでに商売からは足を洗っている。

自由航海が保証された海商だが、特定の一族に嫁いだ以上、どうしても商売の範囲は、自国の領海か、同盟国の領海に限られる。

それでは島付きの商人と変わらない。

他領との取引には、他の海商を頼るしかなく、二人とも、必然的に稿美一門を頼った。

結果、吸われるだけ吸われて、捨てられる形になった。

この二人は稿美佑泰の仕打ちに相当腹を立てていて、稿美一門に対し、連名で十箇条に及ぶ罵詈雑言を書き殴った弾劾状を送りつけている。

三女・雅子は、浅井家の武將に嫁いで、すでに死んでいる。

十箇条の罵詈雑言の一つは、彼女の死について書かれていた。

四女の楓は、なんとバテレンに嫁いだ。

国際的な貿易にまで手を広げ、荒稼ぎしているようであるが、稿美一門とも距離を置いてうまく付き合っている。

五女のたまきは、伊達の武將に嫁ぎ、海商ではなく、船を活用し、兵站を担う船大将の一人として活躍している。

こちららも稿美一門とは上手く利用し合っている。

六女のさゆきは、織田家の侍に嫁いで、船も物資も旦那に賣いで、陸に上がったのんびりと暮らしている。

七女のかごめは、結婚しないつもりだった。

もしも結婚するのなら、さゆきの生き方を真似するつもりだった。

なのに。

かごめは滅び行く雷怨寺家の主に、惚れてしまったのだった。

きっかけは、千姫だった。

かごめは、京で彼女の噂を聞いて、ふと、興味を持ってしまったのだ。

京都島は織田信長が支配しているが、島の主は建前として帝になる。

そして京都には、『おなご出入り自由の法』なる制令がある。

「拙者はおなごが好きじゃ！ 大好きじゃ！」

の雄叫びとともに帝から発せられた『帝勅』であり、織田信長も絶句を持って黙認している。

その為京には、織田家と事を構える武家の女子も、多く住んでいる。

る。

群島中から数多くの女傑が移り住み、帝でさえも震え上がる魔都と化した京都でも、特に武闘派として名を馳せるのが、千姫だった。曲がりなりにも織田信長の領内で、仇敵『豪千』の羽織を堂々とまとい、竜に跨り槍を振るい、織田信長の主催する天下一竜王戦に出場し、居並ぶ竜士をなぎ倒す九狸の姫。

織田信長にも屈しない少女。

織田信雄を半殺しにして、帝にも蹴りを入れた少女。

北陸から来た姫竜王。

彼女はかごめと同じ年だという。

竜技になんて全く興味は無かったけど、かごめは千姫には激しい興味を覚え、彼女が出場する試合を見に行くことにした。

そこで彼女は、伝説となった、森長可との二刻に及ぶ竜技戦を目のあたりにした。

激戦に続く激戦を勝ち抜いて、ついに森長可を打ち倒し、見事『竜王』となった千姫は、甲を脱ぎ、竜装をといて軽装となり、ゆったりと竜を奔らせ、歓声に答えていた。

かごめの前も通った。

かごめより少し高い背丈。

薄い琥珀に日焼けした体躯は、躍動的で。

赤茶けた髪をざっくり後ろで一括りにしている。

笑ったときの屈託のない微笑みと、竜に跨り槍を手にしたときの、精悍な眼差しの差に、かごめはどきどきとした。

それから千姫は、前田慶次郎、柴田勝家など、織田を代表する猛将の挑戦を受け続け、蹴散らし続けた。

かごめは、それら全ての試合を余さず見に行った。

そんな姫竜王が、織田信忠の求愛を蹴ったという噂が京に流れた。姫竜王には、北陸に許嫁が居る。

北陸の蛭族王『雷怨寺豪千』の息子、雷怨寺夢幻。

かごめは父に彼のことを尋ねた。

姫竜王の許嫁とは、いったいどんな人なのだろうか。

「しらん。豪千は傑物だったがその息は凡才だ。興味があるなら自分で見てこい。来年には死んでいる」

父にそう言われ、かごめは、北陸行きの船に乗った。

千姫の生まれ育った世界を見るついでに、その許嫁も見てこようと。

北陸では、かごめは稿美の一門として、手厚い持てなしを受けた。千姫ゆかりの地を旅し、季節が春から秋へと変わる長い滞在となり。

いつしか彼女は夢幻に恋心を抱くようになっていた。

彼の持つ整った美貌と、時に見せる憂いと、はかなげな微笑み。要するに滅びの臭いに当てられたのだ。

この人となら、死んであげても良いかなってちょっと考えた。

浅井に嫁ぎ滅んでいった姉の雅子の気持ち、ちょっと分かった気がした。

なのに今は。

生皮はがれる竜の気持ち、かなりはつきり分かった気がした。

姫竜王が帰ってきてしまったからだ。

夢幻さまと祝言を挙げるために。

かごめの脳裏に浮かぶのは、織田家筆頭家老・柴田勝家との大一番。手にした槍で柴田勝家を吹き飛ばし、竜に仁王立ちとなって高笑を上げる千姫の姿。

その向こうで気を失った勝家と勝家の騎竜が、ぷかぷかと水の上に浮いていた。

わ、わたし、きつと、コロサレル……

そんなわけで、かごとめさんとやはは、船溜まりに停泊した彼女の船に隠れていた。

夜叉門正村

人に会ってこいと言われたものの、千が雷怨寺で生活していたのは十歳までで、しかも雷怨寺城ではなくそこから少し離れたお寺だった。

それに千と神楽が九狸に戻されるとき、『雷怨寺の子供たち』はみな等しく、国元へと帰っている。

寺の主で、千や神楽の育ての親だったご隠居も、すでに他界している。

雷怨寺家譜代の子供たちは探せば城のどこかで見つかりそうだけど、やはり夢幻の次に会うべきなのは、一番の親友だ。

その無二の親友、縞馬火六夜の住む『縞馬の海域』は、ここから二十海里ほど北東になる。

千は、引つ張られて少し赤くなった右頬をさすりながら、船を借りるために、雷怨寺城の港へと向かった。

港の周囲には、無骨な柵が張り巡らされていた。

千は、港の入り口で、衛兵に呼び止められた。

誰の使いか、何のようか、手形を見せろ。まくし立てられる。

「手形かあ」

千は苦笑し、ぼりぼりと頬をかく。

千の暮らしていた京は、港で女性が手形を要求されることはなかったし、何より信長から与えられた『宝人』の称号には、安土城すら自由に入れる特権が付いていた。

九狸家の姫である身分を明かせば、通して貰えるだろうか、とも思っただけ、千は出直すことにした。

城に戻って典禪にでも頼んで、手形を発行してもらえばいい。

「出直すよ」

そう言つて千は背を向けた。一步步いたところで、その腕を後ろから捕まれる。

千は、振り返った。

睨み付けよう、として怪訝に眉を寄せる。

千の腕を掴んでいたのは、手形を要求した二人の衛兵のどちらでもなく、走つてきたのか、荒い息を吐いた長身の侍だった。

じつと、千を見つめて、千もその男を見上げた。

「もしかして、千？」

「……正村、か？」

千がその名を上げると、男の顔がぱつと輝いた。

「やっぱ千だ！」

夜叉門正村。
やしやかと まさむら

『雷怨寺の子供』の一人で、つまりは隠居齋に育てられた千の仲間だ。

千が雷怨寺を去る頃には、十七歳だった。

だから、今は——二十二歳か。

千や夢幻より年齢が離れていたせいもあり、彼は雷怨寺党にも九狸党にも属さず、両党の間で書状を運んだり仲裁したりと、中立の立場を取っていた。

千や夢幻の頼れる兄貴分だ。

その兄貴分は、その場にひざまずいて、頭を垂れた。

「お懐かしゅうございます。奥方様」

「……………おくがたさま」

千が頬を染めて、うつむく。

「違いますか？ 千姫様が殿との婚儀に帰ってきたと、城下で噂になつてますよ」

「……………姉ちゃんか？ その噂の出所？」

「さあ。どうでしょう。人の口に戸は立てられぬもので」

話す二人の周りで、空気の質が変わっていた。

船溜まりに満ちていた喧噪が静まり、千の名が伝播していく。

人々の視線が二人に、いや、千に集中していく。

その上、千を呼び止めた衛兵にその場で土下座して詫びられ、千は頭を抱えた。

「勘弁してくれ。土下座は止めてくれ」

言っても衛兵は地に頭をこすりつけることを止めず、千は救いを求めるように、正村に視線を向けた。

正村から指示され、やっと二人の衛兵は顔だけを上げた。

「……………正村もいい加減、立ってくれ」

名家の侍である彼がまだ跪いてるのが、衛兵たちが起きあがれない理由の一つであるのは、間違いない。

「奥方様が、そう仰るのですたら」

正村が立ち上がり、衛兵たちも頭を下げ下げ、仕事に戻っていった。

「その奥方様も止めてくれ。恥ずかしい」

千は縮こまりながら言う。

「慣れていたかなくてはなりません」

「だいたい、まだ婚儀はあげてない。その、あれだ」

さすがに振られたとは言いにくく、千はごにごにと口ごもる。

「なに。もうあげられたも同然です。数日もすれば北陸中の人間が知りますよ」

「……………北陸中」

千はうなだれた。

本当に結ばれるまでは、出来ればそつとしておいて欲しい。

「それで奥方様。何か、ご用でございましょうか？」

「船を借りたいんだけど………その前に奥方様は止めてくれって」

「かしこまりました。千姫様」

「……千姫様も、やめて。千で良い」

「しがない城勤めの身でして」

正村は沈痛そうに顔をゆがめ左右に振る。

夜叉門家は雷怨寺家譜代の重鎮だが、四大宿老家の一つである九狸家と比べると、家柄で劣っていた。

しかし彼の声は明らかに楽しそうだった。

「ですが千姫様がそこまで言うのなら仕方ないから千と呼ぼう」

正村は、ははははと大笑して、しばしと千の背中を叩いた。

「助かるよ」

少し前によろけながら、千は本気で感謝した。

「どの船でも使ってくれ——出来たら積み荷の積んでいない船を。」

戦船でもいいぞ？ 何なら殿の御座船を使うか？」

「出せるのか？」

千は少し驚いた。

御座船を許可なく自由に出せるくらい、正村は出世しているのか。

正村はうなずいた。

まじめな顔で、

「場所は知っている。警備もさほど厳重じゃない」

「御座船は遠慮するよ。普通の屋形船がいいな」

千は笑顔で断った。

「そうか。俺も一緒に行きたいが、あまり千と仲良くしていると殿

様が妬く。出世に響くからな。すまん。おい、左平太！ 千の船選びにつきやってやれ！」

大声で呼ばわって、若い侍を手招きする。

突然の指名にうろたえる侍を置いて、「じゃあな！」と正村は城に向かって走る。

相変わらず強引でせっかちだ。

何度かちらちらと振り向いて手を振っていたが、すぐに見えなくなつた。

港の中は、活気に満ちていた。

小型の船から物資が下ろされ、大型の戦船に積み込まれていく。軍装した武士の数も多く、水夫が忙しく働いている。猛りきつた、戦の前の気配だった。

（戦が始まるな）

千はそれを感じながら、もの悲しく港の光景を見た。

戦国の世にあつて、戦は成り上がるための最上の手段だ。

豪千公が健在だった当時、港にはどう猛な笑顔が溢れていた。

千が京で交流を持った織田の武将たちもそうだった。

出陣する彼らの顔は、誉れと栄達への渴望を宿していた。

しかし今、港に並ぶ顔という顔には、いらだちが見え隠れしている。

千の後ろを、緊張気味に左平太が付き従う。

その左平太に、千が声をかける。

「忙しそうだったな、正村。あいつどんな仕事してるんだ？」

「夜叉門さまは、主に武具を中心とした物資の買い付けと、輸送船

の護衛を担当なされています」

「正村が…… 武具の買い付け？」
ぎよっと千が立ち止まる。

正村は仲間内でもずば抜けて物を見る目がなかった。
かつて「すごい名刀を手に入れたぜ！」と竹光を持ってきたほどの男だ。

銅の鞘には竜を撲殺できる破壊力があつたため、「名刀鞘殴り」
として親しまれた。

「はい。夜叉門さまほど審美眼の優れた方はおられません」
力強く、左平太が答える。

「……ほほう」

きつと姉の神楽商店に丸投げしているのだろう。

正村は豪快型の人間だが、物の目利きや金額の交渉ことが苦手な
のを、彼自身よく理解していた。

子供の頃も、「鞘殴り」以降は神楽を頼ることが多かった。

積み荷を降ろし終えたばかりの適当な大きさの屋形船を千は選ん
だ。

「それで、どこに行かれますか？」

一緒に付いてくるつもりか、左平太はその船に乗り込み、尋ねる。

「しじうま
縞馬」

「し、縞馬の海域ですか？」

青ざめた顔で、左平太は固まった。
不思議そうに、千は左平太を見る。

「奥方様はご存じないかもしれませんが、雷怨寺と縞馬は、今、交

戦状態なんです」

申し訳なさそうに告げる。
初耳だった。

「あの海域に雷怨寺の船が近づくと、沈められてしまっんですよ」

千は目を細めて、遠く、縞馬の方角を見つめた。
左平太に向き直り、

「この戦の準備、縞馬とか？」

「いえ、紅蟹への討伐軍です」

千は軽くため息をついた。
縞馬でなかったことには、少しほっとした。
しかし紅蟹にも友達は居る。

「縞馬に行くのは止めるよ。ちょっと竜でそこらを流してくる」
作り笑顔で手を振って、千は愛竜が待つ竜舎に足を向けた。

竜王号、千柳

北陸最大の名城、雷怨寺城の縄張り内には、縦横に水路が走っていて、あちこちにある城郭や砦、港や船溜まりや竜舎を繋いでいる。千は、もっとも豪華な竜舎に京から連れてきた愛竜を預けていた。ここには、夢幻の竜も世話されている。

一頭ずつに大きな小屋が拵えられており、小屋の側には大きな海水の竜場がある。

竜場は竜のための人工の水溜まりだが、専用の水路で海や御座船が停泊している港とも繋がっている。

千が竜舎に足を踏み入れると、一頭の竜が、竜場の海面から長い首を伸ばして、

『きゃーーっ』

と嬉しそうに鳴いた。

滑るように泳いでくると、そのままの勢いで陸に上がり、しつぽを引きずりながら、前後四枚のひれで器用に歩み寄ってくる。

名は、竜王号・千柳。せんりゅう

千も竜王だが、この竜も竜王だ。

千が七歳の時に豪千公から賜った血統書付きの名竜で、北陸、京、そしてまた北陸と、姉を除いて誰よりも長い時間を共に歩んできた相棒だった。

初めて会ったときは幼竜だった千柳も、今では千を追い越し一足先に立派な大人となっている。

体重では千の十倍を超えている。が、まだまだ甘えただ。

千柳が、千のほつぺに鼻先をこすりつけてくる。くすぐたく、そしてちよつと痛かつたりする。

千はだらしなく相好を崩した。

一緒の船で旅してきたし、今朝別れたばかりなのに、なんだか無性に懐かしい。

千が千柳の頬をばんばんと手で叩くと、千柳は心得て身体を離れた。千は竜装を整えるために、小屋へ向かう。

その後を跳ねるように千柳が付いてくる。

布の下着に麻の内装、その上に鹿の毛皮の中装、その上に竜鱗の鎧を着て、竜足袋を履く。

すね当てもきつちり留めて、兜を被る。

外装は全て竜の鱗だ。

強度ばかりは鋼に劣るが、そこそこの重さにそこそこの柔軟性、高い保温性と優れた耐水性、そして錆ない。

水上では竜鱗を凌ぐ素材はない。

全部の装備を終えてから、千は腰に短刀を差し、鹿革の手袋をする。

竜の鱗は良く滑るため、足袋の底と手袋には向いていない。

手袋には、牛や鹿や羊などの皮をなめしたものが使われる。

防御力を高めるため、外側の指や甲を竜鱗で覆った手袋もあるが、指先の動きが僅かに鈍るため、千は好まなかった。

いまずぐ竜技会に出られるほどの完全装備だが、別に千は戦闘を想定しているわけではなかった。

竜は、海上を奔るのではなく、水を切るように泳ぐのだ。

竜の体の半分以上は海中に沈んでいて、竜に乗っている竜士の膝

から下は、常に流れる水に浸かった状態になる。

膝から上も、水しぶきを盛大に浴びるし、濡れたところに潮風を受ける。

寒さや水圧。それらを考慮すると、たとえ夏でも軽装で竜に跨り遠出をするなど、大馬鹿者のすることだ。

千柳に鞍をしつかりと固定し、ふと思い立つ。

「飯食つていこう」

特に腹は減っていなかったが、用心のために軽く食べていくことにした。

竜舎に詰めている世話師の一人に簡単な握り飯と千柳のための魚を頼んで、千は手袋だけ外し、腰掛けに腰を下ろした。

九つの夏の夜、千は四人の子供たちと、竜に乗って縞馬の海域を目指したことがあった。

正村と虎狼、火六夜に仙石と、竜技に秀でた者だけで誘い合って朝早くに寺を抜け出した。

もちろん、完全装備だ。

五刻近い時間をかけて、たどり着いたときには日が暮れかけていた。

海流を読み切れなかったことが最大の原因だ。

右から左、左から右、果ては前から後ろへと、変わり続ける大波に翻弄され、たどり着く頃には身体のアチコチが痛かった。

外洋と沿岸の違いを、その日初めて千は体感した。

あの夜食べた鍋のうまかったこと。

縞馬火矛蔵に酒を勧められ、飲んで吐いたのも今では良い思い出だった。

千は腹ごなしを終えると、余った握り飯を笹に巻いてから革袋に入れ、竹の水筒に少し酒の混じった水を注ぎ、竜舎を後にした。

縞馬の海域

雷怨寺島から二十海里ほど東北に海を渡れば、縞馬の海域にたどり着く。

雷怨寺豪千の親友にして海賊王、縞馬火矛蔵しまつま かむぞうが率いる縞馬党の本拠地である。

縞馬の海域には、干潮時では三千余もの島が、入り組んで乱立している。

それが満潮時では、千五百島程度にまで減少する。

潮が満ちてくると、暗礁だった海域は、小船が航行出来る程度に深くなり、島だった場所が、波に覆われ暗礁に変化する。

潮の流や渦の巻く場所も時間や季節に応じて変化する。

魚は豊富に生息しているが、それほど漁には適しない。

小舟ですら入り込めない海域が多く、海底も荒々しい。

下手に網を投げ入れると、尖った岩礁に引き裂かれ網を破ることになる。

魚はたくさん生息しているのに、人が漁を出来る漁場は限られていた。

そのお陰で、竜たちは人と魚の取り合いをする心配もなく、豊富な海産物をむさぼり食うことが出来る。

縞馬の海域は日本群島でも有数の竜の産地であり、縞馬党は北陸海域で最強の海竜軍団である。

かつて遠かったその縞馬の海域に、十四歳となった千と千柳せんりゅうは、

一刻半でたどり着いていた。

「はっけん」

無数の島々を眺めながら、千は、竜の上げる水しぶきの中で、うきうきと微笑んだ。

北陸のおとぎ話では、縞馬の海域は、遙か昔、一つの大きな島だったと言われている。

悪事ばかり働く縞馬党に、龍神様がお怒りになられ、島に雷が落とされた。

島はバラバラに砕けて海に沈んだとか。

三千余の島をまとめて『縞馬島』とも呼ぶのは、そのころの名残だとか。

それ以後も縞馬党は悪事を止めませんでした。
で、おとぎ話は終わるのだが。

千は、暗礁に紛れ込まないように、島の間隔が広い海域を選んで悠然と竜を進めていく。

単騎で野良竜の巣に紛れ込むと、さすがに千と千柳でも命に関わる。

潮の満ち引きで気軽に風景の変わる海であり、最奥にある火矛蔵の館までの道は、把握していなかった。

そこいらに縞馬の人間が居るはずだ。

向こうから見つけて貰うのをのんびり待つ。

しばらくすると、島の陰から竜に跨った男たちが五人。勢いよく繰り出してきた、千の周りを取り巻いた。

そろって緊張した面持ちだったが、特に敵意は感じられなかった。

「ようー！」

覚えのある顔はなかったが、千は気軽に手を挙げた。

「もしかして、千姫か？」

遠慮がちに一人の男が問う。

「そう、九狸千。久しぶりに帰ってきた。火六夜かむよいるかな？」
男たちは顔を見合わせ、

「ひゃっはーーーーー!!」

竜の上で両手を振り上げ、歓声を上げた。

「姉御の言うとおりだ！」

「豪千姫こうせんひめ帰還せり！」

「旗揚げじゃーーーー！」

ずいぶんな歓迎だった。

千もなんだか楽しくなる。

「旗揚げじゃーーーー！」

と一緒に拳を振り上げた。

彼ら五人は持ち場を放棄して、千を火矛蔵の館へと先導してくれた。

即席で家来になった五人とは館の前で別れた。

最初に会った五人の陽気さ比べると、火矛蔵の館は、通夜のよ
うに沈み込んでいた。

「……千か」

千の記憶の中では最高に豪快だった男、しまうまかむぞう縞馬火矛蔵は酒に濁った

目で千を見上げ、酒臭い息を吐いた。

大広間のあちこちで男たちがちびちびと酒を飲み、または、だらしなく眠っている。

酒樽があたりに転がっていた。

宴会の後、というにはあまりに陰気だった。

縞馬の酒宴はもつとこう、無意味に陽気だったはずだ。

火矛蔵は、しばらく値踏みするように千を見つめた後、

「火六夜なら裏の竜場にいる」

それだけ言つて、千に背中を向けると、ぐびりと酒を飲む。

一言も言葉を発することは出来ず、千は館を後にした。

縞馬火六夜

屋敷から半里ほど離れた竜場に、千は千柳に乗って赴いた。縞馬の竜場は天然の入り江に手を加えて作られているが、入り口は狭く、海門が備わっていて、嵐や満潮時には堅く閉ざされる。今は開いているその門を、千はくぐった。

三里四方の広さがあるその入り江には、縞馬が飼ってる竜が何十頭となく泳いでいた。

中には人を乗せている竜もいる。

縞馬党は三千頭をこす竜を飼っているが、この竜場で飼われているのは二百頭くらい。

餌を食いに出かけている竜もいるだろうが、大多数は陸上の小屋で休んでいるはずだ。

おおざっぱな縞馬党でも、さすがに全頭を放し飼いにすることはない。

千はゆっくり竜場を進みながら、友達の姿を探した。

火六夜かむよを見つけたのは簡単だった。

千は年相応に小柄だが、火六夜は相変わらず年以上に小柄だった。筋骨隆々が多い縞馬党の中では、竜に乗っていてもよく目立つ。

「火六夜ーーーー！」

千は千柳のあぶみから足を外し、千柳の背に立ち上がって両手を振った。

向こうも直ぐに千に気づいた。

「千ーーーー！」

竜の上で、火六夜も手を振った。

二人を乗せた竜は、互いに近づいていく。

髪も短く、服装も男たちと同じために、遠くから見ると可愛らしい少年に見えた縞馬火六夜も、近づいていくと、可愛い女の子の顔になっていた。

竜を寄せ合つと、二人は飛びつくように抱き合つてそのまま海水に落ちた。

陸に上がつて竜装を解いた千を、じろじろと火六夜が遠慮無く眺める。

「……胸がちよつと大きくなつてる」

「……標準だと思うけど」

胸元を隠しつつ千は言う。

実際には標準より少し、小さい。

五年も経つて身長から何から何まで変わっているのに、まずはそれかと身を引きつつ、千は火六夜の胸元を見て、微笑んだ。

「火六夜は相変わらずだね」

拳が飛んできた。

かわしたところに足を払われて、どすんと尻餅ついた千のお腹に、火六夜が跨つて座る。

「げふ」

「千でなければ、百発は殴ってる」

顔を近づけ、じとりと見下ろす火六夜に、千は苦笑する。

火六夜は猫みたいに身軽で、素手での喧嘩はめっぽう強かった。今はもつと強くなっているようだ。

ここは機嫌を取っておこう。

千はにっとな笑い、

「でも顔はずいぶんと美人になった」
褒めた。

「えっへへ」

火六夜ははにかみ、

「千は前より男らしくなったよね」

「……褒めてる？」

「もち！」

「……とりあえずどいて」

「えー……？」

「えーじゃない」

「へへへっ」

と火六夜を鼻をこすってから、どいた。

ひとしきり懐かしい昔話を話し合ってから、話題は京での千に移った。

「織田信忠、半殺しにしたんだって？」

「してない。するわけ無いだろう」

「なんだ、やっぱり姉御の創作か」

「ちよつと、ひっぱたいただけだ」

火六夜から顔を背けて、聞こえないようにぽそりと、千は少し顔を赤めて呟いた。

半殺しにしたのは、弟の織田信雄の方だ。

「え？ なに？」

「いや、何でもない。それより姉御ってだれ？」

火六夜には火無那かむなという名の兄はいるが、姉は居ないはずだった。

「神楽のこと。最近うちの若いのに神楽がそう呼ばせてるの」

千はため息をついた。

「うちの姉ちゃんとは相変わらずどこでもやりたい放題だな」

「あははっ。そだね」

でもね、と火六夜は声を沈めて続けた。

「神楽は、なにか企んでるよ？ 千を巻き込もうって。きっと、ずっと前からさ。何かをやるつもりだよ」

「知ってる」

姉が久しぶりに千を尋ねてきて、熱心に帰郷を口説いているときからそれは感じていた。

いや、彼女はそれ以前、雷怨寺を離れたあの日から、揺るがずただ一つのことを胸に秘めている。

千が少し、揺らいでしまっただけだ。

「千ってさ。まだ夢幻のこと、好きなの？」

「……別に私は、特に夢幻のこととか何とも思っていない」

「雷怨寺に嫁入りするんだって？」

「……まだ決めてない。ちよっとどうしようか悩んでる。まあ、あいつ次第かな」

千は赤い顔して、そっぽを向いた。

「あんなのやめて、私のところにおいでよ？」

「……………あのねえ」

千はがつくり首を垂らした。

時たまそんな感じの女も京にいたが、火六夜には想い人（男）がいる。

「それが駄目なら、千は京に帰った方が良い」

「……………」

火六夜は真剣な目で、千を見つめた。

「うちと、雷怨寺のこと、もう知ってるよね？」

「うん。喧嘩してるってきいた」

「一年くらい前かな。向こうから攻めてきた。お父さんもあんなだから、返り討ちにしたけど」

竜場の岸边でうつむき、火六夜は足をぶらぶらとする。

「本当はその前から色々あったの。方針の違いで喧嘩したり、敵陣に入りすぎた私たち、見捨てられたこともある。私たちも動かなかったこともある。少しずつ仲が悪くなって……疎遠になって……島に引きこもるようになって……食べるお米が無くなった。だからお父さんが雷怨寺の荷を奪って、そしたら夢幻たちが攻めてきた」

要領を得ない説明だったが、何となく千にも分かる。争いたかったわけじゃない。

どちらも引くに引けなくなっていたのだ。

「ほら、もともと私たちって、他の武将たちとは仲が悪かったから。はつきり言っと、嫌われてた。海賊だしね、私たち」

縞馬党は近隣を荒らし回る海賊だった。

それを豪千公がどうせならわしとお前で日本中を荒らし回ろう、と上等の酒や珍しい料理を持ち込んで火矛蔵を口説いたのが、北陸最強雷怨寺が真に結成された始まりだと、千は豪千公と火矛蔵から酒の席で聴いていた。

二人は悪友であり、主従ではなかった。

「うちの父と豪千公は主君と家来って言うより友達みたいな関係だったし、別にわたしたちも雷怨寺に服従してたわけじゃないし」

しかしそれは他の武将には通じない。

九狸にしろ紅蟹にしろ、北陸で幾つもの島を従える大名だ。

豪千公だから従った。

雷怨寺家の宿老や家老たちにしてみれば、公が死んで北陸のたがが弛むその時、海賊あがりの好き勝手を見逃せるわけがない。

お互いにお互いの立場を分かっている、それでも引くに引けない。豪千公という一人の英雄が作り上げた世界は、彼の死とともにバラバラとなる運命だった。

「だから今はこの海域を通る船からは通行料を取って、雷怨寺家の船は、沈めてる……雷怨寺の船は寄りつかないし、他の船も、滅多に通らないけど。……この島を堂々と横切るのって、今では神楽くらいだもん」

火六夜は寂しそうに呟いた。

「今は神楽が手配してくれるお米とかで食いつないでるけど。昔ほどではないけどさ、でもわたしたち少しずつ、海賊に戻ってる。お父さんはもう武家に仕える気はないって。豪千以外と連む気はないって……何もかも、壊れちゃった」

火六夜は身体を後ろに倒し、寝転がった。

空を見上げ、

「もうさ。北陸は、もう千の知っている北陸じゃないんだよ？」

「知ってる」

千は呟いた。

みんな、変わってしまった。

千も、神楽も、火六夜も、仲間たちみんな。

雷怨寺豪千が海底に沈んでから、ゆっくりゆっくり、何もかもがゆっくりと、壊れていったのだ。

北陸に住むものたちは、五年かけてじっくりそれを眺めてきた。

千はたった一日でそれを見せつけられる格好になった。

（いや、違うか）

千は心の中で、ため息をついた。

一日で思い知らされたのではない。

今日、思い出したのだ。

かつては千もその中にいた。

千は北陸を離れる前、確かにその空気を吸っていたのだ。

豪千公が遠い南の海で沈んでから漂い始めた、明けない闇の気配。

唇をかみしめ血の糸を流す夢幻と、それを眺めていた千。

あの頃の二人は、先の見えない闇の中で、無力に佇んでいた。

夢幻と再開して、千はその闇を思い出した。

その闇はより深くなって雷怨寺城を、北陸を包んでいた。

「千に会えて嬉しいけどさ。ちょっと複雑かな。千が、雷怨寺になっちゃったら、敵同士になっちゃうね」

空を見上げながら、流れる雲を見上げながら、千は、火六夜の声を聞いていた。

「懐かしいよ」

千のつぶやきに、

「そうだね、懐かしいね」

火六夜も、言葉を重ねた。

千は千柳に跨って、火六夜を正面から見据え、微笑んだ。

「また、来る」

火六夜は、ほんの僅かに目を泳がしたが、すぐに千を見つめ返し。
「うん。待ってるよ」

嬉しそうに、目の端に涙を浮かべ、微笑んだ。

千と別れ、火六夜は、屋敷に戻った。

辺りには酒樽が転がっている。

が、座っているのは、火矛蔵の一人。

他の男たちの姿はどこにもなかった。

火矛蔵も、手にはもう杯を持っていない。

「……お酒は？」

火六夜が尋ねた。

「飲み尽くした」

背を向けたまま火矛蔵がこたえた。

火六夜はあきれた。

昨日神楽の使いがもたらした酒樽は、五十近くあったはずだ。

「千はどうした？」

「帰ったよ、もう」

「そうか。帰ったか。ふん、帰りよったか。小娘が」
火矛蔵は吐き捨てるようにつぶやいた。

その声は少し複雑で、火六夜には寂しそうにも、嬉しそうにも聞こえた。

覚悟

日が暮れる前に雷怨寺城に帰還した千は、湯浴みしてその日の疲れを落とした。

夢幻は家老衆との評定が有ることと、晩飯は、神楽と千の二人だけとなった。

鍋だった。

鍋の三分の一には、蟹が入っていた。

「姉妹水入らずで鍋をつつくのも久しぶりですね」

「京でもけっこうこんなだったけど？」

鶏団子を箸で摘みながら、千が言う。

放浪癖のある姉は殆ど京を離れていたが、来ると必ず蟹鍋を要求された。

「ほほほっ。京と北陸では食材が違いますもの」

神楽は蟹足を皿に取り、上機嫌だ。

「相変わらず蟹が好きだね、姉ちゃん」

「ほほほっ。私はこの蟹のために北陸で生まれて、北陸で死んでいきます」

「……難儀だね」

群島中から豊富な食材と奇抜な料理の集まってくる京の方が、千には合っていた。

「姉ちゃんさ。始まるんだね、戦が」

「あら、気づきましたか？」

「港は戦の準備一色だった」

千が白菜を皿に取り、神楽が蟹足をかじり、

「ええ。始まりますね。といつても戦国の世ですから、小競り合いなら毎日ありますけど。紅蟹が裏切ったのは知っていますかね？」
「うん」

「まあ、紅蟹の裏切りが早く発覚したのは不幸中の幸いでした。北ノ庄で柴田勝家が北陸侵攻軍を結成しつつありますが、幾分準備不足です。織田の大艦隊が北上してくるのは、まず大方の予想通り来年の春でしょう」

雷怨寺豪千、上杉謙信の上京を完全に封鎖しきつた『北ノ庄』は、七つの島から構成される織田家最大の城塞群だ。

柴田勝家が統率するその守兵は、精強ながらも防衛に特化した軍であり、遠征に適した艦隊は常備されていない。

北陸侵攻軍の編成が形になるのは、早く見積もって夏の終わりになる。

一度の海戦で勝負が決するなら、編成次第に押し渡って来ようが、雷怨寺家はそこまで弱くなく、北陸も狭くない。

まして冬の北陸は波も高く、雪が積もる。

中央と比べ小さな島が多く、海岸線も海流も複雑だ。海流と川の流れが入り交じり大渦を形成する難所や、海面下の暗礁などにも事欠かない。

大軍を養う糧食や弾薬などの物資は、継続的に補充しなければならない。陸上部隊や竜武士団も、船で輸送しなければならない。

さらに北陸と中央を分かちつ広大な九頭竜海は、冬の間荒れに荒れ、運行不能となることが多い。

秋に北陸へと渡ってしまえば、冬の間、その部隊は孤立してしまう。

艦隊の整備が整い次第、数度、艦隊を派遣してくることはあり得ても、本格的な北陸侵攻・駐留は、堂々と盤石の体制を整えてから、

来年の春以降になるはずだ。

雷怨寺家としては今年の内にも本格的な侵攻が始まった方がまだ対応しやすいが、織田には紅蟹を助けるため、多大な危険を冒す義理はない。

「雷怨寺としては、今のうちに紅蟹を討って、北陸をまとめ上げる必要がある。というわけで、七日後に、夢幻殿が紅蟹討伐軍を率いて出陣します。九狸、温犬、笹雉の三宿老も参加する大規模な戦になりますね」

「姉ちゃんも行くの？」

「まさか……もぐ」

神楽は笑い飛ばした。手ぬぐいで口と手を拭きながら、

「わたしは蚊帳の外です。ちなみに、雷怨寺家の方策は家老衆と宿老家が話し合って決めています。わたしどころか、夢幻にも未だ決定権はありません……何ですかその目は？」

「姉ちゃんが良くそれでおとなしくしてるね」

鍋をつつきながら千が言う。

「おほほほ。おとなしくしていたわけではもちろんありませんことよ」

口元に手を当てて、笑う。

蟹足を取る。ばきりと折りながら、

「私は一度、夢幻直属のお伽衆を作ろうとしました。何人か賛同者は獲られたのですが、せっかく獲た賛同者が家中で孤立させられてしまつて、何にもなりませんでした。それからは極力秘密裏に協力者を作るようにして、表に出るのは私だけにしています」

言い終えてから、もぐもぐと食う。

戦国の世で、武勇によつて築かれた序列。

それを覆すには、他者を納得させる実績が必要だった。

神楽には実績がないし、その実績を作るための手勢もなかった。

九狸家の当主は、あくまで二人の父、斑尾だ。

「ですが千。私は自らの無力さと一緒に、一つ、学習しました」

神楽は挑発的な笑みを浮かべ、千を見た。

「それはこの北陸での豪千公の大きさ、豪千公が戯れにお決めになった、雷怨寺夢幻の軍師、という称号の重みです」

神楽はまた鍋から蟹足を取る。

「蟹以外にも食べなよ」

「しゃらくさい」

神楽は蟹身を噉つてから、

「活動を始めた当初、私が何かをすれば、そこいらの年寄りから勝手なことをするなと小言が降ってきたのですが、私は雷怨寺の軍師です、それは豪千公がお認めになりました。その一言で彼らはそれ以上の議論を封じられるのです。ふっふっふっふっふ……もぐ」

「ふふふつて。……姉ちゃんらしいけど……」

「まあ私が何を決めても、向こうも従いませんからお互い様ですが、少なくともあちらも私を従わせることは諦めました」

雷怨寺夢幻の軍師と名乗れること、そして自由に北陸を動けることで、神楽は海商の真似事をして活動資金を得ながら、貴賤を問わずに同志を募っていた。

最近では物資の調達、情報収集や操作、各種調停や裏工作での貢

献から、典禅を中心とする家老衆にも認められつつはある。

「そんなわけで、私は此度の戦には無関係ですよ。おほほほっ」

「勝てると思う？」

「千はどう思います？」

「正面からぶつかれば」

「そうですね。まず負けないでしょう」

軍勢の規模なら、今でも雷怨寺は北陸最強だった。

豪千公の上洛時、北陸の守備に艦隊の大半を残した九狸家は、人材も、主力艦隊の損傷も少ない。

温犬家は四つの宿老家ではもっとも領土が大きく、兵の数も雷怨寺に次いで多い。

そこに陸上戦、船上戦に置いては戦国でも屈指の笹雉家が加わる。

「紅蟹が弱いとは言いませんが、真つ正面からぶつかればまず雷怨寺側の圧勝で終わるでしょうね」

「紅蟹は織田が来るまで籠城して耐えようとするだろうね」

「さて」

「長い戦いになりそうだね」

「……」

神楽の前には、三杯の蟹味噌が並んでいた。

神楽が腕まくりする。

蟹の甲羅を一つ手に持ち、至福の表情で啜り始めた。

千は、ゆっくりとため息を吐いた。

答えない姉の態度から、もう一つの答えが見えていた。

千は、鍋に米を入れて、雑炊の支度に取りかかった。

七日後には、夢幻が出陣する。

たとえ何事もなく紅蟹との戦争に勝利しても、来年には織田の軍勢が攻めてくる。

子供の頃の淡い約束を果たすために、千は帰ってきた。

頭の中は空想のお花畑でいっぱいだった。

その世界での仲間たちは、千を暖かく迎え入れてくれた。

しかし現実の北陸では、かつての仲間たちは大人になり、敵味方に分かれ戦っている。

これから北陸で多くの血が流れる。

美しくない赤い血が。

その中心に、夢幻がいる。

寺でも、京都島でも、千はひたすら自由に生きてきた。

しかし夢幻に嫁ぐということは、千も雷怨寺家に縛られることを意味する。

北陸に帰ると決めたときに、覚悟は決めてきていた。

死ぬ覚悟も、織田と戦う覚悟も。

しかしこの七日間で、千はもう一度覚悟を決め直す必要があった。甘い空想の中の死ぬ覚悟だけでなく、仲間を死なせる覚悟、殺す覚悟も求められていた。

その夜、千はなかなか寝付けなかった。

何だか色々と気が重い。

横ではくうくうと姉が寝息を立ててる。

全部こいつのせいだ、という視線でじとりと眺めてから、千は布団の中で天井を見上げた。

「……静のやつ、元気にしてるかな」
へにがにしますか
紅蟹静。

千よりも一つ年上の紅蟹の姫。

泣き虫で怒りんぼで、鈍くさい奴だった。

雷怨寺が勝利すれば、きっと彼女の命もない。

かといって雷怨寺が負ければ、夢幻が死ぬことになる。

「……嫌な戦争だ」

それでも、帰ってきたこと自体に、後悔はない。

現実から目を背け、再会せずに北陸の仲間たちと永遠の別れを迎えていれば、それこそ死ぬまで後悔するはずだ。

千はごろつと転がった後、むっくりと起きあがる。

窓際に移って、障子を開けて、外の景色を見る。

月には雲がかかっていて、暗い。

千と姉が寝泊まりしている部屋は、七階の大天守閣と渡櫓で繋がった三つの天守の一つで、四階建ての『桜間天守』の4階だった。

豪千公の愛人だった桜様がお住まいになっていた由緒正しい天守で、などと姉が説明していたのが、まだ耳に残っている。

豪千公は足しげくこの部屋に通って逢瀬を遂げていたから、だから夢幻も来るかもよ？ と姉がおいやらしいお顔でお笑いになっていた。

最初は雷怨寺城に数ある邸宅の一つを仮住まいとして指定されたのだが、姉がそれでは夜這いに苦労する、お互いに困るでしょう、と大天守に隣接したこの部屋を勝ち取っていた。

押し切られたと言うことは夢幻も………

………千は首を横に振った。

ただ単に姉の押しが強すぎて、夢幻が押しに弱いだけだ。

「はあ」

輪郭だけが暗闇に浮かぶ大天守を見上げて、千はため息を吐いた。相手があの夢幻だと、夜這いなど期待できない。……別に期待してるわけではないけれど。

だいたい隣に姉が寝てるし。

窓枠に頬杖をついて、暗闇の大天守を見上げる。

「夢幻は私のこと、どう思ってるんだろう？」

二人は愛し合っている、そう姉は言っていたけど、今日の夢幻の態度からは、そうは思えない。

「半分は本当とか、笑いながら言ってたけど」
姉の言うことはいつも話半分で……。

「あれ？」

千は首を傾げた。

「半分は本当って……つまりそれは夢幻の方は私のことを……」
千は首を横に振る。

「いやまで、までまで私。わたしはあいつのことなんて何とも思っていないわけだからして。夢幻のやつが私のことを、すごく好きってこと………はあ、まあいいや」

千は不毛な一人議論を断ち切ると、立ち上がって、部屋の隅から、習字導具を引っ張り出した。

窓際の机に置いて、きゅきゅきゅと、墨をすり、筆につける。
寝ている姉の側まで行くと、神楽の両頬にひげを三本ずつ書く。
額に「姉」と書く。

「うん」

千はあごに手を当てて、微笑んだ。

「少し気が晴れたかな」

恨みはたまる前にこまめに晴らした方が健全だ。

千は窓辺へと戻って、習字導具を片づけようとして、見上げた。

大天守閣の六階、廻縁。

月明かりに照らされて、人影が見える。

夢幻だ。

表情までは見えないけど、月を見上げ、……いや違う。
顔の角度はこちらを向いている。
千を見下ろしていた。

雲が流れ、月を隠し、また月が出て。

しばらくの間、二人は見つめ合っていた。

先に視線を逸らしたのは、千だった。
習字導具をかたづけて、元の場所に片づける。

また、窓際に戻り、その場でだらしなく頬杖をついた。

あいつの横に行きたいな。
ふと思った。

どうせなら一緒に月を見上げたい。

もう一度、夢幻の部屋を見上げる。
夢幻の姿は、もうそこにはなかった。

「なんだあいつ。……………死ね馬鹿」

千は障子を閉めて部屋に戻り、布団に寝っ転がる。

こんな些細なことなのに。

まだ少し、胸がときどきしていた。

裏切り

九狸家の御座船・夢狸号の居室にて。

宿老の内の二人、小柄で福狸のような顔をした九狸公と、それより少し若いさっぱりとした伊達男の温犬公が、顔をつきあわせていた。

数日内にある紅蟹討伐、その時における織田への寝返りの会談だった。

出陣のため、たまたま海上で両家の船団が出会ったことになっている。

期日の決まった集合だ。

大艦隊が利用できる航路は限られており、不審はない。事が事だけに万が一の漏洩も許せない。

家中で打ち明けた者もごく少数。

この件に関して九狸公、温犬公が直接話し合うのも今日が始めであり、おそらく、今日が最後になるだろう。

すでに紅蟹とも話は付いているが、具体的な打ち合わせはない。

何よりも重要なのは、露見しないことのみだ。

九狸と温犬が連動すれば成功は確実であり、緻密な謀略は必要ではなかった。

慎重の上にも慎重に、事を運んでいた。

「困りましたなあ。九狸公。この時期に、雷怨寺家と縁結びですか」
まずは千のことが話題になった。

「たかが小娘の戯れ言じゃ。温犬公が心配なさるようなことではない」

「たかが小娘ですか。さて、それが織田に通じるかどうか」

「なに。千の事は親であるわたしに任せていただきたい。出兵までには固く言い聞かせておきますから」

「ええ。お任せしますとも」

温犬公の言葉に、九狸公・九狸斑尾は無言で頷いた。

万が一にも夢幻なんぞと婚儀を挙げさせるわけにはいかないが、千を死なすつもりもない。

斑尾は千を織田家に嫁がせることで京への栄達を。

温犬公はそれに便乗することで家の安定を望んでいた。

その為、九狸公の方が、温犬公よりも今は強い立場にあった。

それでも、

「千姫どののことも、神楽どののことも、くれぐれも間違いのないようにお願いしますよ。くれぐれも」

ちくりと、温犬公は嫌みを追加した。

斑尾は表情を変えずもう一度小さく頷いた。

それから二人は手早く情報交換と打ち合わせを行った。

「おのれ神楽が！ 物の価値の分からぬ小娘が！」

温犬公との会談を終え、一人になると、九狸斑尾はぶり返してきた苛立ちに、手にした杯を投げ割った。

自らの娘、神楽が雷怨寺家の軍師を気取り、好き勝手に動いていることは承知している。

縞馬に糧食を運び込んでいることも把握している。

家中には彼女に便宜を図るものは多い。

神楽は家中以外にも北陸中で同士を集い、織田と対抗する諸侯とも連携を取ろうと画策している。

それを斑尾は、ほどほどに放置してきた。

海上全てを封鎖するなど不可能だし、神楽の構築した組織は、いずれ九狸家の役に立つかもしれない。

それに神楽が目指す、雷怨寺夢幻を中心として北陸を強固にし、織田を打倒する、という目的は、数年前まで斑尾とも多くの部分で一致していたからだ。

ただ織田の天下が確定的となった今、それが九狸家のためにならなくなっただけのことだ。

九狸家三十万石。

けっして小さな勢力ではなかったが、戦国屈指の大勢力となった上杉と雷怨寺に挟まれてしまえば、もうそれ以上の領土拡大は望みようもなかった。

ただし、群島制覇を夢見ないのであれば、そう悪い状況でもない。上杉謙信は雷怨寺への尖兵として、雷怨寺豪千は上杉への押さえとして、そのままの形で九狸を欲しがった。

九狸斑尾は宿老の待遇で、豪千に従うことを決めた。

上杉は武田や北条とも死闘を繰り広げていたし、雷怨寺の方がより京に近かったからである。

斑尾はまず神楽を人質として差し出し、次に千も差し出した。

それから数年をかけて北陸二百万石を隅々まで平定した豪千が、ついに上洛の準備を終えた冬。

千が、夢幻を冷たい海に蹴り落として、死なせかける事件があった。

もともと九狸姉妹の悪童ぶりには、はらわたを煮え繰り返していた者も多い。

両家の間に、並々ならぬ緊張が奔った。

しかし、豪千は笑い飛ばした。

千の武勇を褒めそやし、自らの羽織を千の肩にかぶせて、こっせん豪の千姫と呼んだ。

「わしがもしも夢半ばで沈むようなことがあれば、北陸は豪千姫に譲ろう。ただ、千は少々武に偏りすぎているな。よし！ 神楽よ、お前が軍師となって、もりたたてやるがよい」

神楽の悪知恵も当時から有名だった。

「豪千公、私は千より夢幻さまのお力になりとうございます」

神楽がさがしく答えると、

「わははははっ、ならちようど良い方法がある。これで雷怨寺家も安泰だ！」

と豪千は熱にうなされる一人息子を放って、どこまでも上機嫌だった。

雷怨寺家中には、それで収まらないものもいた。

他の宿老家も、九狸だけを特別扱いすることに、内心腹ただしく思っていただろう。

が、

「この人間のくずどもが！ ガキどもの世話をわしに押しつけといて、好き勝手抜かしやがる気か！ 此処にいる間は全てわしのガキ

じゃ！ 死んだくらいでがたがた抜かすな！」

雷怨寺隠居斎が一喝して、不満を持つ者たちは口を閉ざした。

北陸を統一した豪傑たちは、どこまでもむちゃくちゃな親子だった。

その上で豪千は千と夢幻の婚儀を斑尾に打診してきた。

斑尾に断る理由はない。

こうして豪千公は、その冬の内に一人息子と千の婚約をまとめ、神楽を夢幻の軍師に任命してみせた。

温犬を初め、他の宿老家は豪千に従って上洛を目指すが、九狸家は上杉への備えとして、北陸に残ることになる。

九狸斑尾が万が一にも裏切れば、雷怨寺領は上杉謙信によって容易く蹂躪されることになる。

上洛に際して豪千は後顧の憂いを絶つために、それだけの遊びをやつてのけた。

北陸一七島を統一して、上杉謙信とも、織田信長とも互角に渡り合った、北陸の竜王・雷怨寺豪千。

北陸の人間はかの偉人を敬愛している。

誇りに思っている。

雷怨寺家で奔放に育てられた『雷怨寺の子供たち』、

特に豪千から偏愛された九狸の姉妹は、どこまでも雷怨寺の人間として成長していた。

だからこそ豪千の死後、もっとも人質が必要なときに、隠居斎は子供たちを堂々と解き放ったのだ。

しかし、隠居斎の思惑とは別に、雷怨寺の家中、および他の宿老家には、豪千公が後継者と呼んだ千と神楽をだしに、九狸家が大き

な顔をすることに對する警戒が根強かった。

その上、雷怨寺に洗脳された娘二人の身勝手な行動は、九狸家にとつても、頭の痛い問題だった。

結果、二人は花嫁修業として、京都に送りやられることになる。

雷怨寺の毒を抜くために。

他家との軋轢を防ぐために。

戦から遠ざける親心も、わずかには込めて。

千は京の水になじみ、京の人間となった。

方向には疑問も残るが、花嫁修業としては、想像外に大きな成果があった。

しかし神楽は一月も経たずに勝手に京を離れ、北陸に帰ってきていた。

斑尾の言葉を聞かず、九狸にも戻らず、雷怨寺城に住み着き、雷怨寺家の人間として立ち働続けた。

神楽の命に、もう未練はない。

お互いに親子の情など持ち合わせていないことも確認済みだ。

利用できれば利用するし、邪魔になれば排除する。

しかし、

「この期に及んで、千まで地獄に引きずり込むつもりか！ 神楽！」

斑尾はたたき割った杯を踏みにじる。

「豪千の亡霊に取り憑かれた馬鹿娘めが！」

いまさら千を嫁がせたくらいで、雷怨寺の衰退は避けられない。
九狸家まで一蓮托生となるだけだ。

それよりも、千は織田に売り渡す。

出来るだけ高く。

織田の跡取り、織田信忠が千に執心であることくらい、何度も京を訪れている神楽も知っているはずだ。

だから万が一にも千を死なせるわけにはいかないし、雷怨寺の人間になどなられてはたまらない。

何としてでも、神楽から引き離し、九狸家に取り戻す必要があった。

すでに二重三重に手配はすませているが、どれもこれも頼りなく、不確かな策でしかない。

手段を選ぶ時間はない。

それでも、もっと洗練した策はないか。

家の進退を決めるとても重要な戦の前に、斑尾はその算段に頭を悩ませてた。

雷怨寺城の姫竜王

朝早く、日の昇る前に起きた神楽はごしごしと眼を擦った。

「……」

手についた墨を見て、隣で眠る妹を見る。

習字導具を出してきて、墨を擦る。

妹の両頬にひげを3本ずつと、額に「妹」と書いて、それから「うーん」と少し唸ってから、鼻の頭を黒く塗って、ひげを左右1本ずつ増やした。

「こんなものでしょう」

あくびを一つ、顔を洗いに行った。

「千。起きなさい。朝ですよ」

……ぼすんぼすんとお腹のあたりを、枕で叩く人が居た。

強制起床させられた千は、寝起きの凶悪な眼で、睨む。

部屋の中には行燈の灯りが三つも灯っていて、明るかった。

「起きましたか、千」

枕を手に、にっこり微笑んでいるのは、もちろん、姉だ。

部屋の中は明るいけど、しかし障子の向こうは暗い。

真っ暗だ。

朝じゃなく間違いなく夜だった。

「……」

千は無言で布団を被り直した。

「こら、千。布団が汚れるでしょう。わたしはどうでもいい用事で数日ほど城を離れます。日が昇る前に出発しますから、あなたも我が儘せずに少し早めに起きて朝ご飯と一緒に食べて姉を気持ちよく見送きなさい」

「……………不条理な」

「はあ。まったくこの子は」

姉は仕方ないわねと、ため息を吐いてから。

「ちゃんと起きて顔を洗ってきなさい。そうしたら、夢幻があなたのことを好きか嫌いか、確認する方法を教えてさしあげましょう」

「……………」

うるさいので仕方なしに、千は起きた。

「ちゃんと顔を洗ってきましたか？」

「うん」

まだ炊事場が機能していないため、朝食は、握り飯に、漬け物だった。

握り飯を頬張りながら、神楽は千に向かって言う。

「おそらくというか間違いなく、夢幻は数日の内に、あなたに会いに来るでしょう」

「……来るかな？」

「来ます。わたしが城を離れることは夢幻にも伝わりますので、その隙にかならず行動を起こします」

「……………」

千は少し頬を赤くする。

ぽりつとたくあんをかじる。

「行動といっても、千。夜這いとかではなく、あなたを京に追い返すためにですよ？」

千は赤くなつたままの顔を姉から隠すように伏せた。

「千。あなたがもし殿方に嫌われようと思ったなら、どういつ行動を取りますか？」

「どうって？ 殴る？ いや、海に蹴り落とす？」

言ってから千は少し項垂れた。いつもやっていたことだった。

「褒められたやり方ではありませんね」

と姉は眉をひそめた後、

「ちなみに私なら陰湿な方法で搦め手から追い込みますが、では、夢幻ならどうするでしょう？」

姉とは正反対。

夢幻の馬鹿正直で生真面目な性格を考えれば、

「……………想像しやすい陰湿でない方法で正面から嫌われようとする?」

「具体的には?」

「……………宣言してから殴りかかってくる?」

神楽は、ため息を吐いてから、

「夢幻ならきつと真っ向から、僕は君のことが嫌いだ。とか率直に言葉にするでしょう」

「その後殴りかかって」

「きません」

「千は、夢幻に嫌いだと言われてどうしますか?」

「……………どうって」

いざ問われると思いつかない。

「……………海に蹴り落とす、かな」

「きつと狼狽えて私もお前なんか好きではない、とか言うでしょうね」

「……………言うかもね」

千が恥ずかしそうに肩をすばめる。

言われてみれば、思い当たる。売り言葉には、買い言葉だ。

「自覚があるのなら結構です。そこで、さあお姉さまからありがたい助言です。箸を置いて静聴しなさい」

千は素直に箸を置いて、姉に向き直る。

「まずは夢幻に嫌いだ、またはそれに類することを言われたときに、条件反射で私もだ、とか言わないこと。良いですね？ 千」

「はい」

「そうして、こう切り返さない」

神楽はちよつとしなを作ると、上目遣いに千を見上げて、口元に微笑を浮かべ、

「そんなこと言って。本当は私のこと、好きなんでしょ？」

「……」

「はい、千。やってみなさい」

「え？ わたしが？」

「あなたがやらないで誰がするんですか。それに今わたし相手に来ないようで、本番で夢幻相手に出来るものですか」

「……」

「さあ、はい！」

ぱんつと手を叩いてせかす。

「そんなこと言って。本当は私のこと、好きなんでしょ？」

千はしなを作って、上目遣いに神楽を見て言った。

「……意外と様になってますね。そうしてれば辛うじて女の子に見えます」

「失礼な」

「本番もその調子で。それに対する夢幻の反応ですが、きっと狼狽えた末に否定するでしょう。そこで、追い打ちです」

神楽は口元に手を当てて含み笑うように、
やはり上目使いに千を見て、

「夢幻、態度に出すぎ」

「……」

「良いですか？ 千。ここは自信を持って言ってください。狼狽えたら負けです。それと余計なことも言わないように。短い言葉が効果的です。意識としてはあんた態度に出すぎだからこっちの方が恥ずかしいよ、くらいの余裕で」

「……」

「分かりましたか？」

「はい、先生」

けっこ真剣に千は頷いた。

「よろしい」

神楽も満足そうに頷いた。

「これで、夢幻があなたを好きか嫌いかが分かります。もしも夢幻があなたのことを嫌いなら狼狽える必要も逃げる必要もありません。哀れみの隠った眼で、あなたを見るでしょう」

「……それは、ちよつと」

「大丈夫です」

にこつと神楽は微笑んだ。

「まず間違いないく夢幻は狼狽え、そして逃げますから」

神楽が立ち上がる。

「私は出かけます。では、御武運を祈っています。あとちゃんと顔を洗うように」

さて。

京で自堕落な生活をしていた千は、姉が出かけた後、もちろん二度寝に入った。

雷怨寺城、二日目のさわやかな朝……と昼の合間。

二度寝から目覚めた千は、大きく伸びをした。
今日はどうしよう？

この雷怨寺城には数人、かつての『雷怨寺家の子供たち』が居て、昨夜のうちに軽い挨拶を受けていた。

雷怨寺家直結の人間ばかりで、子供の頃も、みな雷怨寺党。
戦の準備で、忙しく立ち働いているようだ。

夢幻も、もちろん忙しいだろう。

船を借りて他の島に渡るか。

しかし、縞馬の海域を除いて近場はすべて雷怨寺領だ。

九狸や笹雉に連なる家なら泊まりがけになる。

北陸中が戦の準備で奔走している今、かなり迷惑するだろう。

今の宙ぶらりんな状況で、奥方扱いで歓待されるのもいやすぎる。
しょうがないな。

千は軽く頭を振って起き上がり、小用を済ませた後、顔の墨を洗い落としてから、

三度寝に入った。

そんな風に雷怨寺城での二日目はだらだらと過ぎていって、三日目も過ぎていった。

雷怨寺城の姫竜王（旧友の訪問、その一。温犬虎狼）

雷怨寺城での四日目。

お昼前。

城の中で千の身の回りの世話をする侍女が、申し訳なさそうに千を起こしに来た。

「千姫様。あの、」

「う、ご飯？」

「いえ、ではなく。……温犬虎狼様ぬくいぬ いぬがいらっしゃっていて、是非とも千姫様に会わせると」

「虎狼？」

「はい」

千は寝起きの悪い方だが、しかしさすがによく寝ている。すんなりと目覚めた。

布団から上半身だけ起き上がり、うーんと腕を伸ばす。

「あの馬鹿。まだ馬鹿なのか？」

「はい」

申し訳なさそうに侍女が頭を下げた。

温犬虎狼。

年齢は千より二つ上。

『雷怨寺の子供たち』では、千に次ぐ竜の乗り手で、勉学（特に算術）でも千に次ぐ二番目の成績の悪さを誇っていた。

何かと張り合う機会が多く、もっとも千が多くの蹴りを放り込ん

だ相手でもある。

寝間着にしている絹の長襦袢から、木綿の小袖と袴に着替え、腰に小袖を一つ巻く。

侍女の入れてくれたお茶を飲んでから、外の景色を眺めて、千はやつと重い腰を上げて部屋を出た。

久しぶりに友達に合うのだ。

勿体ぶつてはいるが、内心ではちよつとつきうきしている。

本丸の一階で、あつちを見たりこつちを見たりと落ち着き無く、真つ赤に染めた頭髪を茶筌曲げに結って、赤竜の全身鎧の上から狸々皮の陣羽織、腰には朱鞘の大太刀という身なりの怪しい若侍が待っていた。

「……」

階段の途中で、千は立ち止まった。

あれが虎狼で間違いない。

子供時代も体格の良い奴だったが、十七才となった今は、間違えるように遅くなっていた。

そして真つ赤になっていた。

その事実はずでに火六夜や侍女たち聞いていたが、想像以上に彼は今、赤かった。

あんな鮮やかな髪染めもあるんだなあと感心する。

あつちを見て、こつちを見ていた若侍というか馬鹿侍は、千を見つけ、日焼けした顔に満面の笑顔を浮かべた。

「いよーう！ 千！」

大きく手を振られてしまった。

「……よう。ぬくところ。元気そうだな」

温犬虎狼はいやそうに顔をゆがませる。

「略すな。もう俺も部隊を率いる一角の武将なんだ。温犬虎狼とちやんと呼べよ」

「ながい」

「長くないだろ。じゃあ虎狼と呼べ」

「ころ」

「ころじゃねえ！　ころじゃねーよ！　ころ・う、だろ！」

真っ赤な顔でじだんだしてる虎狼に、千は近づき、笑顔で肩を叩く。

「久しいな、虎狼。相変わらず馬鹿な格好してるな」

「馬鹿じゃねえ。釈迦も言ってた。馬鹿って言うやつが馬鹿だ」
外見は奇特に磨きが掛かっているが、中身はあまり変わっていないようだった。

「まあいいけどな。で、なんかようか？」

千が訊くと、ふっ、と虎狼は笑った。

「お前の貞操をもらいに来た」

千の拳が虎狼のあごを捕らえた。

冗談じゃねえか。殴るなよ。

用もなければ会いに来たら駄目なのかよ。
友達だろ俺たち。

とあごを押さえて虎狼がぶつぶつ言っている。

「いや、そんな冗談言うやつじゃなかったから、ついな」
と言ってから千は

「まあ悪いのはお前だけど」
とはつきり付け足した。

京でも時たまこの手の冗談を言う奴が居た。
その時は笑って…… やっぱり殴っていたな、と千は一人頷いた。

「俺はもう昔の俺じゃねえ。言うべきことを言わずに後悔したくないんだ」

虎狼は、遠い目をして呟いた。

「お前の場合、言わなきゃ良かったって後悔することが大半だろ？」

千と虎狼は、竜舎に向かって歩いていった。

二人並ぶと、虎狼は千より頭一つ以上、背が高かった。

どうやら虎狼は、千と竜技の決着を付けに来たらしい。

それで、派手な竜装を着ているようだ。

子供時代、竜技で千が負ける事は殆ど無かったが、確か北陸を離れる前、最後に会ったときに勝負の約束をしていたような記憶もある。

「お前が帰ってくるまでに俺は北陸一の竜王になる」
という虎狼に、

「じゃあ私は日本一の竜王になってお前を叩きのめしてやる」
と千が答えて、

「帰ってきたら勝負しよう」

という約束になった。

丸ごと忘れていたそれを千は思い出していた。

「にしてもおまえ、いつまで寝てんだよ？」

「うるさいな。京ではみんな寝てる時間だ」

「そうなのか？」

もちろん嘘だが、馬鹿は信じた。

「良いな京、俺も住みたいな」

「旨いもんも多いしな」

主に食べ物を中心に京の話をしている内に、竜舎に付いた。

「着替えるから出てけ」

小屋の中に付いてきた虎狼を蹴り出した。

雷忍寺城の姫竜王（温犬虎狼と竜技戦）

竜に乗って沖合に出て、二人は相對する。

虎狼が連れてきた竜は、千柳よりもすこし大柄な、赤っぽい鱗をした竜だった。

「毘沙門天号は？」

「死んだ。戦で。こいつの名は不動明王号だ。よろしくな」

「……まあ、滅多に名を呼ぶことはないと思うけど、よろしくな、みょうちゃん」

千は軽く、虎狼の騎竜に向かって頭を下げた。

「変な名で呼ぶなよ。それにこいつ雄だよ」

「じゃあ、よろしく。みよ」

「……略しすぎだろ。雄に何の恨みがあるんだよ？」

千は、一間半よりすこし長い棒を、虎狼は二間半の棒を構える。どちらも櫓材で、松脂と柿渋で水が染みにくく加工されている。先端は丸みを帯びた、訓練用、または競技用の槍だ。

「いいのか？ それで？」

「おう。お前こそ良いのか？ そんな短い槍で？」

「長ければいいってものじゃないだろ、竜技で」
あきれ気味に千は答える。

竜に乗った水上戦では、一間など一呼吸で狭まってしまふ。
竜技の一騎打ちで二間以上の得物はどう考えても持て余す。

千はぶかぶか海のうねりに乗るようにゆっくりと千柳を推し進める。

「へへっ。この炎魔の大竜王、温犬虎狼様の超成長、思い知らせてやるぜ」

「えんまの大竜王って……おまえ」

「ふっ。略すなら炎魔王で頼む」

「……正気か？」

竜王と呼ばれたり、名乗ったりする者は、千の一人ではない。

織田の領内では竜技会によって竜王が決められるために、千の一人だけであり、勝手に名乗るとしよっ引かれるが、まだまだ日本群島のおちこちには竜王が存在する。

上杉景勝も竜王を名乗っているし、信玄時代の武田には七人の竜王が居た。

結局のところ竜王とは、竜に乗る猛者、という意味だ。

群雄が入り乱れていた戦国中期には、数え切れないほどの自称竜王が日本群島に存在していた。

この北陸でも十人程度、竜王が居たはずだが、しかし北陸を統一した豪千公に遠慮して名乗らなくなった。

だから北陸の竜王は豪千ただ一人になり、そして豪千が千のことを姫竜王と呼んだことによって、千も竜王と呼ばれるようになった。

……それに対抗してこの馬鹿は大竜王を名乗るようになったが、未だに名乗り続けているようだった。

「いくぜ、千！」

虎狼があぶみを蹴って、不動明王号に合図を送る。
不動明王号が、千に向かい全速で前進する。

二間半の間合いに入ると、虎狼は、両手で棒を上段に構えて、打ち下ろした。

千が軽く手で千柳の肩を叩く。

ゆらり、と千柳が波に乗って、斜めに流れる。

虎狼の打ち下ろしは、海面を叩いた。

海に沈んだ棒は即座には引き上げられない。

千が小さく体重を移動させる。

千柳はその動きを合図として、一間半の間合いに千を届けた。

「はいやあ」

千が振った棒が、こつんと虎狼の兜を軽く叩いた。

「いてつ。くそっ！」

虎狼が不動明王号を千から遠ざける。

それからまた二間半の間合いを作って、一撃二撃三撃と千に連撃を加えてくる。

全てを棒で捌きながら、「へえ」と千は感心した声を発した。

最初の一撃は拙かったが、その後の二撃目、三撃目と徐々に苛烈になっていくのは、生意気にも千の技倆を推し量っているからだろ
う。

なかなか悪くない竜捌きだ。

地上での戦いと違い、竜上での戦いは、足場が固定されていない。

お互いが海の中、波の合間で揺らめいているのだ。

竜を目的の位置に運ぶだけでも、このうねりを掴む必要がある。

更に海のうねりは、打撃の重さにも影響してくる。

波が引くときに打ち掛かっても、腰の引けた打撃になるが、うねりに乗った攻撃は波の力が加算されて重い一撃となる。

この海面の揺らぎを、千たち京の竜士は『呼吸』と呼んでいた。竜王戦に出てくるような強者は、ほぼ例外なく息をするほど無意識にこの呼吸を捕らえている。

今、千の前で虎狼も、ほぼ完璧に呼吸を掴んでいるようだ。

「腕を上げたなあ」

「へへっ、どうよ!」

千に褒められ、虎狼は嬉しそうに破顔し、次々と攻撃を加えてくる。

「でもさ」

千は少し意地の悪い笑みを浮かべ、虎狼の攻撃を斜めに受け流した。

今までと違い、虎狼の呼吸を乱す方向に。

「うおっ」と虎狼が前のめりになり、不動明王号が、海に深く沈んだ。

海中に竜が沈みすぎると水が抵抗になって次の動きに支障が出るし、かといって浮きすぎても水を捕らえることが出来ずに、次の行動が鈍くなる。

一度呼吸を乱されると、最適な深さに立て直すのは、なかなか難しい。

千の見える前で、すこし海に翻弄されてから、

「とっ、たっ」

虎狼は二呼吸の間で体勢を戻して見せた。

自信を持って挑んでくるだけのことはあった。

ただし、それでも千との差は、縮まらずに開いている。

「さあ、次はこっちから行くぞ」

千は宣言して、千柳を推し進める。

ぶんつと無造作に振ったような横薙ぎの一撃。

「なんの！」

虎狼がそれをがっちりを受け、

「うっ？ うおおおおっ！」

受けきれない。

竜から身体が浮き、あぶみから足が外れ、そのまま二間近い高さまで高々と打ち上げられた。

「たーまやー」

千のかけ声。

「なんじゃー！ー！ こりゃー！ー！ー！」

虎狼は海に落ちて、盛大な水しぶきを上げた。

一度沈んでから海面に顔を出し、

「ぷはっ。なんちゅー馬鹿力だ！」

「馬鹿はお前だ馬鹿。竜技使っただけだ馬鹿」

「竜技ー？」

竜にとっては鎧も兼ねている大柄な竜鞍は、ただ座るための導具ではない。

鞍の随所に施された窪みや突起は足場や手がかりにもなるし、槍を振るうときにも活用する。

地方によつて差はあるが、北陸で標準的に利用される竜鞍には、七つほどの仕掛けが施されている。

この仕掛けを『竜技構』と呼ぶ。

竜を奔らせる技全般を竜技と呼ぶが、これらの仕掛けを使った戦闘術も、竜技と呼ばれる。

どんな鞍にも必ずある代表的な竜技構は鞍の前面、竜の胸元に施された一つの穴。

竜突撃のための仕掛け、『竜撃抗』だ。

その穴に槍の尻を差し込み、まっすぐ相手に突撃する。

竜の加速と全体重に支えられた槍は、鉄の鎧ですら容易に貫通する。

特に筒状の穴が空いた『船殺し』という槍で、船の喫水線の下を攻撃する竜技は、大型の船を相手にするときの竜武士の常套手段で、

武田の竜武士団が得意としていた。

千柳の竜鞍には七十を超える竜技構がある。

穴や突起だけでなく、あぶみのような輪っかも幾つかつり下がっている。

そのままあぶみにもなるが、基本的には槍を通して使用する。

槍の尻を輪に通して、突起と併用してテコのように槍をなぐと、竜の体重や海のうねり、全てが乗った重い一撃を放つことが出来る。

千は全ての角度でそれを行える技量を有していた。

要するに、虎狼は海のうねりに竜の体重、それら全てが乗った一撃を己の力のみで受けようとして受けきれなかったのだ。

千は相手の攻撃を受けるときにも必ず竜技を使って、腕力の差を完全に消し去っていた。

「もう一度だ！」

「何度やっても同じことよ」

「避けりゃいいだけだ！ 馬鹿力め！」

「はははっ。無駄よ無駄。人竜一体、二年連続無敗の竜王様をなめるなよ」

虎狼は自らの呼吸は把握できているようだが、千と比べればまだまだ甘い。

そして、千の呼吸までは掴めていない。

それに対して、千は相手の呼吸を支配する技倆では京随一の使い手だった。

『千の領海』 - 間合いの中で、自由に振る舞える竜士は、京にも数えるほどしかない。

それから一刻あまり、ウサギをいたぶるサメのように、千はさんざんに虎狼を弄んだ。

虎狼の攻撃は一度として千を捉えることはなく、虎狼は幾度となく、空を舞った。

竜舎に戻って、千は食事を取った。

虎狼も一緒だ。

「あちいー」

虎狼は竜装を解いて、上半身裸だ。
千も竜鱗の鎧だけは脱いでいた。

「下は脱ぐなよ」

握り飯を頬張りながら千が言う。

「おう。お前は脱ぎたきや全部脱いで良いぞ」
「殺すぞ」

日焼けした虎狼の身体は、贅肉もなく筋肉が引き締まっている。
が、身体のアチコチ傷だらけだ。
槍や刀創、矢に銃創もある。

……真新しい棒に撲たれたあざも多い。

「馬鹿だけに馬鹿みたいに怪我してるな。その腹と背中結構深そうだな」

「おう。でもよ、背中傷はあれだぜ？ 流れ弾だ。別に背中見せて逃げようとして撃たれたわけじゃない」

「まあどっちでも傷は傷だろ。撃たれるなよ」

「是非とも相手に言ってやってくれ」

虎狼はやれやれと頭を振った。それから、
「でもよ」

千をまっすぐ見てにかつと笑い、自分の顔を親指で指さした。

「顔はほれ、無傷だから大丈夫だ」

千は、はあとため息をついた。

「お前は馬鹿でも幸せな馬鹿だよな」
万感を込めて呟く。

虎狼はじつと千を見ていた。真剣な目だ。

「なんだよ？」

不穏な空気を感じて、千が身を引く。

虎狼が無造作に千の腕を掴む。
真剣な顔で二の腕を揉んだ。

「放せ変態」

腕を引いて振り解く。

「……ほせえ」

「悪かったな」

「その細腕で何であんな怪力が出るんだよ？」

「だから竜技だって言ってるだろ」

千柳の竜鞍は特注品で、今の形になるまで何十何百と試行錯誤が繰り返されている。

使いこなすのは簡単ではない。

ただ虎狼が乗る不動明王号の鞍にも幾つか竜技構は付いていた。飯を食った後、それを使った基本的な技を教えてやった。

「へえ。この突起、こうやって使うのか」

飲み込みは早い。

「言っておくけど、今度の戦で使おうとするなよ」

「おう」

仕掛けに棒を引っかけながら、虎狼が答える。

一朝一夕で使いこなせるはずもなく、無用な隙が生まれるだけだ。

だいたい白刃の斬り結びに、竜の体重まで乗せる必要もない。

高度な熟練を要する割に、竜技が活きる場面は竜技を極めた相手と一騎討ちをする時くらいだ。

そのため地方で竜技を操る竜士は極少なく、竜鞍の製造職人すら竜技構をただの飾りだと思っている者が多かった。

もたもたとした虎狼の竜技を、千が竜技で受ける。

竜と竜の大きな力が、棒を挟んで拮抗する。

海の上だ。

押し合う力は必ずどこかに逃げる。

千の騎竜、千柳は微動だにしないが、しかし虎狼の乗る不動明王号は力の揺り戻しを受けて、竜も人も海中に没してしまった。

その日一日、技を教えたり、試合ったり、休憩して馬鹿話をした
り。

北陸に帰ってきて、千は初めて腹の底から笑い声を上げまくった。
海面が夕日に染まる頃、二人は別れた。

今夜、虎狼は雷怨寺城の一画にある温犬の屋敷に泊まるらしい。
明日もう一度勝負しよう、という虎狼の申し出を千は了承した。

暇つぶしの相手が出来た。

その日の夕刻。

夢幻が桜間天守にやってきた。

「虎狼が来てるそうだね」
不機嫌に夢幻が言う。

「ああ。竜技戦でぼこにしてやった。夢幻も来いよ。楽しいぞ？」

「いや、いい」

「なんだよ。手加減してやるから」

「必要ない。僕は大将だ」

「大将でも竜に」

「必要ない」

「……」

お互い、あぐらを組んで正面から向かい合っていた。少し、千も不機嫌になっていた。

「千。僕は、君が嫌いだ」

会話らしい会話もないまま、それを夢幻が告げる。

「だから」

「うるさい。黙れ」

千はつい言ってから、

「あー……。その、あれだ……。えつとさ」

斜め上を向いて、頬をぽりぽりと掻いてから、

「ほ、本当は好きなんだろう？ 私のこと？」
上目遣いに夢幻を見る。

「いや、全然」

少し柳眉を寄せた後、夢幻が答える。

千と夢幻が見つめ合う。

千は微妙に睨む視線で、夢幻は少し頬を赤くして、ぐっと口元を引き結んでいる。

しかし少し目が泳いでいた。

千の反応が予想と違って困惑しているのだろう。

入り方は間違っただけ、前もって心の準備があった分、千の方が心理的に有利だった。

ふっ、と千は口元で微笑んだ。

「お前、態度に出すぎ。こっちの方が恥ずかしい」

夢幻の顔が歪み、みるみる赤くなる。

短い勝負は、千の完全勝利だった。

夢幻を見つめる千の顔は、じわじわとにやけていった。

視線に居たたまれなくなつて、夢幻は立ち上がる。

そのまま早足で部屋を出て行く。

「なんだあいつ」

千はその場にごろんと寝転がってから。

「……………意外と可愛いじゃないか」

両手で顔を隠しながら、ぐろぐろと部屋の隅まで転がってまた戻る作業を繰り返した。

その晩、千はぐっすりと眠った。

夢幻は涙で眠れぬ夜を過ごした。

雷怨寺城の姫竜王（旧友の訪問、その二。志村蓮）

五日目。

早朝に、千を訪れる者があつた。

志村蓮。

『雷怨寺家の子供たち』の一人で、姉の神楽と同年齢の女性だ。

志村家は古くから九狸に属する武家で、武辺者の多い一族として有名だつた。

ただし彼女は武張つたことを好まず、もっぱら金勘定を得意としていた。

「蓮が？」

千は首をひねつた。

夢幻のことに關しては尋ねる以上のことを——ほぼ噓ながら——教えてくれた姉も、なぜか他の仲間たちの近況は——含むところがあるのか、それとも特に意味はなかったのか——教えてはくれなかった。

しかし千は、この数日の内に、縞馬火六夜や温犬虎狼、城の侍女たちからおおよそ仕入れていた。

志村蓮は、姉の神楽と対立していて、姉の影響力の強い雷怨寺城には全く近づかないと聞いている。

彼女が尋ねてきても会わない方が良くかもしれないと、控えめに忠告する侍女も一人いたくらいだ。

その彼女が、わざわざ九狸城から戦船に便乗して会いに来たという。

「まあ、いいか」

姉のように慕っていた幼なじみだ。
会えば分かるし、会わない選択肢はない。

「千客万来だなあ」

と笑ったが、五年ぶりの帰郷だ。
帰還する船の中では、もっとみんなが集まることを夢想していた。

「あっはは。別に私は神楽と対立してるわけではないのだよ」

志村連は、からからと笑う。

「神楽が少し、大人たちと対立するようなことをやったからね。その尻ぬぐい。本当は仲良しだから私たち」

心配させてごめんねーと笑ってから。

「ねえねえ！ 京の話聞かせてよ！」
身を乗り出して蓮は千にせがんだ。

京から持つて帰った茶を二人で飲みながら、服飾のことを中心に、京の話をする。

一刻ほど話し込んだ後、話題に上った京の土産を彼女に渡す。宝箱だ。

純度の高い金や銀、そして宝石や南方の貝殻などを、小箱に分けてぎっしりと詰めている。

一つ二つ開けてから、

「これは……」

と、蓮が目を輝かして、生唾を飲み込んだ。

竜技は、京でもっとも人気のある芸能であり、千はその頂点に二年連続で居座る竜王だ。

その稼ぎは百万石に匹敵するとも言われている。

もちろん誇張だが、京や堺の粋人たちが競って贈った茶器や武具、絵画などの力作を合わせれば、十万石は優に超えるだろう。

もっとも千には物の価値が分からないし、算術も苦手。蔵の管理や金勘定は別の人間に押しつけている。

長い時間、吟味した後、蓮は、千に視線を戻し微笑んで、

「ありがとう。大切に使うわ」
千も顔を綻ばせた。

蓮は美的感覚が（千から見ても）優れていて、手先も器用だった。彼女から貰った手製の帯飾りや刀の鐔は、京の職人たちが唸るほどの出来で、評判がよかった（その独創的な物体が千がずっと身に

つけているお気に入りだからみんなが欲しがることに、千は気づいていなかった）。

北陸でも手に入る貴金属も含めて彼女への土産を奮発したのも、作品の一部をあわよくばお返しとして頂戴する思惑がある。

ちなみに仲間への土産物は千の意見を取り入れながら、神楽が選らんでいた。

その手の作業を千は苦手としていて、ごく自然に一人二人忘れてしまう。

「お返しじゃないけど、わたしも千にさ、贈り物がある。ちょっと大きな物で、港にあるの」

蓮は立ち上がって部屋を出る。

少し首を傾げて、千は彼女の背中を見つめる。

「ほら。立って立って」

振り返った蓮が、障子の向こうで、手招きして千をせかす。仕方なしに、千も立ち上がり後に続く。

千の右腕にがっちりと両手を絡ませながら、蓮が歩く。引きずられるように、千も歩く。

どうも雲行きがおかしい。

かなりの確率で、何かを企んでいるような気がする。というよりそう主張している態度だった。

桜野天守を出たあたりで、千は少し探りを入れた。

「えーと。何だろ。蓮の手作りなら何でも嬉しいけど」

「あ。ごめん。私の手製じゃないの。でも嬉しいな。希望があれば造ったげる。何が良いかな？」

「外套の留め金」

「ほほう」

「気に入った外套があるんだけど、それに似合う留め金がないんだよね」

「よし任せる。全力で作ってしんぜよう」

「じゃあ、外套は部屋にあるから」

戻ろうとする千の腕をぐつと掴んで、蓮が引き留める。

「港にお土産を預けてあるから。あまり待たせると悪いので先にそっちを受け取って」

笑顔が不自然だが、正論だ。

また千は引つ張られるように港を目指す。

「何をいただけるのかな？」

「船」

即答が帰ってきた。

「船？」

「そう。船」

それなら確かに港にあるのも納得できる。

しかし、なぜに蓮が船を？ 彼女の家は、さほど裕福でないとい
うか、借金まみれだ。

その思いが顔に出ていたのか、

「不便でしょ？ 北陸での移動用につて。神楽から頼まれたの」
「ねーちゃんから？」

「そう。神楽から。疑ってる？」

「いや、そんなわけじゃないけど」

「じゃあ、こうしよう」

蓮が千から手を放して、ぱんつと手を軽く打ち合わせた。

「もしも嘘だったら、五つ、ううん、十個、何か作ってあげる」
「……」

「もし付いてきて、本当だったら三つ。ここで引き返したら、外套の留め金一つ。さあ、どうする？」

蓮は、にこにここと微笑んでいる。
どこまでも、あやしい。

しかし、悪い条件ではない。
どうせ雷怨寺城にいてもすることはない。

「その約束、忘れるなよ」
「もちろん」

お互いうさんくさく笑いあい、港を目指した。

蓮に連れられて赴いた軍港には、九狸家の軍船がずらりと係留されていた。

その中でも、ひときわ目立つ一隻の前で、蓮は足を止めた。

四〇挺艦の屋形船だった。

軍船としては大きくないが、女性一人の移動用としては、もてあます大きさだ。

千もよく知っている船で、内装は漆や金箔で飾り立てられている。戦うための設備も一応は整っているが、居住性こそが追求されていた。

九狸斑尾の御座船『夢狸』だった。

夢狸号の上には、にこにこ微笑む九狸斑尾の姿があった。

「おーい、千。久しいなあ、会いたかったぞおー」
と不自然なまでに上機嫌で手を振っている。

千は久しぶりに再会した父に笑顔で手を振ってから、じとりと蓮を見る。

千の周りはすでに九狸家の侍に取り囲まれていた。
いくつもある港の一つだ。

この港は今、九狸家に貸し出されていて、他家の姿は見えなかった。

「嘘ではない。嘘ではないぞ」

芝居がかった仕草で、蓮が顔の前で手を振る。

「あの船が私の物になると、ねーちゃんから頼まれたか。どっちか嘘なら十個だよね？」

「んー」

と軽く唸った後、

「そう、両方嘘でも、どっちか嘘でも十個、約束します」

蓮は、神妙に頭を下げる。

千はうなずき、脛へと足をのせる。

蓮は、その横に並び一緒に乗船しながら、千に話しかける。

「戦が終わればみんなで寺に集まって、大騒ぎしたいね」

「そうだね。出来れば、一人も欠けることなく」

千が答えた。

蓮は、千から目を逸らした。

戦国の世の中だ。

すでに二人、雷怨寺の子供たちで、帰らぬ者が出ていた。

雷怨寺城の姫竜王（父と娘）

「いや驚いた驚いた」

斑尾は白々しいまでにご機嫌で千を迎えた。
乗船してすぐ、蓮は姿を消している。

「いや、此度の紅蟹討伐の軍議でな。雷怨寺城に来てみれば千が京から帰ってきてると夢幻さまが言うではないか。水くさいぞ千。なぜ父に教えてくれなんだ」

千はぼりぼりと頬をかく。

「家中のみんなもお前に会いたがつておるぞ。九狸城にも顔を出してやってくれんか」

幼少時を雷怨寺で育てられ、その後の五年を京で過ごした千は、父親とも縁が薄かったし、九狸家で親しくする者は意外に少ない。それでも千は九狸の姫だ。

九狸家の人たちが千を慕ってくれていることは事実として実感できていた。

「ごめん。父ちゃん。今は帰れない」

「どうしてじゃ？」

笑顔を浮かべたまま、斑尾は首をかしげた。

「わたし、夢幻と結婚する。だから」

「その話は聞いた。しかし急な話しじゃ。夢幻さまも戸惑っておら

れた。なにぶん大事な戦の前でもある。戦が終わってから改めて話し合おうぞ」

千は首を横に振った。

「夢幻と約束した日がたぶん一、二日後くらいに……ああ、そうか、すっかり忘れてた。……まあいいや。迫ってる。だから、今は九狸には帰れない」

しばらくじつと千を見つめた後、斑尾はため息をついた。

「まあいいわ。どうせ直ぐに知ることになる。早いほうが良い」
斑尾は居住まいを正し、正面から千に向き合う。

「千よ。おまえと夢幻の婚儀。わしは認めることは出来ん」

「なぜ？」

千はまっすぐ斑尾の瞳を見て、問う。

「千。わしはな。此度の戦で、一つ大切な決断をしようと思ってる」

「……」

千は悲しげに顔を伏せた。

「わしは、雷怨寺を見限ろうと思う」

驚きはない。

北陸の状況、包む空気、そして夢幻の態度や姉との会話。それらから僕然とした予感があった。

父なら、裏切る。

「それは今しかない。織田が北陸に攻め寄せようとしている今が、唯一の好機じゃ。今よりも先に織田に付けば、雷怨寺家に潰されただろう。今より後に寝返る場合は、勝ち負けに関わらず著しく立場を悪くする」

「……」

「わしが守らなければならないものは、雷怨寺家ではない。九狸家じゃ」

「……」

「九狸家三十万石。その内の十五万石はわしの代になってから切り取った版図じゃ。その内の五万石は直轄とし、四万石は譜代に分け与えたが、残り六万石は、わしがかつて豪千公に命運を託したように、わしに下った武将の領土をそのまま安堵している。この意味が分かるな、千？」

小さく、千が頷く。

斑尾が雷怨寺から離れるように、斑尾の判断が彼らの利や信念から外れていれば、容易く斑尾から背いていく。それが戦国の世の主従関係だ。

「織田の天下は目前にあり、雷怨寺家は衰退の道をたどっており、此処で決断できないようなら、わしはわしに従う武家からの見放されることになる。戦国の世は武勇や至誠のみでは渡れない。豪千公も信長公も信玄も、そして及ばずながらこのわしも、誰もが時に己

を曲げながら、謀略を駆使してのし上がってきた」

「……」

「九狸家を生かすために、わしに従う者たちを生かすために、雷怨寺家を見捨てることに決めた」

「……そっか」

千はため息をついた。

じつと、斑尾は千を見据える。

「わしを恨むか、千よ」

「別に恨まないよ。わたしはわたしで、父ちゃんは父ちゃんだ」
千は正面から視線を受け止め、微笑んで答えた。

元々、父、斑尾は雷怨寺に対して強い忠誠心など持っては居なかった。
それは千を京に送り出す時、斑尾自ら言ったことだ。

千は千であり、父は父だった。

満足そうに、斑尾は頷いた。

「お前には期待しておる。この北陸では豪千公の人気はいまだ絶大じゃ。特に身分の低い者になればなるほど、その傾向が強くなる。そしてよそ者である織田に対する拒否感もある。まだ一悶着も二悶着も起こりえるし、何より寝返ったわしに対する風当たりは強まるう。だが千よ。姫竜王、豪千姫と呼ばれたお前はこの北陸で豪千公に匹敵する人望があるし、織田との架け橋にもなれる。……今はま

だその気にはなれぬだろうが、いずれはお前にもこの北陸のために骨を折って貰うことになる。お前は九狸千であって雷怨寺千ではない。雷怨寺に奪われた親子の縁。ゆつくりと取り戻してゆこう」

斑尾は立ち上がった。

「わしはこれから、夢幻どのに千を連れて帰ることを伝えてくる。いいな？ 千」

千はくすりと笑った。

「良いも悪いもないんだろ？」

「まあ、そうじゃ」

裏切りの事実を打ち明けられて、いまさら、雷怨寺城に戻るはずがない。

「別に抵抗するつもりはないよ。陸の喧嘩はそれほど強くないし。私の部屋に案内してくれ」

千はゆつくり立ち上がった。

「ここが、おまえの部屋になる」

「ここは父ちゃんの部屋だろ？」

「わしはこれから軍議があつて雷怨寺城を離れられん。夢狸号はお前にやる。千。わしは九狸城には戻らず雷怨寺城から鬼狸号で出撃する」

「この船を？ 豪勢だね」

さすがの千も驚いた。

夢狸号は九狸家の所有する船の中で、もっとも贅をこらした御座船で、九狸家当主の象徴でもあった。

容易く譲れる船ではない。

場合によつては戦の後、名目だけでも千に家督を押しつけるつもりかもしれない。その方が織田との交渉もやりやすい。

父の後に続いて、侍たちも、部屋を出て行く。

その一人を呼び止める。

「千柳。第一の竜舎に居るから、連れてきてくれないかな？」

父と二、三の言葉を交わした後、侍——猫勺宗一は千に向かって頷いて見せた。

扉が閉められる。

一人になった。

千はため息をついて、その場にあぐらをかく。

「末期だなあ」

縞馬が離れ、紅蟹に続いて、九狸も裏切った。

本当に雷怨寺家はがたがただ。

弱みを見せれば即座に背かれ、滅ぼされる。

それが百年続いた戦国の世界だ。

しかし今の北陸の状況が、とても分かりやすくなった。
こんな様ならあのうじうじした夢幻のこと。

確かに千のことを追い返そうとするかもしれない。

「見くびられたものだ。男の一人や二人。救えない千姫さまでも思っただか」

千は口元を苦笑で歪めた。

が、実際の所、方策など何もない。
結局のところ、

「さて。姉ちゃんはどうするのかな？」
姉頼みだ。

父が裏切る、千が二日で思い至るようなことを、まさかあの姉に限って想定外はあり得ない。

この状況を、さあどうするつもりか？

「……捕まって、良かったんだよね？」
ふと、疑問に思った。

「考えても仕方ないか」

姉から全く注意がなかったということは、どっちでも良かったんだらう。

というより、蓮の態度から見て姉が関わっているのはほぼ確実だ。どちらかと言えばこちらが正解か。

「……だとしたら、少ししゃくに障るな」
千はごろりと横になった。

夢幻が泣いて千と結婚したがってるだとか、嘗めきった嘘のせいで、どうにも雷怨寺城では居心地が悪かった。

姉には姉なりの思惑はあるだろう。

千は忘れっぽいし熱くなりやすいし気が変わりやすい欠点もあって、細かな演技は苦手としている。

が、状況が状況だ。

きっちり説明して貰えば、少くくらは姉の意見も尊重して自重できる温かい心も持っている。

「これで何もないなんて言いやがったら、泣くまで尻を蹴っ飛ばしてやる」

待つ間、良い機会だからじっくりと考えよう。

姉のことでも、父のことでも、北陸の未来のことでも、作戦のことでも、蓮に頼む三つの装飾品のこともなく。

夢幻はきっと私が好きで、自分自身の気持ちも、もう分かった。たぶん、わたしも夢幻が好きだ。

だけどやっぱり分からない。

生まれてこの方、最大の難問。

そろそろ真剣に考えておく必要がある。

いったい、わたしは、夢幻のどこが好きなんだろう？

という、その難問を。

女狐

千が斑尾に捕らえられた、翌日。

九狸城に帰還した神楽は、典禪と二人で密談を持った。

「……なるほど。千が、九狸城に移りましたか」

「斑尾殿の言うことでは、千姫様は自らの意志で九狸城に帰還されたそうです」

「もちろん、嘘でしょうね」

神楽は、小さく微笑んだ。

「人質にされることを怖れたのでしょうね。相変わらず肝の小さい口元に手を当てて笑う。」

じとりとした典禪の視線に気づいて、神楽はコホンと咳払いした。

千を連れ出した志村蓮は、神楽より一日だけ年長で、神楽の乳姉妹だった。

神楽と蓮は、背後を取ると蹴りを入れあう関係で、よく取っ組み合いの喧嘩をする仲だ。

千や縞馬火六夜のような超武闘派と荒っぽい遊びをすると命に関わることは早くから理解できたし、紅蟹静のような『淑女』はそのような遊びをしたがらないし、蹴るとすぐに泣く。

しかし志村蓮となら、性格も運動能力も似通っており、対等の勝負になる。

当人たちは楽しんでいるつもりだったが、しかし九狸城で行われた新年会で口の端から血を流しついにらみ合う二人を見た大人たち

はそう思わず、犬猿の仲として北陸では有名になった。

志村蓮はその風聞を活用して、商売を始めるようになった。斑尾から資金を引き出し、九狸青年会という組織を作り、神楽の妨害をやってくるようになった。

しかし裏では神楽と繋がっていて、互いに情報を交換し合い、手柄を売り買いしている。

重要な戦を前に志村蓮との情報交換は密であり、今回もちろん、神楽に筒抜けだった。

神楽は普段の七倍の料金を払っており、五倍しか払っていない斑尾よりも、優先されている。

「やはり多少不自由でも千姫様には雷怨寺城内にて」

「一緒でしょう。それに千は拘束すると盛大にへそを曲げて反逆します。城を燃やしかねない女ですから」

典禪の恨み言を遮り、神楽は一蹴する。

千が聞いていれば抗議しただろう、

「主犯は姉ちゃんで燃えたのはたまたまだ」と。

千を人質にして、斑尾の決起を抑制する。

それは不可能だ。

裏切るつもりならとくに根回しは済んでいるはずで、いよいよとなれば斑尾は千を諦めるだろう。

「やはり、九狸公は裏切るのだろうか？」

典禪が独り言のように呻く。

戦の前に人質となりかねない千を強行的に連れ帰るからには、そう見るのが自然だ。

神楽は微笑んだ。

一言も答えず、頷きもしなかった。

無用な問いだった。

答えは終わってみなければ分からない。

それに、今さら戦を止めることは出来ない。

縞馬が背き、紅蟹が裏切った。

織田の軍勢が北陸に侵入しつつある。

その侵攻を食い止めるためには、此処で紅蟹を叩いて置く必要があった。

そして紅蟹討伐には別の目的もある。

それは北陸を一つにまとめ上げることだった。

北陸は今、疑心暗鬼のまっただ中にあった。

どこの誰がいつ裏切る、織田に通じた、誰が誰を暗殺しようとしている。

温犬が、九狸が、笹雉が、雷怨寺家の家老の誰それが、そんな噂が紅蟹の離反以降、北陸の海を駆け巡っている。

互いが互いに、疑いの目を向けあっている。

いわば今度の戦いは、踏み絵だった。

互いが互いを信用し合うための儀式だ。

そしてその踏み絵をより強く踏まなければならないのは、宿老家ではなく、雷怨寺家の方だった。

ここで雷怨寺家が宿老家の寝返りを怖れて出陣を躊躇えば、間違

いなく雷怨寺家は見限られることになる。

仲間を疑って裏切りを怖れ、戦わずに織田の侵攻を受け入れ、滅びる。

そんな主家に従う武家が存在するはずはない。

彼らは堂々と胸を張って雷怨寺から離脱するだろう。

典禅は裏切りの可能性を五分五分と見た。

しかし神楽は、九分九厘と見ていた。

父の性格を神楽はほぼ正確に把握していた。

義に殉ずるような男ではないし、今の雷怨寺家には義に殉じるような価値もない。

典禅が重い口を開いた。

「裏切りの兆候は、何か見つかりましたかな？」

「いいえ。何も」

神楽が首を横に振る。

彼女の協力者たちは、誰一人として謀反の情報を掴んでいなかった。

神楽の答えに、典禅は安堵の息をついた。

「では、裏切りはないと思いますか？」

「さて。どうでしょうか？」

神楽は微笑み、首を傾げる。

しつこく典禅が尋ねるのには理由があった。

紅蟹の裏切りを最初に掴んだのは神楽だからだ。

ここ数年、織田包囲網の一角として、春先から夏の終わりまで、雷怨寺は織田の北ノ庄を攻め立てていた。

今年の春も、同様の遠征が行われるはずだった。

神楽が寝返りの証拠を押さえたのは、その寸前。

中央における情勢の変化から、紅蟹離反の可能性を警戒して、多くの密偵を漁師や商人に仕立てて紅蟹の海域に張り付かせていたのが功を奏した。

もし雷怨寺が例年のように出陣していれば、敵地で紅蟹に背かれ、大きな痛手を受けていたはずだ。

この裏切りの発覚によって、逆に紅蟹がいま窮地に陥っている。

しかし残る三公の誰かが寝返れば、状況はまた激変することになる。

「もしも」

典禪が言葉を選ぶ。

「もしも斑尾殿が寝返った場合ですが、神楽殿の組織で止めることは出来ましようか？」

神楽が首を横に振る。

「それは無理ですね」

神楽が作り上げた地下組織は、北陸全域に広がっていて、特に生家である九狸家では、約三割に何らかの形で関与できるまでになっている。

が、決して強固な組織ではない。

中には神楽のために命を捨てる気概を持つ者も居るが、大多数は彼らの利害に反しない範囲での協力者でしかない。

それは神楽と斑尾を天秤にかけたどっちつかずの備えだったり、

故豪千公に対する義理立てだったり、神楽を純粹に応援する行為だったり、大半が小さな利得のため、だったり、色々だ。

神楽は彼らに迷惑をかけないようにしながら、そして時に見返りを与えながら、協力者を増やしていった。

五年の歳月をかけて。

今の北陸の情勢、九狸家が雷怨寺家に背くような状況になって、捨て駒を要求して従う者は少ないだろう。

それにその行動を取ってしまえば、そこで終わりだ。

雷怨寺家の被害は押さえられるだろうが、九狸家の被害は甚大になり、そして、表面に出た神楽の組織は消滅する。

それでは何も為らない。

いずれ来る織田の侵攻を止めることは不可能だ。

「ですが、いちおう、手は打っておきます」

「具体的にお聞かせ願えますかな。信用しないというわけではないのですが」

典禅の言葉に、神楽は穏やかに微笑んだ。

「私の協力者の中には、父の信任を得て、九狸家で要衝を勤める者も幾人かいます。此度の出陣で部隊を指揮する者にも、もちろん協力者は居ます。ですが、その誰一人、裏切りの情報を掴んでいません。となると裏切るつもりはないのか……」

「それに越したことはありませんな」

「たとえ裏切るにしても、父は信頼できる極少数、多くても四、五人にしか伝えていないはずです」

神楽の言葉に典禅が頷く。

「そのような状況で、戦場で突然軍を反転すると、まず混乱するはずです。まあ、今の北陸の状況、裏切りは誰もが想定していますので、それほど混乱しないかもしれませんが、混乱させます。もしも寝返りがあった場合、協力者には、混乱したふりをして的確に味方の行動を妨害するように伝えておきます」

典禅はすこし黙考してから頷いた。

それから、典禅は深々と頭を下げる。

「よろしくお願いします」

神楽は微笑んでその礼を受けた。

機は熟しつつあった。

今度の戦で父は裏切る。

そして雷怨寺は負ける。

そこまで追い詰められて初めて、雷怨寺家は真に神楽を軍師として受け入れるだろう。

それからだ。

北陸を一つに、夢幻を中心として一つにまとめる、最初にして最後の契機が訪れるのは。

五年の全てをぶつける戦が始まるのは。

決して分の良い勝負ではない。

織田信長が演じた桶狭間の戦い、その乾坤一擲にも似ている。

それに彼女は、大切な妹を引きずり込もうとしていた。

女狐（後書き）

姫竜王。

雷怨寺城編、終了です。

ライトノベル応募用に書こうとしたので、枚数の都合から超短縮展開。

オンラインでやるなら五倍くらいの分量で、かごめとの対決や夢幻の返事もやった方が作品としては成り立ったような。

次から九狸城でちょっと遊んで、第一部は完。その後は戦になります。

九狸城の姫竜王（母と千）

九狸島は、丸い本島　九狸島　を中心に、南東から北西に広がる九つの細長い島と、小さな無数の島によって構成されている。

その姿から九つの尾を持つ狸、九狸の名が付いていた。

九狸城は、本島のちょうど顔の位置にあった。

昼を少し過ぎた時刻。

二日の船旅を終え、千の乗った夢狸号が九狸島へと到着した。

晴れ渡った空の下、九狸城の港で千を迎えたのは、九狸家・筆頭家老の八尾三徳やっおさんだった。

斑尾の腹心中の腹心で、厚い信任を受けている。

彼は斑尾の実弟でもあり、つまりは千や神楽の叔父になる。

彼の後ろには、中年の侍ばかりがずらりと十人ほど並んでいた。

千は三徳を見て、ちよつと顔をしかめた。

三徳はとにかく小姑みたいにいるさい男だった。

箸の持ち方や座り方にまでいちいち口を出してくる。

鼻くそをほじって座布団に擦り付けたときは半刻近くもねちねち講釈を賜った。

千の見たところどうやら彼は偏ったお姫様像を持っているようだった。

挨拶をして、ご託を並べようとしている三徳を千は片手を挙げて

遮った。

「先に母ちゃんに挨拶してくるよ。待たせると後がうるさいから」

三徳を押しつけて棧橋を進む。

母は、容姿も性格も姉の神楽に似ていた。

後回しにすると後がうるさい。

其れを熟知している三徳も、これには異を挟まずに渋々後を付いてくる。

千と神楽の実母、九狸千寿子は、九狸家が滅ぼした物部家の家来、猫勺家の娘で、あまり身分の高い出身ではなかった。

しかし美人だった。

近隣で一番の美少女と評判だった彼女を、略奪の形で父は手に入れている。

ただ、あまり束縛もせず側室も作らない父と母の仲は、それほど悪くないようだった。

九狸千寿子、は年に数回ほどしか、城の外に出ることがなかった。整った清楚な顔は、上気して、時には青白く。

少し歩くと、ふらふらとよろめき、侍女に支えられ。

ことあるごとに、口元を手で押さえる。

城下の者たちはそんな彼女を見て、蒲柳の質と噂した。

が、近づけば彼らも気づいただろう。

酒臭いと。

そう、千寿子は飲んべえだった。

千は足を止める。

彼女の前に豪奢な館がそびえていた。

城の敷地の最奥部。

奥の院。

そこが千と神楽の母、九狸千寿子の城である。

通称『酒樽』だった。

姉が年齢を重ねて酒浸りになればきっとこんな状態になるのだらう。

と、五年前に感じたそのままの姿で、母親は千を迎え入れてくれた。

「よくぞ帰ってきてくれました。千」

色っぽく上気した顔でにこにことお酒くさい息を吐いて、千寿子は千を温かく迎えてくれた。

「おみやげは？」

千に手を差し出して、千寿子は首を傾げた。

「あれ？ 届いてませんか？」

千も首を傾げる。

千の所有する酒類から、姉が選んで持ち帰ったはずだった。

千寿子が、反対側に首を傾げ直して、扇子で、障子を指し示した。

侍女が障子を開ける。

隣の部屋には、京のお茶が大量に積まれてあった。

「まさかあの葉っぱ、とは言いませんよね？」

母のこめかみに、小さく血管が浮かんでいた。

「えっと……………」

肯定するか、言い訳するか、しばらく考えた末に、けっきょく千は頭を下げた。

「ごめんなさい。忘れてしまいましたっ」

扇子が飛んできて頭に当たった。

「…………お酒」

恨みがましい目で、母親が睨んでいる。

「京の、お酒」

落ちてゐる扇子を指さして、ちよいちよいと手招きしてるので、仕方なく千は扇子を拾つて手渡した。

「美味しい京のお酒は？」

千寿子が首を傾げて千を見あげる。

「ありません」

その扇子でばかりと頭を叩かれた。

母親は悲しそうにため息をついた。

「薄情な娘たちです。お腹を痛めて産んだ母のこともお酒のことも忘れ果ててやれ竜技だ下克上だとはしゃぎ回つて挙げ句の果てにおみやげ一つ持ち帰らずにどの面下げてあなたはこの家の敷居をまたいだのですか！」

「いや、そこまで怒らなくてもいい」

ばかりと扇子で頭を叩かれる。

「私は九狸家に嫁いだとき、感動しました。旨い。何て美味しいお酒だろうと」

「はあ」

「それから斑尾は私のためにお酒を島々から取り寄せました。飲んだことのない桃源郷のような美酒たちでした」

「はあ」

「そして豪千公です。あの方はすばらしい方でした。雷怨寺に下れば、この酒を一本まるまる差し上げようと。小さな小瓶に入ったお酒を下さりました。南蛮酒です。私はあの日、ついに南蛮の至宝・ワインと巡り会ったのです！」

「……」

母はきらきら目を輝かして、若かりし日々のことを語っているような何か間違ってるような？

「まだ九狸は戦える。そう斑尾は言いますが、私は待てません。私は荷物をまとめて雷怨寺家に向かおうとしました。いっそワインに嫁ぎ直そうと」

「……」

「あの時代は良かった。豪千公の存命時は、雷怨寺が入手した珍しい美酒はまず九狸家に下賜されたものでした。毎日美味しいお酒に囲まれた幸せな私の青春時代です」

「……」

母は肩を落とした。

「今は下り坂です。豪千公がお亡くなりになってから、質素儉約、質素儉約。はんっ、あの糞有馬国清めが！ 年々貢がれる酒の質が悪くなっています。分かりましたか、千？ 我が家の今の窮状が？」

「……はあ」

「千！ あなたは事の重大さが分かっているのですか！」

「はあ——いたっ」

「最近では、ふんつ、斑尾が入手してくる酒もどこかで飲んだことのあるようなお酒ばかり。百年の恋も冷めますわね」

……それは恋じゃないよ、お母さん。

「北陸に帰ってきた頃は色々とり寄せてくれていた神楽も、最近
は反抗期で差し入れてくれなくなりました。こんなうわばみに使
う金があったら、はっ、自分で蟹買って食べますわ、だと、あの小
娘め！ 誰のお酒で大きくなったと思ってるのかしら！」

母はめしめしと扇子を折り曲げていた。

「神楽は大変薄情で生意気な子に育ちました。育て方を間違えまし
た。千、あなたはあんな生意気に育つんじゃないやありませんよ」

「はあ。精進します」

「よろしい」

母は頷いた。

「それはそれとして、千」

「なんででしょう？」

やっとお酒から話が離れてくれた。
千はほっとして居住まいを正した。

「聞けば京には豊かな味わいのお酒が何十種類もあるとかないとか？」

離れてなかった。

「まあ、あるといえばあるのかな？」

「私も一度、行ってみたいものです」
ふう。と母はため息を吐く。

「もう一年近くもワインを口にしていませんの」
哀切に満ちた声だった。

さすがの斑尾も千寿子の京都行きだけは反対していた。
帰ってこなくなるのが目に見えてるからだ。

「京に行ったら私の家を使うと良いよ」
千が言う。

「葡萄とか杏とかの南蛮渡来のお酒とか。流水海域や南のさつまの芋焼酎、朝鮮や明国のお酒とか。色々貰ったのがあるから好きだけ飲んで良いよ、うわっ」

超高速で飛んできた扇子をかわす。
後ろのふすまを貫通して、扇子は飛んでいった。

「もってかえりなさい！　そういうものは！」

鬼の形相だった。

「す、すいません」

千が肩を縮こまらせる。

「ですが、なるほど。この戦が終わったなら私は京に行きましょう。断じていきましょう」

ふむふむと唸ってから。

どうやってまいりましょうか。

やはりこれは神楽に頭を下げるしかないのでしょうか。

あの小娘に？ いっそ、この戦のどさくさに。

ぶつぶつ言っている。

千に向き直った。

「まあいいです。では、千。次に来るときは必ず私を唸らせる銘酒を持ってくるように」

「うん。えっと………そこまで欲しいなら、誰か京に使い出して持ってこさせるようか？ お酒」

「千！」

母がいきなり千に襲いかかり、もとい抱きしめた。

「なんて、なんてあなたは親孝行な娘でしょうか！ 産んで良かったです！」

滂沱と涙を流していた。

「産んで、良かったです！」と繰り返していた。

「はあ」

……お酒くさい。

と千は思った。

けっきょく、酒の話だけして、千は母の部屋を後にした。

母の元を辞した千を、筆頭家老の八尾三徳が待ち構えていた。その後ろには五人の中年侍が控えている。

連行されるように、千は八尾三徳の執務室へと移動する。

織田の間諜が城下に紛れ込んでいる疑いがあるのだの。

だから勝手に城を出られては困るのだの。

竜に乗られては困るのだの。

城の中でも常に五人の供を付けさせていたのだきいたのだの。

とにかく、戦が終わるまでの数日の辛抱です。

殿がお帰りになるまでの辛抱です。

くどくど念を押され、千はげんなりとしつつ了承した。

状況が状況なだけに、ある程度の不便は覚悟していたが、窮屈になりそう。

雷怨寺城も居心地が悪かったが、これなら縞馬にでも入り浸っていた方がよかった。

八尾三徳はほつとしたように頷いて、それから、にこにこ微笑み。

「ご結婚される為にお帰りになられたとか。良い機会ですのでこの際、千姫様には行儀作法を学んでいただきたく」

千はますます顔をしかめる。

八尾三徳が手を叩くと、なんだか其れっぽい人たちが六人ほどやってきた。

行儀作法の先生が二人に、言葉遣いの先生。

お裁縫の先生に。お姫様史（古今東西お姫様の歴史）の先生。算術の先生。

「な、なぜ……算術まで」

最後の一人は、顔見知りだった。

「こちらの方は、長崎で大強引流を学ばれた琴の名人、しゃかどつ釈迦堂いくと逝兎さまです」

「釈迦堂逝兎です」

丁寧に頭を下げるのは、男か女がよく分からない容姿をして、男か女がよく分からない服装をして、男か女がよく分からない声をした男だった。

彼は長崎の出身だが京に長く滞在していて、千とも交流があった。

「他にも五人ほどお呼びしています」
にこにこ八尾三徳が微笑む。

千の顔がますます引きつる。

京に渡る前、千が九狸城にいた半年の前半、室戸はまず姉の神楽を理想のお姫様にしようと頑張つて城を燃やされ、後半の三ヶ月はやつれてあまり二人の前に姿を見せなくなっていた。

復活した室戸は姉のことは諦めて今度は千に狙いを定めたようだった。

「奥方様がお見えになりました」
との緊張した声がふすまの向こうからした。

「奥方様が？」

室戸が驚いた声を出して慌てて立ち上がる。

九狸千寿子が室戸に用（酒関係）を命じる時は、まず間違いなく呼びつける。

斑尾に用（酒関係）がある時も同様だった。
そんな彼女が、突然にやってきた。

「千！ 大切なことを忘れていました」
ふすまが開いて母が踏み込んできた。

急いできたのか、息が荒い。

室戸が慌ててその場に平伏する。

「京には使いを出しましたか？」

「いや、まだだけど？」

「何をぼんやりしているのですか！ ……いや、いいのです。それは好都合でした」

ふう、と母は息をついて。

女中が敷いた座布団に腰を下ろす。

「千。ワインです。ワインはありますか？　ないのなら手に入りませんか？　赤いやつです。赤いワインです。もう一年も飲んでいないのです」

「あるよ。確か。私の蔵に」

「ありますか！　ありまするのか！　それを私はご所望です！」

母が身を乗り出した。千は少し身を引き、

「わ、分かった。必ずワインは送るように手紙に書いておく。絶対書いておくから」

「奥方様。今は千姫様の教育で」

「だまらっしゃい」

口を挟む三徳を、千寿子はぴしゃりとはねつけた。

じわりと脂汗を滴らせながら、三徳は平伏してだまる。

酒の質の低下と共に、千寿子の機嫌は日に日に悪くなっている。

「千。他にもあなたが美味しいと思ったお酒があるのなら遠慮無く送らせてくださいね」

恥ずかしそうに俯いて、そんなことを言った。

「うん。わかった。でもさ、ワインって辛いのか甘いのか色々

あるけど。どんなのが良いの？」

「どんなのと言われてもあなたが持つて……………」

母の拳動がおかしくなった。

こほんと咳払いして、

「せ、千、つかぬ事をお聞きますが、まさかと思いますが、あなたはあの伝説のお酒を複数、所有していらっしゃるのですか？」

「たぶん。五〇本くらい」

「う、ごじゅつつつぽん！」

千寿子はよだれを垂らし、目から涙をこぼした。

鼻水も。

くらりと意識を失いかけ、侍女に支えられ、侍女がよだれと鼻水を拭いた。

母は居住まいを正してから、それでもはあはあ荒い息で、

「千、念のためにお尋ねしますが、あなたはお酒をどのくらい所有していらっしゃるのでしょうか？」

「さあ？ 蔵一つくらい？」

千寿子は立ち上がった。

「千！ 今日からあなたがこの城の主です！ 三徳！ 急いで天守の間を掃き清めて千に明け渡しなさい！」

「しかし斑尾様のご許可な」

「斑尾？ 誰ですかそれは！ 良いから早くしなさい！」

平伏する家老は蹴りを入れられ、

「はい！ ただいま！」

慌てて飛び出していった。

「さあ、千。長旅で疲れたでしょう。温泉にでも浸かって旅の疲れを癒してきなさいな」

千寿子が優しく千の肩に手を置いた。

「え？ うん。まあ……いいの？」

「もちろんですわ。好きなときに好きなだけ使ってくださいってかまいませんのよ？」

千寿子の館には温泉が湧いているが、それは千寿子専用だった。

特に疲れてはいなかったけど、千は母の所有する温泉には少しだけ興味があった。

「でもその前に。忘れると……怖いから」

千は京の知り合い三人に、蔵にあるありったけのお酒を九狸城に送るよう手紙を三通ずつ書いて、京と九狸島の両方に店を出している海商の全てにその手紙を届けるよう、城の侍に念を押して渡した。

大切な仕事を終えてから、安心して温泉に浸かって身体を休めた。

九狸城の姫竜王（姫のお戯れ）

温泉は湯量も少ないしごく普通の檜風呂で、奇抜な何かを期待していた千はすこしがっかりした。

温泉から上がると身体を拭いて、侍女の用意した小袖に着替えて、脱衣所を出る。

脱衣所の前では、八尾三徳を含めた六人の中年侍と、薙刀を持った侍女一五人が、にらみ合っていた。

侍女たちの小袖の肩口には、とっくりの紋があった。母の配下のあかしである。

「なにごと？」

千は、侍女に尋ねた。

まさか覗きではあるまいな。

侍女たちではなく、三徳が真つ赤な顔で、叫んだ。

「奥方様はああ申されましたが、この城の主は斑尾様です。斑尾様の許可無く、天守閣を明け渡すわけにはいきません！」

「別に良いよ。天守閣は。私の部屋空いてるだろ？」

千は顔の前で手を振った。

あまり滞在してなくとも、千の部屋は生まれたときからこの城に用意されていた。

斑尾が怖い顔のまま、深く頷く。

「それより千柳どこかな？ 案内して」

「駄目です。千姫様を竜に乗せるなど斑尾様から堅く命じられています！」

歩きかけていた千の足が止まる。

千は軽く眉をひそめてから、作り笑顔に切り替えた。

「乗らないから。案内して」

「駄目です！ 本丸の敷地から出ることはありません！」

三徳は拒絶した。

千は無表情になつて三徳を見据えた。

千は腕組みし、それから、口元に笑みを浮かべ、侍女の先頭にいる女性に顔を向ける。

「で、そちの用は？」

「だいたいのところ、想像は付いたが一応確認する。」

二十歳半ばくらい。

長身で、腰までの長い黒髪を後ろでまとめ、額金をしたその女性は、その場で正座してから、

「千寿子様から命じられました。この城において千姫様のお世話をさせていただきます、一尾和子と申します。ご用の際は、全て私に、または後ろに控えますこの者たちにお申し付けください」

「千姫様のお世話は、この三徳が致す。勝手な振る舞いは許可でき

ない」

「千寿子さまの命令です。男どもは引っ込んでいてください」

一尾和子が、脇に置いた薙刀に手を伸ばし、立ち上がる。

「たとえ千寿子様の命令でも、こればかりは譲ることは出来ませんな」

三徳も腰の太刀に手を沿える。

「まあまあ。お二人とも」

千は刃傷沙汰に及びそうな二人を仲裁した。

侍女たちは予想通り、母が貸してくれた私兵だった。

これだけ居れば、十分始められるが、まだ情報が足りない。

千はわくわくする気持ちを胸の内に押さえ、

「それで、一尾さん。戦力はこの十五人？」

「千寿子さま直属の侍女が三百人。九狸城で立ち働く女人が七百人ほど。合わせて千人、つつがなく動員できます」

不穏なやり取りに、三徳たちが青くなる。

それを横目に、千はうなずき、更に尋ねる。

「で、敵の戦力はどのくらい？」
「敵っ!？」

と三徳が声を荒げる。

落ち着いた声で和子は、

「城に残っておりますのは大半が年寄りばかり。大がかりな戦であり、若い武将の大半は出陣しております」

「わ、若い者もおるわ！ 二の丸、三の丸も合わせれば五千人を超える兵があるぞ！」

三徳がつばを飛ばして口を挟む。

一尾和子が静かに首を横に振った。

「九狸領は紅蟹とも遠く、守りに多くの兵を残す必要がありません。戦の重要性、その規模を考え、城全体で三千人も残っていればいい方でしょう。そして、二の丸三の丸は動きません。理由は簡単。二の丸、三の丸が敵に回れば、私たちは劣勢を挽回するために城下の者たちを扇動して事が予想以上に大きくなるからです」

「じよっ城下を扇動だと！ おぬし、それでは謀反！ いや、もはや一揆ではないか！？ そんなことをすれば一尾家はどうかっても取りつぶしにあうぞ！」

ふっと和子が口元で冷笑を浮かべる。

「取りつぶしになる？ 一尾家が？ 何故でしょう？ わたしは、千寿子さまの命で千姫さまの手足として動くだけです？ 斑尾さまが問題にすることは思えません。むしろ、お危ないのは室戸様、あなた様の方でしょう。城を預かりながら城下まで巻き込む争乱を起こしては、責任問題は免れませんね」

「ぐっつ」

「だいたい室戸さま。あなたは千姫さまの機嫌を損ねてお酒が一滴

も入らなくなった場合、どう責任を取るおつもりですか？ 一族郎党でどう責任を取るつもりなのですか？」

「一族は関係はないぞ！ 断じてないぞ！」

「五十本ものワインの恨み。一つ二つの武家が潰れる程度で済むかどうか」

大仰に嘆いてから、一尾和子は、三徳の後ろにいる五人の中年侍を見る。

うち、三人が目を反らした。

「おそらく、二の丸三の丸の守りを命じられた方々は巻き込まれることを嫌い、中立の立場を取りましよう。本丸の兵を千人として、この九狸城では千姫さまの人気は絶大です。若い兵の半数くらいは引き抜くことが可能と見て、当方の兵力は約千五百人。室戸さまの兵力はせいぜいが五百人かと」

圧倒的優勢。

和子の口上に、しかし八尾三徳も冷笑で応えた。

「本丸の兵が千姫様に従うと？ あり得ませんな。人生を棒に振る物好きが居たとしても五十人ほどでしょう。それに九狸城で働く女性の数は、確かに七百人を超えるが、それは二の丸三の丸も含めてのことで、本丸に限定すればせいぜいが二百五十人ほど。その半分が千寿子様の部隊に合流したとして、殆どが女人の五百人少々。本丸を守る九百五十人であつという間に鎮圧できるわ」

「……」

「……」

睨みあう。

険悪な様相だが、実際に戦を起こす気は、八尾三徳にも一尾和子にもなかった。

お互いにそれをすでに肌で感じ取っていた。

どちらが主導権を握るかの、はったりの勝負だった。

一尾和子としては千の世話を自分たちが出来ればいい。
それで千寿子から与えられた役目は十分に果たせる。

八尾三徳としても、この際、城内での自由は致し方ない。
天守閣を千に明け渡せという無理難題を反故にして、千を城の縄張りから外に出さないことだけ勝ち取れば良かった。

どちらも自分たちに必要な条件と、相手の呑める条件を見据え、
その上でより有利な条件を勝ち取るうとの論戦だった。

そして千もその空気を理解していた。

「面白いな。うん面白い」

にいつと笑った。

「でもお前たち、まさか本当に戦争するつもりじゃないだろうな？」

千の言葉に、三徳も和子もさも困ったような顔を作った。

「いえ」

「まさか」

「うん。そうだろう、そうだろう」
と、千はしたり顔で頷いた。

ここで千が妥協案を提示すれば、三者三様、それなりの条件を分かち合えただろうが、しかし千はそういう人間ではなかった。

京の都に君臨する暴君の一人だ。

「だから、模擬戦をしよう」

「模擬戦、ですか？」

和子が、戸惑った声を出す。

「うん。模擬戦。まあ遊びだ。あまり大事にしてはまずいので、本丸限定でやろう」

「本丸限定？ いったいどの様な模擬戦をするつもりですか？」

三徳の声は警戒感に満ちていた。

「天守取り合戦」

その不吉な響きに、三徳と和子が表情を引きつらせる。

「天守閣を占領した方が勝ちだ」

そのままだった。

三徳と和子が何かを言おうとするが、千は声を張って、それを打ち消し、その場にいる者たちに伝える。

「模擬戦だけに白刃は禁止だ！ 矢玉も禁止！ 竹刀を奨励！ 誰でも自由参加！ 室戸と私と好きな方を選んで加わればいい。以上！ さあ、始めるぞ！ 触れ回れ！ 仲間を増やせ！」

だつと駆け出し、

「私と三徳で模擬戦をするぞー！ー！ 勝った方には蔵を開けて酒を振る舞うぞー！ー！ さあ、わたしに従う者は付いてこい！ 立ちふさがる者はぶつたおす！」

自ら触れ回っていく。

「お待ちください！ 千姫さま！」

三徳が慌てて追いかけて、その後ろを残りの中年侍たちが追いかける。

状況が飲み込めず受け入れられず、和子は、呆然と突っ立っていた。

まだ十歳ちょっと、若い侍女の一人が、駆けだした。

「千姫さまと室戸さまで模擬戦をしますー！ー！ 白刃は禁止！ 矢玉も禁止！ 竹刀奨励！ 誰でも参加自由です！ どうぞ千姫さまにお味方してくださいませー！ー！ お酒振る舞いますー！ー！」

「ちよつ、ちよつと、いおり！ あなた！」

和子はその侍女の名を呼ぶが、彼女は触れ回りながら駆け去ってしまう。

おろおろとする仲間たちを見回してから、和子は、苦渋の声を絞り出す。

「仕方ありません。とりあえずは千姫さまに従います。勝利してかなだめましょう」

天守閣を千に明け渡せと言ったのは千寿子だし、千はこの国の姫だ。

大事にはなるまい。

まず気持ちよく勝たせた後に、家老衆との調停を行う。そう決断する。

その手の交渉事に彼女は自信を持っていた。

「雪帆は五人を連れて、侍女に招集をかけてください。あとの者は私と一緒に千姫さまを追いますよ！」

九狸城の姫竜王（姫のお戯れ、その二）

九狸城では、『奥の院』を含めて七つの曲輪をまとめて、『本丸』と呼んでいた。

奥の院と、天守閣のある『天守曲輪』の間には、細い直角に折れ曲がった曲輪が一つあるだけだ。

天守閣と奥の院の緩衝地帯であり、両端に門が一つずつ。

どちらも『奥の門』と呼ばれている。

奥の院に辿り着くには、必ずこの『奥の門』と天守曲輪を通過する必要があった。

『奥の門』の『奥の院』側。

赤く塗られたこの門を守っているのは、千寿子の直属の侍女侍たちだった。

7人ほどがたむろしていた。

この門を千が通るのは短い時間に四度目で、すでに顔見知りだ。

「お仕事ごころうさん。わたしと三徳とで戦争ごっこをすることになった。天守閣を取った方が勝ちだ。三徳が来ると思っから足止めしてくれ。あと、仲間増やしてね」

それだけを伝えて、門をくぐる。

「お待ちください！ 千姫さま——！」
三徳が追ってくる。

「じゃあ、頼んだ！」

千が駆け出す。

「あつ、こら！ お前ら！ どけ、どかぬかー！ー！ー！」

「すいません。よく分からないけど姫さまに通すなと命じられてしまったので」

千寿子の配下は、この門の管理に置いて、重職に対しても一切の遠慮はなかった。

三徳は薙刀を突きつけられ、通せんぼを喰らってしまった。

「白刃は禁止ですよー」

と千の後を追って来た侍女が、彼女たちに約束事を説明している。その間も三徳たちは動けずにいる。千は先に進む。

『奥の門』の天守曲輪側。

こちらの門は、男の侍が門衛をしていた。

同じく四度目の対面だ。

奥の院への出入りを監視する門であり、客の帰りを阻止する門ではない。

千は「ごくろうさん」と挨拶しただけで、模擬戦の説明はせずに、そのまま走り抜けた。

抜けた先は、もう天守曲輪だ。

天守閣は、天守曲輪のど真ん中にある。

城主不在の折だけに、この区域の警備はさして厳重ではなかった。それ以前に、千は九狸家のお姫様であり、あやしい人物ではない。

けっきょく千はさしたる妨害を受けることもなく、天守閣の前に

辿り着いていた。

入り口を警備する者は、両脇に二人。

「ようっ」

千は、にかつと笑って手を振った。

「あつ、千姫さま！」

千は彼らのことを知らないが、彼らは千のことをよく知っていた。帰還の噂もすでに広まっている。

「わたしと三徳で模擬戦をやることになった。勝ったら遊び放題。負けたら軟禁されて勉強漬けだ」

泣き真似を挟み、

「頼む、協力してくれ」

千が一人の侍の両手を取って、懇願する。

「あ、はい。その、それはもちろん」

「舞台は三徳と話し合って天守閣と決まった、もう始まっているんだ、説明は後だ、案内してくれ」

「え？ あのこと……」

おたおたしている侍を無視して、千は自ら扉を開き、進入する。

「あっけねー……」

最上階の畳に寝転がって、千は呟いた。

「ま、当然か」

卑怯なまでに勝てる条件を一方的に設定したのだから。

とりあえず千の勝利だった。

天守を押さえたのだから、実情は別にして、上っ面は、千が九狸城を乗っ取ったことになる。

その上っ面が、人を動かす理由になり、動いた事実が、また次の結果に結びついていく。

部屋の外では、十二人の侍が落ち着きなく千を見守っていた。

天守閣に押し入り、ただ単に見聞しながらのんびり歩くお姫さまを、力ずくで止めるわけにも行かず、人数を増やしながら付いてきたのだ。

「約束通り、酒を振る舞わなくちゃな」

千は酒や食料を保存してある蔵を目指した。

遅れて到着した侍女たちも加わり、大所帯となる。

取り巻く者たちの意見や質問を、ずれた回答ではぐらかしているうちに、蔵に到着する。

「さあ！ 祝勝会だ！」

千は酒樽を次々に引っ張り出し、惜しみなく振る舞った。

もう手当たり次第にだ。

何事かと集まる侍に、杯を渡してどんどん注いでいく。

ぜえぜえはあはあ、やっと解放された三徳たちがやってきた。

「お、お前ら！ な、何をやっておるか！」

大音声で、一喝した。

「大切な戦のさなか、城の守りを預かる者たちが、蔵を破って酒宴を開いたなど、こんな事が殿に知られたらいったいどういう事になるか！」

気まずい空気が流れる。

そりゃそうだよな。 どうしよう？

と侍たちの顔に戸惑いが浮かんだ。
ちらちらと千を窺っている。

ここで千が妥協案を提示すれば、それなりの条件を分かち合えただろうが、しかし千はそういう人間ではなかった。

京で「危険人物！」と屋敷の前に、帝の署名で立て札が立った女性性は、一四人いる。その中でもっとも大きい看板が千姫だ。

「せっかく、帰ってきたのに」

千は顔を伏せた。

「そんなに、私が邪魔なのか？」

震える声で、泣き真似を始めた。

「邪魔だとかそういうことではございませんぞ！」

三徳が抗議する。

「ただ、みんなと一緒に騒ぎたかったんだ。そんなにいけないことなのか？」

目元を手で覆って、三徳を上目遣いに見つめる。

「いえ、だからそう言うことではなくですな。斑尾さまが、」

「わたしは夢幻に嫁いで、雷怨寺家の人間になる」
主家の奥方になる。

斑尾にも縛る権利はないぞ。

暗にそれをほめかし三徳を牽制した後、

「九狸家の姫としてみんなと遊べるのは残り少ない日数しかない」
「で、ですから、」

「いいよ。みんなが帰れって言うなら帰るよ。もう二度と来ない」
「だ、誰もそんなことは言っていないぞ！」

「どうだ！ お前たち！ 私に失せろというのなら、その手にした杯を今すぐ叩き割れ！」

誰もさすがにそんなことは出来ない。

「わたしは此処にいていいのか？」

千は周りを見回し、酒に酔って顔を赤くした気の弱そうな一人を標的に見定めた。

「え？ は、はい。もちろんです！」

「ありがとう！」

鎧の上から、ぐっと抱きしめた。

「他の者たちはどうだ？」

「姫！ ですからそんなことでは——」

「三徳だけは、どうしてもわたしを追い返したいらしい」

その場にいる者たちの鋭い視線が、三徳に突き刺さる。

あたりには酒臭い息が漂っている。すでにみんな酔っている。

「いえ！ 居てかまいませんぞ！ もちろん居ていただいでかまいません！」

「そうか。なら、私のお酒、飲めるな？」

「え？」

「飲めないのか？ 私の注いだ酒は？」

「あ、いえ。もちろん飲めますとも。ただ」

千は三徳に全部言わず、むりやり手に持ったとつくりを三徳の口に押し込んだ。

「さあ飲め！ 全部飲め！」

「げふごふげふ！」

全て注ぎ込むと、銚子を侍女から受け取り、高く掲げた。

「三徳も飲んだぞ！ みんな仲間だ！ 一人一人、わたしが酌をしてやろう！ 今日みんな大いに騒ごう！ 京の話を聞かせてやるおまえたちもこの五年間の武勇伝を聞かせてくれ！ 明日は竜技会を開くぞ！」

うおーっ、となんだか盛り上がる。

「うつ、げほ。姫。いくらなんでもこんな事をして」

咳き込みながら、三徳がまだ抗議している。

千は三徳の肩を叩き、低く抑えた声で、

「本丸のみんなが私のことを慕ってくれていることはよく分かった。二の丸三の丸はどうだろう？ 城下町のみんなは私のことを愛してくれていると思うか？」

「ひいっ」

三徳が悲鳴を上げた。

「どうする？ もう一度範囲を広げて試してみるか？ それとも本丸だけで終わらせるか？」

「……」

「さあ、飲め。注いでしんぜよう」

千は微笑んだ。

三徳は泣きながら酒を飲んだ。

九狸城の姫竜王（北陸と京都）

それから二日。

千は楽しく過ごした。

九狸家裏切りの事実は、胸の内に封じてある。

父から直接聞いただけで、証拠がない。

伝えたところで雷怨寺家も対応に苦慮するだろう。

理由もなしに出陣が延期されれば、全軍に動揺が広がる。

それに、城を奪われてからの三徳たちの対応がぬるすぎるようにも感じる。

考えすぎると、告げられたこと自体が父の計略に思えてくる。

姉などその典型だが、策士は相手がどのように動こうとも得するように罠を張ってから、餌を投げてくる。

そんなわけで、千はその件を保留した。

こうしていれば、いずれ神楽が飛んでくるだろう。

その時に相談すればいい。

狸の対処は狐がすればいい。

日が陰り、天守閣でのんびりしていると、釈迦堂がやってきた。

「やあ、千。あいかわらずの自由権現ですね」

『自由権現』または『自由どの』。

この一年、京で急速に定着してきた千のあだ名だ。

自重しろ、の意味もある。

「お前はあいかわらずなよなよした格好をしているな」

「ははは。人気商売ですからな。男の場合は、逆に少し女っぽい方がご婦人にも殿方にも人気が出るのですよ。そう、凶暴凶悪な女性である千姫が男女とわず人気がおうっ」

千の蹴りを後ろから浴びて、窓の外に落ちそうになり、釈迦堂は縁側にしがみついている。

「千。無言で人を殺しかけないでください」
「やかましい」

帝の配下で、隠密もやっている釈迦堂はこの程度のことです。死なない。

死んだらその時はさすがの千だって謝る。

「それで、なにか用か？」

「あら、おつめたい？ 用がないのなら会いに来てはいけないのですか？」

「ないのならそれでいいよ」

「まあ用があるからわざわざ千の後を追って、京から来たのですけど」

「……」

「京のみんながあなたの帰りを待っています。みなさん、寂しがっていましたよ」

釈迦堂はため息を吐いて、

「千が居なくなつて直ぐですよ。鬼の居ぬ間に、公家と武家で喧嘩を始め」

「誰が鬼だ」

公家と武家の娘たちの闘争は、京の名物の一つだ。今更過ぎる。

「あと信雄さまが千の留守宅に忍び込もうとして雀に天誅を喰^{すすめ}らつていました」

千は小さく黙祷した。

雀は柳生の娘で、千の四つ年上。

京で自警団を率いていて、怒らせるともの凄く怖い、怒らせなくてもかなり怖い。

特に女の敵や男全般には容赦がない。

京の男社会の中では、自警団に対する自営組織が出来ていて帝も加入している。

「あと茶々さまが千の寝室を魔改造していました。全体的に桃色に」
「……あの桃色魔王め」

信長の妹、お市さまの三姉妹は何かと千に喧嘩を売ってくる困ったちゃんたちだ。特に茶々は隙あらば千の私物を桃色に染めてくる。

「それで、他には？」

釈迦堂が居住まいを正した。

「天下はすでに定まりました」

「……」

「帝も信長を日本の統治者として認め、彼を中心とした太平のため

に動き始めています」

「……帝が」

「意外そうですね」

「うん。意外だ。あの男はどの大名にも肩入れしないと思っていた」

うつすらと、釈迦堂が陰のある笑みを浮かべる。

「千は、昔の京を知りませんから。京はあの男が、信長が来てから格段に平和になりました。京に生まれ、京に育った者なら、誰もが認めねばならない事実です」

「……おまえ、博多生まれの博多育ちだろ」

「帰っておいでなさい、千。あなたを京に連れ帰ることが、私が足を運んだ用事です」

「……」

豪千公が海に沈んで、程なくだった。

共に天下を取ろうと。

千は仲間たちと誓い合った。

夢幻は豪千公の跡取りだし、千と神楽は九狸家の姫だ。

火六夜や虎狼、仙石も、集まった仲間はみな、雷怨寺家を支える北陸名家に生まれた子息ばかりだった。

まさしく北陸の次代がその場に集っていた。
だから、場違いな約束ではなかった。

子供が大人になる間もなく、一気に時代が動いてしまったただけだ。京に移り住んだ時分は、千もまだその約束を胸の内に秘めていた。織田家に対して、熱い敵愾心を燃やしていた。

しかし竜王までたどり着いて思い知った。

豪千公の遺品となった羽織をはおり、織田の将士を蹴散らして思い知った。

竜技会で優勝して、竜王となり、初めて千は信長と真っ向から対面した。

十二歳だった。

千はその時、信長に喧嘩を売った。

元々、信長に喧嘩を売るために竜王を目指したのだから、当然だ。竜王となった心境を聞かれ、

「小娘一人に手も足も出ないとは織田の武将も大したことはない。もしも豪千公が存命なら、今頃京は雷怨寺のものになっていたはずだ」

あははははと大きく笑ってやった。

気色ばむ一座を前に、織田信長も高笑して見せた。

「豪千を海に沈めた嵐に感謝しよう。このような猛将が北陸に居たとは、長引いていれば危なかったぞ」

信長は西洋の椅子から立ち上がり、配下を睥睨し、一度自らの跡取り、信忠に挑発するように目を留めてから——信忠も竜技会に出場して千に敗れていた——千に視線を移した。

「さて。千よ。そなたを『宝人』に任じよう。この信長が最初に選んだ『宝人』だ。たとえ帝といえども、信長の命なく竜王に手出しすることを禁じる！ 何人たりともその行動を阻害してはならぬ！」

生身一つの少女と、いくつもの国を支配する時の霸王。
立場が違いすぎて、喧嘩にもならなかった。

かつて豪千公が千に羽織を授けたように、織田信長も生意気な娘一人に宝人の称号を押しつけ、容易く許容して見せた。

それから何度か信長とあう機会があつたが、話せば意外と良い奴だった。

意地を張るのを止めてみれば、信忠も、長可も、勝家も。
みな尊敬できる奴らだった。

竜王となつて一年も経つと、織田家に対する反骨など欠片もなくなつていた。

京になじみ、毎日が充実していた。
楽しい日々だった。

豪千公の後継者、北陸の姫竜王は、いつしか織田信長の認めた宝人、京が誇る最強の姫竜王として認識されるようになり、千もその評判を自然と受け入れるようになっていた。

北陸の仲間たちを懐かしく思う日もあった。
懐かしく思うくらい、千にとって北陸は過去が存在になっていた。

あの日の誓いも、いまさらだ。

信長に対する私怨も今はもうない。

それどころか、織田家の武将たちとは親しい付き合いがある。その付き合いは、雷怨寺家や九狸家の者たちより深いくらいだ。

それでも、腹は決まっていた。

北陸に帰ると決めたときに、夢幻に嫁ぐと決めたときに。

北陸に帰り、夢幻と会って、その覚悟は、より強固に固まった。

京を捨て、姉と共に夢幻を支えるか。それとも二人を見捨て、京へ帰るか。

聞かれるまでもない。

半端な気持ちで海は渡れない。

千は釈迦堂に告げた。

「京のみんなに伝えといて。そう遠くないうちに帰るって」

ほっとしたように釈迦堂は微笑んだ。

「ええ、伝えておきましょう」

「ああ。今度会うときはわたしが京の主だ。織田の奴ら、北陸に攻め入ったことを後悔させてやる」

釈迦堂は、口元を引きつらせた。

「まさかと、思いますか？」

「北陸を統一して、攻め返してやる」

「……………」

釈迦堂が千を見つめる。

千は唇を少し突き出し、拗ねたように照れたように、

「何だよ？ 私が天下目指したら悪いのかよ？」

「……いえ、そうは言いませんが。その……………どうやって？」
「さあ」

「……………」
「……………」

「……………こう言つては何ですが、私の見たところどう鼻屑目に見ても雷怨寺夢幻にはあなたが命を賭けるほどの価値はないと思いますか？」

ぷいっとなが顔を背ける。

「別に、夢幻なんて何とも思つてないさ」

「そのわりには京でなかなかびかないですよ」

「うるさいな。男に興味ないだけだ」

「そのわりには結婚に釣られてほしいかい帰ってきたようですが？」

「……………うるさいな。幼なじみが信長に殺されて永久の別れになる前にちよつと顔を見てやろうと思っただけだ」

「……………」

「というか、夢幻じゃなくて、火六夜やみんなに会いに帰ってきただけだ」

あきれた顔で千を見る釈迦堂に、千は思いつき蹴りを入れた。

釈迦堂は「おうっ」とお腹を蹴られて大げさに吹っ飛んでいく。ただし、千の足にはいつものごとく手応えはない。

釈迦堂は真面目な顔を作り、

「千。私はあなたには死んで欲しくない。あまりにも惜しい人間です。帝も心からそう思っているからこそ、私を北陸に使わしました。京に帰る気はありませんか？」

「くだいな。だから帰るさ。北陸の仲間を引き連れて。京でみんなと一緒に遊ぶ」

「はあ」

と釈迦堂はため息をついた。

「これは私の独り言ですが、今度の戦で、九狸公は裏切ります」

確証のない状況判断だが、すべてを把握しているかのように釈迦堂は断定する。

「知ってる」

千が答える。

釈迦堂が口元に笑みを浮かべ、

「温犬も裏切ります」

「温犬もか？」

釈迦堂は頷いた。

「織田信長は北陸すべてを敵に回すつもりはありません。打ち砕くことは容易いですが、船の消耗も激しくなります。その後の統治にも、大勢の人員を割かねばなくなる。それだけの価値は、この孤立した北の島々にはないですよ。北陸の人が思うほどにはね」

「……」

「だから信長は紅蟹のみならず、今なら温犬と九狸もほぼ全領を安堵するはずです。両公の決断は妥当であり、報われるでしょう。もちろん、上杉攻略に酷使され、最終的には使い潰されるかもしれませんが、活躍すれば大きく取り立てられることもあり得ます」

「……」

「重ね重ね言っておきます。もはや天下は定まりました。この北陸の情勢も定まりました。雷怨寺は滅びます。見くびるつもりはありませんが、いまさら女狐どのでも、どうにもなりますまい。何か悪巧みを考えているのでしょうか、一度や二度、足をすくったところで今の織田は揺るぎません。ここで無駄に戦を長引かせれば、死ななくても良いはずの命まで失われることになる。あなたの大切な友達が、戦場で散っていくだけです」

「……」

「それでも、かまわないのですか？」

「わたしたちは誓い合った。夢幻を支えて天下を取る」

「誓えば何でも適うほど、世の中甘くありますまい」

諭すように、釈迦堂が言った。

「一人を救うために、多くを殺しますよ？」

「……」

「そしてその一人も救うことは適いますまい」

「……」

「まあ良いでしょう。あなたが素直に忠告に従うとは、わたしも最初から思っていませんでしたし。ええ、伝えておきます。帝にも京のみんなにも必ず千は帰ってくる」と

釈迦堂は微笑んだ。

「ああ、それと千。ここで私が話した内容は、訊かなかったことにしてください。隠密の仕事がやりにくくなります」

「ありがとう。感謝する」

千も微笑んだ。

「また、来ます。あなたが打ちのめされてから」

「……」

「その時にはきつと決断してください。救えない一人を諦めて、残った命を救う決断を」

迷いが無いわけではない。

その迷いは何処まで行ってもきつと消えることはないだろう。

千は京で平和を味わいすぎた。

天下を目指し殺し合うことを下らない、とってしまったほどに。

それでも、千は覚悟を決めて帰ってきた。

夢幻と、共に生きる覚悟を。歩む覚悟を。

戦国の海に、自らの名を轟かせ、血しぶき吹き散らす覚悟を。

明けない闇を切り裂いて、彼を救い出す。

救えないのなら共にその闇に落ちてやる。

京で五年を過ごし、豪商や粹人、織田家の将士とも交流を持ち、それでも千は出会えなかった。

夢幻よりも、好きになれる人物には。

そして、思う。

釈迦堂は、まるで姉を、九狸神楽を理解できていない。

千は、京でも、北陸でも、やはり出会えなかったのだ。

姉よりも、怖い人間と。

九狸城の姫竜王（神楽と家老）

草木も眠る丑三つ時。

手に尺八を持った怪しい虚無僧の格好をして、神楽は九狸城の船着き場に降り立った。

船着き場には無人の小早船が三艘、係留されているだけで、人っ子一人いなかった。

この船着き場は水深が浅く、小型の船しか停泊できない。

主に使番が利用していて、二の丸や三の丸を経由することなく、直接本丸に通じていた。

月明かりに照らされた栈橋を、神楽はゆつたりと歩く。

武芸舎が三人、神楽の前後を守っている。

栈橋が終わると、人一人がやっと通れるほどの細い石畳の階段が長く延びている。

崖をくりぬいた道で、暗い。

神楽の前後を歩く武芸舎が、提灯に火を灯す。

神楽は気合いを入れて、登頂に挑戦する。

二百段近く上がった場所は円形に開けていて門があり、数人の衛兵が詰めていた。

呼びかけるまでもなく、門が開いた。

門をくぐった先も、また石畳の階段である。

筆頭家老・八尾三徳との密約によって、神楽はこの道を自由に通過することが出来る。

神楽の足下、石畳の道が徐々に広くなる。

少し立ち止まって、ふうっと息を吐いた。

次の曲がり角を曲がると、細作門と名付けられた小さな檜材の門が見えてくるはずだ。

ちなみにこの石畳の階段は細作道と呼ばれているが、神楽は『鍛錬の道』と呼んでいる。

九狸城は湾岸に面した城で、軍港と三の丸は一体となっている。

しかし本丸は少し離れた丘の上にあり、どの船着き場からもそれなりの距離を歩く必要があった。

その中でこの道が一番、城までの距離が短く、代償として急勾配だった。

細作門をくぐると、本丸に属する曲輪である。

門から二十間も歩けば、八尾三徳の屋敷がある。

細作道は、上から丸見えの一本道であり、ここを通って城内に入れば無条件で三徳の監視下におかれる。

神楽は城に侵入する経路を幾つも確保していて、この道を使うのは八尾三徳と合う時、または八尾三徳に自分の行動を掴ませる時だけの我慢であり鍛錬だった。

神楽は屈伸を二、三度してから、ゆったり三徳の屋敷を目指した。

「神楽さま。お待ちしておりましたぞ！」

深夜だというのに、まるで長旅から帰ってきた飼い主を迎える犬のような勢いで、八尾三徳は室戸家の玄関先で神楽を待ちかまえていた。

内政を担当する武将たちには、すでに九狸神楽は無視出来ない存在になっている。

神楽の組織は北陸中に広がっているし、北陸海域で活動する海商の四分の一は、『神楽商店』に属している。

ただし神楽商店を構成する船も人も、大半は京や堺の海商からの借り物であり、信頼はあっても主従関係はない。

八尾三徳との関係も似たようなものだ。

三徳は神楽の協力者の一人だが、彼は斑尾を見限って神楽に組するわけではない。お互いに利用し合っているだけだ。

いつもは仏頂面の三徳のこの喜びように、しかし神楽は全く動じず、にこやかな笑みを浮かべた。

「何ごとがありましたか？ 三徳さま」

「何ごともないも！ 千姫さまです！」

三徳は両手を上下に振って、足踏みする。

「あの子が何かをやらかしたのでしょうか？」

神樂が、可愛らしく小首を傾げる。

「やったもなにも！ 城を！ 城を千姫さまに乗っ取られてしまいました！」

「まあ、お城を？」

口に手を当てて、驚いた仕草。

「そうです！ この城です！ 九狸城です！ このままではわたし、切腹ものです！ お助けください！」

三徳はしゃがみ込んで、わんわんと泣き出した。

終始微笑みを浮かべたまま、神樂は三徳から事情を聞く。

さも、すべて把握していた、それどころか私が仕組んだことですが、と言わんばかりの態度で。

泣きわめいていた三徳も話しながら、疑う目つきに変わっていた。

当然だが神樂は、千の周りに数人の狐を張り付け、監視していた。だから、千が九狸城に乗っ取った情報は、神樂の耳に子細に入っていた。

狐から遅れること二日。

三徳からも使いが来た。

—— 危急の用件につき、大至急、内密にてお越しいただきたい。

特に内容を尋ねることなく、神楽はその場で了承して使いを帰した。

たとえ要請されずともそろそろ対処するつもりだった。

「お願いします！　どうか、どうか城を明け渡すよう千姫様を説得してください！」

三徳の説明を聞き終わり、神楽は眉間にしわを寄せ、目を瞑って顔を俯ける。

答えは決まっているが、少し考えるそぶりを見せる。

千が三徳に仕掛けた『模擬戦』——またのの名を『白黒合戦』——の基礎が生まれたのは、神楽が八歳、千がまだ六歳の時だった。

発端は、千と夢幻の喧嘩だった。

どちらかといえば夢幻が悪い。

千が大切にしていた玩具を壊したのだ。

夢幻はそれを悪いと思いつつも謝れず（後に謝った）、謝る前に夢幻の取り巻きたちが千を生意気だと責めた。

普段の千の態度に、雷怨寺家に属する年かさの子供たちは、不満を募らせていた。

千が掴みかかり、取り巻きが突き飛ばし蹴っ飛ばし、千がまた掴みかかり。

千と神楽以外にも、九狸家に連なる家から数人の人質が出されていた。

人質というより、千と神楽の世話役に近い。

さすがに彼らは見て見ぬふりが出来ず、割って入った。
が、主家である雷怨寺家に刃向かうことも出来ない。

彼らは親たちから千と神楽の世話と同時に、雷怨寺家と決して事を構えないように言い含められていた。

勝っても負けで、負けても負け。

「立場」で喧嘩すれば、絶対に九狸家の子供は雷怨寺家の子供に勝つことが出来ないし、勝つことは許されない——少なくとも、あの頃はまだ。

それが戦国の世の子供たちの宿命で、千は理解できていなかったが、神楽を含めその場にいる殆どの子供たちはそれを理解していた。だから神楽は千の頭を無理矢理下げて謝らせてから、

「夢幻さまは大将なのですからこんな喧嘩ではなく戦の采配で白黒つけるべきです」

仲裁した後提案した。

「子供たちを二等分して、舟戦の模擬戦をしましょう」

負い目のあった夢幻は取り巻きの意見をはねのけこれを受けた。

皆が誇り高い名家の出身だ。

二等分、と言われれば案外素直に二つに分かれるものだ。

ただし、夢幻の側には屈強の男子が多くなり、自然と千の方は残りもの、——あえて集めた面もあるが——女の子が多くなった。

それぞれが五隻の船に分乗して、大将の旗を奪い合った。

しかし最弱の女の子舟は、使い方によっては最強の盾となる。

特に紅蟹の姫など卑怯なまでの爆弾だった。

海に落ちた泳げない彼女を助けるために、紅蟹の5人の男どもは皆、海に飛び込み、一隻の敵舟が戦闘から脱落した。

三隻の女の子舟で相手の進路を抑え、千と火六夜の乗った舟が一気に夢幻の本舟を襲い、旗を奪取した。

千一人が勝ったわけでも、夢幻一人が負けたわけでもない。

どちらかといえば男対女の雰囲気になっていて、夢幻の取り巻きたちは、女相手に手を出せないと（千を蹴っ飛ばしていたくせに）不平を述べたりしていたが、千も満足したし夢幻も謝ったし、後腐れはあまりなく終わった。

そしてそれなりに楽しかったようで、子供たちは何かと模擬戦で白黒つけるようになった。

夢幻と千がそれぞれの中心になることが多く、いつの間にやら雷怨寺党と九狸党が結成されていた。やはり神楽がそうしむけたからでもあるが。

千は『模擬戦』を気に入っていて、色々と応用しつつ京でも多用していた。

今では神楽よりも卑怯なまでに熟練している。

京を真つ二つに割ってみたり、織田の城に乗り込んで成功させてしまっくらいだ。

千は人心掌握力、つまり人を引きつける魅力では、神楽の比ではなかった。

どこの国でもお姫様は大切にされるものだが、千は北陸の旧支配

者、雷怨寺豪千から後継者と任じられ、更に京で織田の名だたる武將を打ち倒して竜王となった姫だ。

豪千公が死んでから鬱々とする北陸にあつて唯一輝きを増し続ける存在だった。

彼女の噂は北陸中で宗教のように広まっている。

その噂の出所および情報操作もやはり神楽の組織によってではあるが。

最近では、姫竜王が北陸を救うために竜の軍勢を引き連れて帰還する。

などという噂まである始末だが、もちろんその噂も神楽が出所だ。

その千にこの技を使って「好きな方に付け」と扇動されては一溜まりもない。

勝った方に酒を振る舞う、と言われれば普段から口うるさい中年親父よりも女に付きたくなるのが男の性であるし、酒を呑んでしまふと共犯で、その後は下手に裏切れなくなる。

斑尾がいればまた話は違ったのだろうが、今は雷怨寺城に滞在している。

もう一人、九狸家には母の千寿子に意見できる人物が居るが、その男、猫勺宗一も斑尾の側にいて雷怨寺城だ。

結局、本丸の全ての女性が千に味方して、九割を超す侍が千に取り込まれた。

それでも三徳は諦めず何とか挽回しようとしたが、その策が悪かった。

千の大切にしている愛竜、千柳を質に取って千を脅そうとしたのだ。

三徳が文官ではなく戦陣に出る武将だったら、絶対にしなかっただろう。

この試みに、竜舎を預かる世話師は激怒した。

そして竜溜まりにいる竜武士たちが、三徳の使いの者たちをたたき出してしまった。

当然、この話を聞いた千もへそを曲げた、というよりこの好機を見逃さなかった。

二の丸、三の丸まで奪い取られ、三徳は自らの館に押し込められていた。

この数日、千は竜技会を開いたり、女友達と酒盛りしたり、城下で祭りを開催したりやりたい放題だという。

はあ、と、神楽はため息を吐いた。

千がどれだけ理解しているのは疑問だが、今は平時ではない。

斑尾が帰るまでこの事態が続けば、三徳は良くて失職、悪くすれば腹を切らねばなくなる。

まあ千のことだ。

分かった上で苛めているのだろうが。

「仕方ありませんね。城はそっくり私が取り返して差し上げます」

「おお、やってくれますか!？」

「ただし、誰一人として罰しないこと。この騒動の責任は母にあります。事実、酒に釣られて母が手勢を貸さなければこのような事態

になつていませんから。すべて母が原因です。必勝祈願や千の帰省のお祝いとして行われた酒宴や祭りは、三徳様が千の機嫌を取るために企画したことにしていただきます。千はこれに大変満足して、おとなしくなりました。何事もなく無事に解決したわけですし、この程度のこと、わざわざ父に教える必要ありません。訊かれた時だけ、聴かれたことのみ、説明すれば良いでしょう。それでよろしいですね？」

三徳は頷いた。

何度も何度も頷いた。

筆頭家老である三徳には、内政においてかなりの独自裁量が認められている。

必要ならば城の財産を自由に動かし処分してかまわない。

現状における実質的な損傷は蔵の酒くらいであり、この程度なら許される。

私財で穴埋めしても良い。

ただし、城を損壊させたり大勢の死人を出したり、千に怪我をさせれば、三徳でも責任は取りきれない。

だから三徳は実力行使を控えて、神楽に調停を求めたのだ。

「それともう一つ」

神楽の微笑みに、八尾三徳は身構えた。

この状況だ。

どのような難問を要求されるか、顔には警戒感と断れない葛藤が浮き出ている。

「もしもわたしが九狸家の当主となった暁には、あなたを筆頭家老として雇い、この城を任せたいと思いますが、よろしくて？」

少し冗談めかして言った。

「……………」

しばらく黙考してから、三徳は拍子抜けしたように、頷いた。

「……ならね、ましたらな」

なれば従う。

ただしその為の協力は一切しない。言外に言っている。

神楽は微笑みを深くした。

神楽の見えるところでは、三徳は決して斑尾に心酔してるわけではなかった。

斑尾が九狸家の当主だから従っているだけだ。

九狸家の不利益になることに協力することは一度としてなかったが、しかし斑尾の不利益になり、九狸家の利益になることに、一度だけ協力している。

人ではなく家に付く猫、と神楽は彼のことを分析していた。

押せば落ちるかもしれない。

三徳の協力が得られるなら、これからの作業が随分とやりやすくなる。

が、斑尾に情報が漏れる危険を考えれば、無理もできない。

今は叔父である三徳に大きな貸しを作り、圧力をかけたただけで儲けものだ。

「少々遅いようですが、一応、忠告しておきましょう。千は、もう

五年前の小娘ではありません。政治経済の中心にして、群島中から女傑が集う京都島で鍛え上げられ、その頂点にのし上がった暴君です。あの怪獣には、私も何度となく爪の先を嚙られました……………ちよつとからかっただけですのに。お手入れが大変です」

ゆつくりと席を立ちつつ、神樂はゆるやかに三徳に忠告をした。

「軽い気持ちで手を出すと、その腕、食いちぎられますよ？」

「……………覚えて、おきましょう」

重く、三徳が頷いた。

いざ、天下取りへ！

天守閣の入り口で、虚無僧・神楽は侍女に足止めされた。

「お通して良いかどうか、千姫さまの確認を取りますので、しばらくお待ちください」

とつくりの紋があるので、母の手勢と一目で分かった。

神楽を見て、彼女たちは明らかに安堵の表情を浮かべていた。

おそらく千を御しかねて困っていたのだろう。

「必要ありません。通しなさい」

「ですが、一応は誰か来たら知らせるようにと」

「私は姉です。姉が妹に会うのに了解を取る必要がどこにありますか」

「ですが、夜分ですし。……千姫さまから神楽さまが日が沈んでから来られたら必ず知らせるようにと」

「じゃらくさい。あの小娘め」

きつとお化けか何かで脅かそうと思っているのだろう。

いつまでもそんな物を恐れるお姉さまだと思ったか。

受けて立つてもいいが………今は忙しいから回避しよう。

こほんと神楽は咳払いしてから、

「三徳さまから訊きましたが、千のお酒を京から取り寄せるそうですね。うわばみのために」

「……はい」

「私にはその舟を海上で沈めることも、積み荷を酢に載せ替えることも可能ですから通しなさい」

「……どうぞお通りください」

彼女たちは明らかに苦しそうな顔をしていた。

寝苦しさを覚えて、千は目覚めた。

障子の向こうは暗く静かだ。

しかし室内には薄く提灯の明かりが広がっている。その明かりに、ほっそりとした足が浮かんで見えた。

ちょうど千のお腹のあたり、布団の上。足が乗って、ぐりぐりとねじっていた。

千は目を擦りながら、その足の持ち主を見あげた。怪しい虚無僧がそこにいた。

「やあ、姉ちゃん」

「……やあ、千ちゃん」

と、神楽は挨拶を返してから、

「千。あなたは天守閣てんしゅかくで何をしているんですか？」

「見て分からないかな？　ぐっすり寝てただけど……踏まれるまでは」

神楽はぐいっと足に体重を乗せ、「ぐえ」と千に言わしてから足をどけた。

はあ、と神楽はため息をついた。

「私の予定としては、城に監禁されたあなたが『お姉さま、助けてください』と泣きついてくるはずでしたのに」

「それはどうもごめんなさい」

千が布団からのっそりと起きあがる。

「それで、千。どうするのです？」

「どうするのって？」

千はうーーんと伸びをする。

「もうとつくに七日が経ちましたよ？」

「あれ？　もうそんなになるかな？」

「このままでは夢幻をかごめさんに捕られてしまいますよ？　……ちなみに逃亡していたかごめさんは死に装束を纏って姿を現します」

「ああ、そっか。あの約束ね」

千が苦笑する。

九狸城に帰ってきてからもう七日になるのかと一瞬勘違いしたのだ。

少しまだ寝ぼけていた。

そして約束のことなどすっかり忘れていた。

「それにしても死に装束？」

「千と対決するつもりですよね。なかなか思ったよりも根性があります。このままでは彼女の不戦勝ですね」

神楽が挑発するように笑った。

千も笑い返した。

「別に良いよ。夢幻の気持ちは確認できたし。どうせ意味のない約束だ。夢幻はあれで結構意固地だから、たぶん私やねーちゃんは何を言っても意地でもかこめって子を選ぶ。わざわざ雷怨寺城に駆け戻って不愉快な戯言を聞いてやる必要はない……………それ以前にとつくに期限が過ぎてるし」

「……………千。せめて意固地ではなく頑固といっておやりなさい」

神楽は首を左右に振ってから、張りつめた顔で千を見つめる。

「まさか夢幻のこと、諦めるつもりですか？」

「まさか」

千は笑った。

「姉ちゃんが言ったんだろ？ 巻き込みたくないから、夢幻は私を

避けてるって。なら、戦に勝つのが先だ。私の恋路を邪魔する奴は、千柳に乗って蹴散らしてやる。夢幻のことはそれからだ。なんなら私の戦に夢幻を巻き込んでやる。そんなわけで、よろしく、軍師さま」

ひょこつと小さく頭を下げる。

「まったく」

神楽がわざとらしいため息を吐く。

が、心の底から、安堵していた。

北陸を統一し、その統一を維持するために、千の人望が何をどう考えても不可欠だった。

「どうやってあなたを泣かせて頭を下げさせて悪巧みに引きずり込んでやるうかと悩んでいた優しい姉の気苦労が台無しです」

「たまには姉ちゃんから頭下げなよ」

神楽の目がつり上がった。

口元だけに微笑みを浮かべ、

「……………まさかと思いますが、千。半年前に、この姉が頭を下げて誘ったのを、お忘れになった、とは申しませんよね？」

「……………そういえばそんなこともあったかな」

ぽりぽりと千が頬をかく。

一緒に夢幻を支えて欲しい、共に天下を目指そうと、姉に誘われ、そして断った。京で生きる、京に残る、と千はあの時、確かに答えた。

それが出来るつもりだったし、あの時点ではそのつもりだった。
半年の間に、天秤が傾いたのだ。

全ての挑戦者をねじ伏せ竜王を防衛し、穏やかで弛緩した日々が
流れる京の生活と、

紅蟹家が織田に臣従し、死に別れが現実のものとして認識される
ようになった夢幻と姉と、北陸の仲間たち。

その、二つの価値が千の中で大きく逆転した。

要するに、

「あれだ。秋の空と女心」

「おやかましい」

根に持つてるのか、恨みがましく、姉が睨んでいる。

口元だけは相変わらず笑みの形だ。

「そついえばあの時、「さようなら、千。私の大切な妹。つぎにあ
なたと会えるとしたら、雷怨龍の旗が京に立つときのみ。それが、
かなわぬのなら……………これが今生の別れ……………かも……………しれません
ね」と思わせぶりに湿っぽく言ってねーちゃんは去っていったんだ
よな」

「……………」

「で、蔵の中の金目の物と武具類がかなり盗難に遭ってた」

「では、そういうことで。天下取りの話をしましょう」

姉はぱんぱんと両手を叩いて、明るく笑った。

「そうそう。その前に模擬戦は終了です。天守閣を三徳に返してあげなさい」

「え？」

「え？　ってなんですか、え？、て」

「いや、せっかく奪ったのに。まだ一戦もしていないけど？」

「……誰と戦をするつもりです？」

「父ちゃんと。帰ってきたら驚くぞ。相手の意表をつくのは戦の定石だ」

うきうきと告げる。

神楽はとても駄目な生徒に教え聞かせるように、

「千。勝率を高めるために相手の意表をつくことは、確かに定石です。しかし驚かせるただけに戦をするのは、手段と目的が逆転していて、定石からは外れています」

「細かいな」

「細かくありません。あなたが大雑把すぎなんです」

「ふん。驚かせるだけじゃないさ。難攻不落を誇る九狸城なら三年は戦える」

千が三本指を立てて胸を張る。

「三年も籠もっていれば織田が来ますし何を食べて生きる気ですか
食いしん坊のあなたが。それにどんな堅城も内側からの内応には弱い
ものです。父が帰ってくればこんな城すぐに落ちますよ」

「やってみなければ分からないさ」

「やってみなければ分からないことはやらないでくださいね。今は

大切な時期ですから」

「あはははっ」

「おほほほっ」

「軽い冗談だよ」

神楽は重いため息を吐く。

「あなたの軽い冗談はだいたい本気でやるので本当に疲れます」

「今から？ 明け渡すのは？」

「いえ、夜が明けてからで。城のみんなに軽くお酒を振るまつて労をねぎらってから解散しなさい。城下町には千の名前で神楽商店の蔵から振る舞っておきます。これで貸し二つ目です」

「うん。……あれ？ 一つめの貸しはなに？」

「わたしは借りを作るのが嫌いです」

「いや、それは知ってるけど………まあいいか。で、それから？」

「戦の話をしましょう。今度の戦で、おそらく父は裏切ります」

「ああ。裏切るって言うてた」

「ほう。……誰が？」

神楽が目を細める。

「父ちゃん」

「それはそれは」

「……嬉しそうだね？」

こほんと神楽は咳払いする。

「裏切らないならそれでもかまいません。その方が無駄な犠牲は出ませんし。その場合は世代交代なく北陸一丸となって織田と戦う体

制を目指します」

「いいね、それ」

「お父様次第です」

白々しい顔で神楽はのたまう。だが事実でもある。

「裏切らない場合は特にして貰うこともないので、裏切ると仮定して話をしましょう。細かな流れは省きます。どうせ微調整を繰り返しますし、どうせ千ですし」

「……少し失礼に感じるのは気のせいかな？」

「重要なのは二点。縞馬の説得と、九狸を丸ごと騙し取ることです」

「縞馬の説得は千にお願いします。九狸家の乗っ取りは私がやります」

「出来るの？」

「今は無理でも時期が来れば可能になります。九狸はお父様の独裁体制ですから、彼一人を丸め込めば艦隊に潜り込むのは案外容易いのですよ。ただ、その準備として数人、引きずり込みたい人が居ます。せつかくですから千にも協力して貰いましょうか」

「うん。いいよ。貸し一つ返して貰うけど」

「……まあ良いでしょう。実は貸しが他にも三つほどありましたから」

それから、ぼそぼそと二人は話し合った。

太陽が完全に顔を出してから、千は模擬戦の終了宣言を行った。

それから天守閣の前に陣取り、城の者一人一人に酒を注いでやる。

「みんな楽しかったぞ」「またやろうな」「今回のことは、父には内緒にしておいてくれ」

昼過ぎまでじつくりと時間を掛けて、一人一人に話しかけながら、酒を注いでいく。

八尾三徳はその千の真後ろにぴたりと同席し、城の者、一人一人の顔をじつくりと観察していた。

三徳は三徳なりに立派に城を運営してきた自信があった。

それが一日であの様だった。

今あらためて、兵一人一人がどの程度千姫に心酔しているのかを、彼は推し量っていた。

いざ、天下取りへ！（後書き）

第一章、姫竜王帰還編、終了です。

次からは北陸争乱編、

ほとんど神楽が主人公の国盗り戦です。

小松島沖の戦い

大小合わせて一二〇〇隻を越す船団が、北陸海域の大動脈、北陸水道を進軍する。

船々の上で色とりどりの旗指物が、はためいていた。

その種類は、百を優に超えている。

風を孕み、大きく膨らんだ帆や、船首、船尾の船印にも、鮮やかな印が描かれている。

中でもひととき目立つのは、全ての船に掲げられた、伝説上の龍神・『雷怨龍』の旗。

北陸の盟主・雷怨寺家の軍旗だ。

一隻の例外もなく雷怨寺家の支配下であることを、全ての船がこの時点では主張している。

『雷怨龍』の旗と並び、三宿老家となった九狸の『九尾の狸』の旗、温犬の『眠れる犬』の旗、笹雉の『座禅をくむ雉』の旗が、それぞれの船団に掲げられ、さらにその傘下に連なる武家の旗が潮風に踊っている。

かつて四宿老家のひとつだった紅蟹家が裏切ったのは、皐月ノ一二日。

約一月前になる。

彼らに対する軍事行動はこれが最初ではなかった。

紅蟹の支城を幾つか落とし、紅蟹の本城、小松城を攻める手はずが整ったのは、つい最近だが、紅蟹との戦端は彼らが雷怨寺を裏切り、織田に帰属してから直ぐに開かれていた。

今も別働隊が、紅蟹の支配下にある城を取り囲み、攻め続けてい

る。広い北陸のどこかで、遭遇戦も行われているだろう。

「出てきたか」

雷怨寺家の大将船、その御座に据えられた雷怨寺家当主・雷怨寺夢幻が呟いた。

雷怨寺艦隊の遙か遠望。

まだ距離はあるが、小松城の沖合で、紅蟹の軍勢が待ち構えていた。

紅蟹艦隊は、約三〇〇隻。

それに織田艦隊が約五〇隻、混じっている。

小松城には大きな港はあっても、何百隻もの船を収容できる城塞はない。籠城する場合は船の大半を放棄するか、海域から離脱させる必要があったが、しかし、船の放棄は絶対に有り得ない選択だった。

三〇〇隻ともなれば小松城や所領よりも価値がある。

艦隊を率いてこそ、戦国大名である。

失えば紅蟹家は滅びたも同然。

となると、紅蟹の取れる方策は、織田が大艦隊を編成している北ノ庄まで船を逃がして小松城の防衛のみに専念するか、艦隊戦を挑んでくるか、この二つしかない。

紅蟹は臆さず艦隊戦を挑んできた。

御座に座る夢幻が、家老・津幡典禅を呼び寄せる。

「典禪、どう見る？　あると思うか？」

小声で尋ねる。

裏切りがあるのか、どうか、それを訊いていた。

それが、勝敗の全てを分かつ。

「さて。どう見ましようか」

典禪は言葉を濁した。

この劣勢で正面から戦いを挑んでくるのだ。

何か約束があるとも見えるが、断言は出来ない。

船を動かすには多大な人手が必要であり、その人手を割いて船を避難させれば、小松城をはまだしも、小松島の防衛は不可能になる。籠城した場合は、港や水門を破壊されることになるし、島の支配権を失い、穀倉地帯も荒らされる。

それならいつそ一か八か打って出て、勝てれば儲け物。勝てぬようなら意地だけ見せて北ノ庄に落ち延びる。そんな考え方もありえるだろう。

「とにかく、やるだけですな」

典禪がそれだけ言つて、夢幻から離れた。

「やるだけ、か」

自嘲気味に夢幻が呟く。

少年が総大将だが、しかし戦の采配は筆頭家老の有馬国清が執っている。北陸の名門、有馬家を継いでいるが、亡き父・雷怨寺豪千の実弟であり、今の雷怨寺家を実質的に支配していた。

その有馬は夢幻の乗る旗艦ではなく、最前線の『戦竜号』に乗船している。やるだけと言われても、夢幻は後方の旗艦で座っている

だけで、特にやることはなかった。

大海原の上、互いの艦隊が、その陣形を確認できる距離になった。
紅蟹は魚鱗の陣を敷いていた。

織田の船を後ろに下げて、猛然と太鼓を打ち鳴らして突き進んでくる。

有馬の指示で、陣太鼓がけたたましく鳴らされて、船から船へと伝播していく。

雷怨寺は、鶴翼の陣の合図だ。

右に九狸、左に温犬の艦隊それぞれ二五〇隻が、大きく翼を広げるように布陣していく。中央は雷怨寺艦隊、五〇〇隻。笹雉の二〇〇隻は、雷怨寺の後ろに下がる。笹雉は船を接舷しての船上戦を得意としているが、今は上陸部隊を多く積んでいた。船も輸送船が多く、あくまで地上戦の戦力として連れてきていた。海上戦の数には最初から含まれていなかった。

九狸艦隊は雷怨寺の陣太鼓による指示に従い、鶴翼の陣を敷いた。敷いたが、しかし押し包め、の陣鐘には動こうとしなかった。

九狸艦隊の遙か前方を、紅蟹の艦隊が突き進んでいく。

温犬の艦隊も同じく、動かない。

「……動かぬか」

雷怨寺家筆頭家老・有馬国清が歯ざしりする。

「九狸公と温犬公に伝令を。よろしくご助力願いたいと」

筆頭家老・有馬の指示を受けて、竜に乗った使い番が二騎、海へ

と飛び込んだ。有馬は雷怨寺家の実質的な支配者ではあるが、身分は家老でしかない。豪千公が盟友として遇した四宿老家の当主には、建前上、敬意を持って接しなければならない。

助力を願う使いは出したが、しかし有馬は両家が動くとは見ていなかった。この程度の催促で動くくらいなら、最初から従っている。ただし、まだ裏切るとも断じていなかった。いや、そう思おうとしていた。今更引き返すことも出来ない。動かないだけだ。動かないだけなら問題はない。単独で紅蟹を蹴散らし、雷怨寺艦隊の強さを見せつけるだけ。強さのみが、彼らの忠誠を引き出すことが出来る。彼らに従わせることが出来る。

「追撃戦のみ、参加すればいい」
吐き捨てるように有馬は言った。

宿老家に舐められる現状を憤慨してはいるが、だからといって強く出ることは出来ない。情けなくあるが、今は仕方がない。紅蟹三〇〇隻が相手なら、雷怨寺五〇〇隻で容易く葬り去れる自信があった。

雷怨寺家の最前列は、有馬が搭乗する一二〇挺艦の戦竜号だ。戦竜号を真ん中にして、八〇挺艦の軍艦が四隻、併走している。

戦竜号には、武士が一〇〇人、船を動かす水主が一二〇人乗船している。精鋭中の精鋭が乗っており、北陸最強の戦艦として名が通っている。搭乗武士の殆どは船上からの銃撃要員で、竜武士は、伝令を勤める七人のみだ。激戦となれば、水主の半数も弓や鉄砲を手にとって戦いに加わる。他の四隻も似通った編成だった。

紅蟹の艦隊も、やはり大型の戦艦を最前線に出して来た。
八十挺艦が三隻だ。その後ろに、関船や小早舟。

一団となつて猛然と突き進んでくる。

大船同士、彼我の距離が縮まる。

「よし、撃て！」

有馬国清の指示を受けて、計五隻の戦艦が、砲撃を開始する。

一五〇匁から二〇〇匁の大筒だが、雷怨寺家にある一五砲のうち十砲がこの五隻に集められている。

大口径の大筒だ。当たれば小舟なら吹き飛ばし、一〇〇挺艦の大船でも喫水線をやられては航行に支障を来す。しかし一つもあたらない。

脅しであり運試しのようなものだった。遠距離でそれほどの精度は大筒にない。

紅蟹の戦艦から、応射が帰ってきた。戦竜号の近くの海に、七つの水柱が立った。

同じく一五〇匁から二〇〇匁の大筒だ。

こちらも当たらない。

「氣前が良いな」

有馬国清は忌々し気に感心する。紅蟹は大筒を三つしか所持していないはずだった。おそらく織田から借りたか貰ったのだろ。豪千公が鉄砲を重視しなかったこともあり、また技術的、財政的な理由もあり、北陸では一〇〇匁以上の大筒を製造する鍛冶村はなく、所有数は少ない。

両艦隊の距離が縮まる。

紅蟹の先頭を走る三隻の大型船が、船足をゆるめた。

その向こうから、中型や小型の船が、幾つかの船団に別れて艦走で突き進んでくる。

大船、中船、小舟。全ての船が帆をたたんでいる。それは雷怨寺

艦隊も一緒だった。帆布は火攻めに弱い。遭遇戦は別にして、艦隊での取っ組み合いは艀走が基本になる。

序盤は大きく陣形を崩さないままの、前衛同士、ほぼ互角のつづし合いになった。

鉛玉や火矢が飛び交い、小早舟同士が接舷して槍を突き合い、船を奪い合う。

砦のような大型船から、大筒や鉄砲が打ち鳴らされ、そのたびに運の悪い人が撃たれ、船が沈んでいく。

その陰で、第二線、第三線の艦隊が、互いの側面へと回り込もうとけん制し合っている。

徐々に戦渦が広がっていく。

四半刻ほどの時間をかけ、二倍の海域に戦は拡大していった。

まだ九狸、温犬は動かない。

数に勝る雷怨寺が僅かに押しつつある。ただし互いの大船は、一隻も沈んではない。互いの陣形も崩れていない。秩序だった削り合いが続いていた。

紅蟹艦隊の中程で、陣鐘が鳴り響いた。

紅蟹艦隊の中程に位置した竜舎船から、次々と竜武士が海上へと解き放たれる。

竜舎船はその名の通り、竜武士を運ぶための船だ。一見すると総矢倉の安宅船に見えるが、船の高さは低く、横にずんぐりと広い。嵐にも弱く、また船自体にも戦闘力はさほどない。

矢倉の垣立は所々、蝶番で開くようになっていて、蝶番は横ではなく、板の下に付いていて、海へと落とされた垣立がそのまま竜の乗降口になる。竜橋と呼ばれ、板には滑り止めの横板が打ち込まれている。

二百騎の竜武士団が、百騎ずつの二部隊に別れて、雷怨寺艦隊を目指す。

竜の機動性は、船とは比べものにならない。狼の群れが家畜に襲いかかるかのように連携を取りながら、小早舟を重点的に襲撃し、沈めていく。邪魔な小早を打ち払った後は、部隊の旗艦である中型の船の舵を狙っていく。

「こちららも竜武士を出せ！」

有馬国清が指図する。

後手に回っているが、数で勝っている。兵の質でも、船の質でも紅蟹に後れを取ることはない。大船には大船。小舟には小舟。竜には竜をぶつけていけば、まず負けることはない。

雷怨寺の竜舎船団から、四〇〇騎の竜武士が海上へと解き放たれた。

小松島沖の戦い、その二

「うむ。よい案配じゃ」

九狸艦隊の旗艦で、九狸公・九狸斑尾が福だぬきのような顔を笑ませた。

竜武士が戦場を駆け巡ると、否応なく混戦になる。

そして竜武士は一度出してしまうと、撤収に時間を要する。

まだ戦火は全体に及んでいないが、そろそろだろう。

斑尾は御座から立ち上がった。使番の竜武士たちを呼び集める。

使い番は、一五人で構成されていた。九狸家では、『術葉衆』という名で呼ばれている。斑尾の指示は必ずこの術葉衆を通して各艦隊に伝えられる。

斑尾の旗艦から、裏切りを伝える伝令が一齐に放たれた。

ぎらきらと目を輝かし、斑尾は戦場全域でにらみつける。

大軍によって掻き回され、海のあちこちが渦を巻いていた。

旗や槍、船の残骸など、漂流物が波間に揺らめき始めている。

兵士たちの叫びが、海上を吹き荒れている。

その喧噪から距離を取り、温犬艦隊は静かに沈黙している。

毘沙門天号と名付けられた温犬虎狼の乗船は、八〇挺艦の大船だ。その太い帆柱には階段が取り付けられて、物見櫓の役割を果たしている。

その帆柱の上で、温犬虎狼は、戦の転換点を見定めるべく、船と

船のぶつかる喧噪の海域ではなく、戦場を挟んで同じく沈黙する九狸艦隊を、目を眇め注視していた。

九狸の艦隊自体には、まだ動きはない。

しかし数騎の竜武士が、旗艦・鬼狸号から放たれ、各艦隊へと向かっていく。

それをはつきりと確認してから、虎狼は父が乗る温犬の旗艦に視線を移した。

九狸にわずかに遅れ、竜武士たちが各艦隊へと散っていく。白い波の軌跡が見える。

「やはり、な。風が変わった。……強烈な逆風だ」

温犬虎狼は、どう猛な笑みを浮かべた。

「はて？ 変わりましたかな？」

お目付役の大崎影沖が、隣で空を見上げる。風向きに特に変化はない。

「どうやら俺の出番だ。出撃する」

虎狼が言って帆柱を駆け降りる。

「駄目です。殿の下知があるまで、待機。待機ですぞ」

慌てて大崎がその後を追う。

絶対に勝手に動くな、との指示がこの四半刻の間に三度も伝えられている。

「じいさん。親父は何を考えていると思う？」

「さて。私ごときに殿の深慮ははかりかねます」

裏切るのか、それとも裏切らないのか。今の時点ではまだ判然としない。どちらの選択肢も十分にあり得る。

「俺には分かるぜ」

虎狼は自信たっぷり言った。

「試されてるんだ。俺たち」

「確かに試されています。若の我慢が。指示があるまで此处を動くべきではありません。というか動くなよ、若造」

虎狼は首を横に振った。

「じいさん。いやよいやよも好きのうちって言う。動くなつてのもきつと動けつて催促なんだ」

「絶対に違います！」

年寄りの抗議を無視して、虎狼は出撃の準備を進めていく。

「ここまで挑発されたら、もう我慢ならねえ！ 紅蟹のやるうめ！ この大竜王の眼前で竜を出すなんざ一〇〇万年早い！ 名指しの宣戦布告も同然だ！ てめえらいくぜ、紅蟹艦隊の右後方を突く！ 大仰な身振り手振りで仲間を叱咤してから、虎狼が騎竜ごと海に飛び込んだ。」

「若あ！ 絶対に違いますぞ！」

船縁に掴まり、じいが叫ぶ。

「あーあ。行っちゃった」

「ほつとく？」

「ありだな」

「……」

「つていうか、竜出したの怒ったなら、何で竜武士団でなく艦隊の右後方突くんのだ？」

「俺に訊くな。若に訊けよ」

「しかもあれ眼前じゃなくかなり遠いよな？」

「だから俺に言つな。若に言えよ」

「しょうがね。俺たちも行くか」

虎狼の供回り五人衆。

だべりながら、彼らも竜に跨り、海へと身を投げ入れる。

「えええー……い。あの馬鹿が！ ……致し方ない、竜武士を出撃させよ！ 全艦隊、若に続け！」

温犬虎狼の艦隊と旗下の竜武士団が、紅蟹の左翼に突撃を開始した。

「むっ」

斑尾が口をへの字にして唸った。

九狸艦隊と同様、傍観に徹していた温犬艦隊にじわりとした動きが現れた。

戦に抜け駆けは付きものだし、多少出ることは想定していたが。

「よりによって、あの馬鹿か」

九狸斑尾は歯ざしりする。

虎狼艦隊と旗下の竜武士団が、紅蟹の左翼に突撃を開始している。温犬の跡取りは、両家の離反を教えられていないはずだった。その近従も含めて『雷怨寺の子供たち』であり、雷怨寺夢幻や九狸神楽とも親しい。教えられるはずがない。

温犬虎狼の部隊は、温犬艦隊の約一割。大きくはないが、しかし、横槍を受けた紅蟹が反撃し、虎狼の部隊を押しつつもうとしている。温犬虎狼は馬鹿だが、武勇はある。温犬家での人望もある。温犬の別部隊まで、虎狼の救援に向かい、否応なく戦線が拡大されつつある。

温犬の主力艦隊が、動き始めた。

跡取りの救援ではなく、反転して雷怨寺家に向かっていく。

すこし早い。船足も乱れている。

が、致し方ない。

「たわけが。子供の仕付けもろくに出来んのか」

盟友たる温犬公に悪態を付いてから、斑尾は御座から立ち上がった。

「全艦隊に告げよ！ これより九狸家は雷怨寺家を離脱して、織田信長公に従う！ 『雷怨』の旗を捨てよ！」

斑尾の下知が、大声で伝言されていく。

鬼狸号が、船首を九狸艦隊へと向ける。隣接する船々が鬼狸号に歩調を合わせる。方々の船から、『雷怨龍』の旗が海に投げ捨てら

れる。

秩序だった行動を維持するために、つい先ほど術葉衆を出している。近隣の船はその効果もあり、万全の動きを見せた。が、遠くの船は回頭が鈍い。

全艦隊に情報を浸透させるには多少時間が足りなかったが、それも仕方はない。戦は常に流動的だ。

温犬が反転して、雷怨寺艦隊に向かってくる。

動かなかった九狸も同様だ。

紅蟹を包もうとした鶴翼の陣が、今は紅蟹を中心とした鶴翼の陣となり、雷怨寺艦隊を押しつつもうとしていた。

「温犬、もか」

雷怨寺夢幻は、どすんと、御座に身を落とす。

まさか、ではなく、やはりな、という心境だった。

怒りではなく、あきらめが心を埋める。

これで短い間に、四宿老家の内、三つが背いたことになる。

九狸、温犬の裏切りで、この海域での戦力差は逆転した。

雷怨寺と笹雉を合わせて、七〇〇隻。

九狸、温犬、紅蟹、織田で、八五〇隻。

僅かな差だが、しかし笹雉の二〇〇隻は、陸上用の輸送船だ。八五〇隻対五〇〇隻の勝負になる。それでも、温犬と紅蟹の二画はまだ絡み合って混乱している。九狸の動きも鈍い。五〇〇隻が一丸となって動ければ、まだ十分に勝機はある。

しかし此処での勝利にもう意味はない。

織田信長と雷怨寺家の戦争という意味では、両公に背かれた時点で勝負は決している。

雷怨寺艦隊の二画から、戦場を離脱していく船団が出始めた。

笹雉の艦隊も、反転して海域を去っていく。

陸上戦の可能性はすでに無い。笹雉の撤退は当然だった。

しかし最後に残った四宿老家の撤退は、雷怨寺艦隊にさらなる動揺を生み、敵に勢いを与えるはずだ。

「負けたか」

しかし、考えようによつては、これで良かった。

たとえこの戦に勝利していたとしても、来年には織田の侵攻が始まる。

それに抗する力は、今の北陸にはない。

どうせ滅びるのなら、早いほうがいい。

今滅びれば、千を巻き込まずにすむ。

夢幻は、透き通った乾いた笑みを浮かべた。

戦竜号から全軍撤退を告げる法螺貝が鳴り響く。

「早いな。有馬にしては」

夢幻は素直な感想を口にした。

猛勇を売りとする有馬にしては、やけに諦めが良い。

雷怨寺艦隊は総崩れとなった。

夕刻になつてから、紅蟹の本城・小松城に、九狸公、温犬公、紅蟹公と、織田に寝返った宿老家が勢揃いしていた。

その三人に、織田の先遣隊を率いる前田利長が加わっている。四人は上座のない輪となつて座っていた。

斑尾と温犬公が、前田利長と会つのは今日が初めてだった。

まだ二十歳にも届かない若者だ。が、此処では織田の代表であり、斑尾や温犬公の将来を左右しかねない人物だった。

前田利長は終始、上機嫌だった。宿老家の内の二つを新たに寝返

らせたのだ。その上で雷怨寺艦隊を蹴散らした。大手柄である。機嫌が良くて当然だ。これによって北陸侵攻は劇的に早まったことになる。

かたや斑尾と温犬公は、顔中を赤くして怒りに打ち震えていた。前田利長に対する怒りではない。自分自身や不甲斐ない家来たちに対する怒りだった。

夢幻にしろ有馬にしろ、名のある武將を一人も討ち取れていない。どころか、雷怨寺の艦隊に、決定的な損失を与えることが出来なかった。

情けないまでに雷怨寺勢の撤退が早かったせいもあるが、なににより最大の理由は温犬虎狼の抜け駆けだった。あれで温犬の艦隊は混乱を来し、しかも混戦となる前に裏切らざるを得なくなった。

九狸の艦隊も足並みが揃わず、あちこちで戦艦同士の衝突が起こり、喧嘩騒ぎまで起こして、追撃どころではなくなっていた。

この勝利は、手柄どころか失態だった。

横に恰幅の良い禿頭の巨漢、紅蟹公は、茫洋とした顔で茶を飲んでいる。もともと感情の見えにくい人物だったが、彼が平静なのは理由がある。彼は、織田家筆頭家老の柴田勝家と交渉を持った上で寝返り、本領安堵に、織田信長のお墨付きまで得ていた。

紅蟹領が北陸の最南端だから出来た芸当だが、最初に北陸で織田に臣従した事実、それだけ高く評価されてしかるべきものだった。が、九狸と温犬は違う。

二人の裏切りは、紅蟹公と先遣隊を率いる前田利長を通じて行ったことだ。柴田勝家までは話しが通っているはずだったが、織田信長までは間違いなく届いていない。

誠意を持って取りなす、と紅蟹公と前田利長は約束してくれたが、そんな約束だけでは心許ない。そんな義理がないことくらい、斑尾は重々承知していた。

前田利長は、先遣隊の総大将であると同時に、戦目付も兼ねている。今日、彼が目にした出来事は余すところなく、北陸総司令官・

柴田勝家に、そして織田信長に伝わることになる。能力主義が徹底している織田家だ。こんな様では栄達どころか本領安堵も怪しくなる。

斑尾と温犬公は、このまま雷怨寺領攻略に取りかかりたい、と申し出た。

放つておいても雷怨寺家は立ち枯れるが、二公には見える形の手柄が必要だ。織田の主力艦隊が北上してくる前に、少しでも雷怨寺領を切り取っておく必要があった。

前田利長とて二人の事情は理解しているし、まだ二人は正式に織田家に組み込まれたわけではない。前田利長には命令する権限も、断る理由もない。

前田利長は、これをにこやかに了承した。

北陸の女狐

小松島沖の海戦から、四日後。

這々の体で、雷怨寺の艦隊は、雷怨寺城に帰り着いていた。帰還して直ぐ、軍議となった。

雷怨寺家の家老衆と笹雉公が揃うその席に、神楽も呼ばれていた。夢幻は、織田への降伏を主張して譲らないため、筆頭家老・有馬国清の判断で外されている。

「あなたの差し金ですか？」

有馬国清が、神楽を詰問する。

「何のことは存じませんが、おそらく私でしょう」

神楽は口元に手を当てて微笑んだ。

「何のことだと？ 撤退の指図を勝手に出したことだ！」

撤退の合図は戦竜号から発せられたが、有馬国清の指示ではなかった。戦竜号に乗船していた使番の一人が勝手にやったことだ。夢幻様の命令によって、との申し開きでその場で切り捨てることは思いとどまったが。

「温犬も九狸も突然の寝返りで混乱していた。あそこに乗ずる以外、我々の活路はなかった」

「確かに勝てそうな戦ではありませんたね」

まるで見てきたように神楽が言う。

「なら！」

「ちなみに、敵方の混乱も狐です」

神楽の言葉に、有馬国清は口をつぐむ。

有馬や重臣たちは、九狸神楽を陰で『北陸の女狐』と呼び、彼女に従う者たちを『狐』と呼んでいた。が、組織の規模は全く把握できていなかった。狐がこの様な行動を起こすことは今まで一度もなかったからだ。動かない組織の全貌を知ることが難しい。

「撤退した理由ですが、戦力を温存するためです」

神楽は微笑みを浮かべたまま答える。

「……温存してどうする？」

「次の決戦で勝利します」

「あそこで勝つのも仕切り直すのも同じ事ではないのか？ いや、あの敗戦によつて当家を見限り離反した者も沢山いる。時がたてば経つほど、その数は増えてくるはずだ」

すでに斑尾たちによる切り崩しは始まっていた。四日のうちに、姿の見えなくなった者も多い。

「ですがこれによつて裏切り者は当家から一掃されました。次に船を並べる者は死兵となつて雷怨寺に報いてくれる者たちです。後ろから刺される心配もなく、安心して戦に挑めるでしょう」

「選別したとでもいうのか？」

有馬は口元を嘲笑に歪めた。

「もちろん、それだけではありません」

神楽は微笑みを崩さないまま、

「あそこで血みどろの戦をして、そして勝利して何になりましたしょうか？」

「……」

「あのまま戦つて、温犬公と斑尾を確実に討ち取ることは出来ましたでしょうか？」

「……」

「裏切りと裏切りが交錯していて、ただでさえ敵味方の区別が付きにくい戦です。数も匹敵しています。戦の続行すら危うい状況で、たとえ勝利したとしても、船団の多くを失つたでしょう。そして斑尾にしる温犬公にしる、打ち損じれば必ず謀略を仕掛けてきます。北陸は二つに割れたままです。さて、それでどうやって織田の北上を迎え撃つのでしょうか？」

「……では、どうするというのだ？」

有馬の問いに、神楽は笑顔を浮かべた。とろけるような声で。

「九狸を乗っ取ります」

「……出来るのか？」

「九狸家にも、織田に与することをよしとしない者は、この私も千も含めて大勢いますので」

この私と千の名を強調して、声を張ってみせる。

死んだように黙っていた家老衆が、隣り合う者同士で意見の交換を始める。

神楽はにこにこ微笑んで彼らの視線を受け止めつつ、

「その工作は、つつがなく終了しています」

半分は嘘だった。工作はほぼ終了しているが、成功の保証はない。それに九狸を本当の意味で乗っ取れるのは、戦に勝利してからになる。

「当家の被害はそう多くない。九狸を取り戻せば、確かに勝機はある」

有馬があごひげに手を当て、唸る。どこか、芝居じみた動きだった。

「丸ごととは行きませんが、温犬にも狐はいます。——それに、縞馬も」

「縞馬も、か」

「はい。千になら従うとのこと。縞馬から確約を取り付けました」

「なるほど。縞馬が、な」

神楽が縞馬の海域を行き来していることは、北陸では公然の秘密だった。家老たちはそれを知っていて、しかし知らぬふりをしてきた。せつかく大人しくしている縞馬を刺激したくなかったからだ。

豪千公が竜王と呼ばれたのは、ひとえに竜武士団が強かったからだ。

その強さは縞馬党が支えていた。失い、そして敵対して家老衆はその強さを骨身に試みていた。九狸、縞馬と戻るのなら、次の戦に勝機が出るし、織田の北上を阻止できるかもしれない。

それに、千姫。

豪千公の羽織をまとい、京で竜王として君臨し、織田の名だたる武將を竜技によって打ちのめした彼女の名声は、北陸で並ぶ者がない。その竜技の冴えも、彼女と温犬虎狼の竜技戦を多くの者が目にし、噂となっていた。彼女は縞馬党とも随分仲が良かった。雷怨寺夢幻の婚約者でもある。北陸をまとめるのに、これ以上ふさわしい扇の要はない。

有馬は家老衆の顔を順に見回した。一年ほど前に『狐』へと墮した典禪を初めとして、話の初めから一貫して落ち着いている者が他に三人もいた。後の者も、特に意見はないようだった。

「よかるう。次の戦。神楽殿に預けよう。豪千公の戯れが戯れでなかったことを証明して見せよ」

有馬に現状を覆せる方策は一つもなかった。
すでに万策尽きている。

たえ悪魔にだらうと可能性が僅かでもあるのなら賭ける以外にない。

「承りました」

神楽は微笑んで頭を下げた。

ただし、神楽が確約を取っている縞馬勢は、約三〇〇騎ほどでしかなかった。しかも若い縞馬党ばかりで、歴戦の強者たちは最後まで首を縦に振らなかった。彼らも再起する切っ掛けを求めているが、誇りと意地が其れを邪魔している。千には、火矛蔵たちを奮起させる一言を伝授してきてはいるが、通じる保証はない。

が、三〇〇騎だらうと若造だらうと縞馬は縞馬だ。嘘は言っていない。

それから、具体的な話し合いに入った。

軍議の間、神楽は素知らぬ顔で、微笑みを浮かべ続けていた。

天守閣で待つ夢幻の元に、有馬と典禪が足を運んだ。
窓辺に寄り添い、北陸の海を見下ろしていた夢幻が、ちらりと二人を見た。

「決まったかい？」

「はい」

力強く、典禪が答える。

「打って出ることになりました」

しばらく典禪を眺めた後、有馬に視線を移し、

「これ以上の犠牲は無意味だ。僕は出家する」

雷怨寺城に、九狸公、温犬公の連名で書状が届いていた。

降伏の勧告と、夢幻の出家を促す内容だった。そうすれば織田家に誠意を持つて取りなすと。しかし長島での行状、浅井、朝倉、荒木の例もあり、織田信長が雷怨寺家の後継者を生かすとは思えない。それ以前に、新参の降伏者、九狸公や温犬公が織田信長にそのような要求を出せるはずもない。雷怨寺家の結束を乱そうとする策謀でしかなかった。

この書状は軍議の初めに家老衆で回覧した後、鼻で笑って有馬が破り捨てていた。

有馬は、どかっと夢幻の前にあぐらをかいた。

「すまなかった」

深々と頭を下げる。

「この儂の力が足らず、人を見る目もなかった。儂には兄の代わりなど、どだい無理だった」

夢幻は驚いたように彼を見返した。有馬は涙を流しながら笑っていた。

「女狐どのに、膝を屈してきた。……こんな様になるのなら……お隠居やじどのの忠言を受け入れ、もっと早く決断しておれば良かった」

もう一度、有馬は頭を下げ、部屋を出て行った。

ふすまが閉まってから、典禪が口を開いた。

「次の戦は、神楽殿に一任した。千姫さまも、縞馬を率いて参陣なされるらしい」

「千が？」

「そう神楽殿は約束なされた」

「巻き込みたくない」

「もう遅い」

「頼む、典禅」

「無理だ若造」

典禅がぴしゃりとはねつける。

「お前のわがままを聞ける余裕はこの北陸のどこにもない」

夢幻が唇をかむ。

「悔しいか？ 夢幻」

「くやしいよ、凄く。……毎日が、悔しい」

膝を抱えて、涙を流す。

千を京まで迎えに行く。織田の軍勢を打ち破って。

四年ほど前に、夢幻は神楽にそう宣言したことがあった。結局夢幻はその四年間、何もなす事が出来ず、いつの間にか全てを諦め、京での彼女の栄達だけを心の慰みにしていた。

それが、今の夢幻の唯一残された希望で、意地だった。せめて、彼女の幸せを願う、何が何でも千を巻き込まない。そんな僅かな意地すら、今の夢幻には通すことが適わない。

「悔しいならば、強くなれ、夢幻。我を通したければ強くなれ。この戦国、力のある者にしかわがまは許されん」

夢幻が首を横に振る。

「僕には千のような才能はない。虎狼のような強さもない」

「九狸神楽はお前より腕力もないし竜にも乗れない。が、あの悪童はひたすらわがままを通し続けてきた。強いからだ。この北陸で誰よりも。……結局は僕も有馬様も、恥辱に打ち震えながら九狸神楽に膝を屈した」

悔しそうに、齒ぎしりした後、典禅はため息をついた。この五年、

宿老家も家老衆も九狸神楽を押さえようとした。しかしその押さえようとしたたった五年で、彼女は何もないところから北陸中に蜘蛛の巣を張り巡らしていった。

「夢幻よ。力にも色々とある。君主に求められる力は武勇だけではない」

「ちから、か」

自嘲気味に夢幻が笑う。夢幻の頭の中には、竜に乗った千が浮かんでいた。彼女はどこまでも鮮烈な力に満ちていた。

「神楽がお前のために尽力している。彼女の力もまたお前の力だ」

「……情けない」

「わしだって情けないぞ。情けないが、大殿さまとて縞馬の糞野郎より弱かったし、知略に富んでいたわけでもない。ただ、人の上に起つのが上手かったただけだ。竜王を御する者もまた竜王よ。と笑っておられた」

典禪が遠い目をして、微笑む。

「お前はまだ若く、まだ可能性を試していない。じっくり己を磨けばいい。九狸の才媛たちに負けない何かを。……この戦に勝利することが出来た後に」

典禪も席を立ち、夢幻が一人残された。

窓の外、北陸の海を眺める。

「……このままでは、終わりたくないな」

ぼそりと呟いた。

たとえ神楽でも、この状況を覆せるとは思えない。北陸はすでに壊れている。

それでも、神楽が千を呼んだのなら。あの二人ならば。

胸の奥がざわめいていた。あの二人がどうやって戦うのか見てみたい。

「……情けない」

そんな自分に、夢幻はさめざめと泣いた。

姉妹と父

神樂が雷怨寺家の舵を握ってから、二日が経った。

斑尾も、九狸城に帰還していた。斑尾は荒々しく廊下を踏み進む。自らの居室、床几に腰掛ける。

人払いをして、留守を任せていた八尾三徳を側に呼ぶ。

「千はどうだ？ 大人しくしていたか？」

「……おおむね」

三徳は少し言葉を濁してから、

「大人しくなされていました」

言い切った。

あれだけの騒ぎだ。いずれは露見する嘘だが、露見したときは「千姫さま、及び城の者たちと無かったことにする約束で、解散させましたので」と素直に言い訳するつもりだ。

実際そう約束しているのだ。いま斑尾に告げるとは、神樂のみならず城の者たちに対する裏切りとなる。三徳の信用は失墜し、城兵の士気にも悪影響を及ぼすだろう。

「神樂は動いたか？」

「二度ほど、抗議に來られました」

「それで？」

「殿に伝えて欲しいと」

「なんと？」

「竜にかじられ死んでしまえ、と」

あまりの子供じみた悪口に、斑尾は顔をしかめた。

「会わせたのか？ 千に？」

「いえ。会わせずにすみました」

神樂があ夜来たことを知っている者は少ない。こちらは最後まで隠し通すことになる。あくまで、千姫を説得したのは三徳であり、

数人に目撃された虚無僧は、三徳配下の女忍びという扱いだ。

「引き下がったか？」

「いえ……………なかなか素直には」

三徳が顔を逸らした。

斑尾は三徳の顔を見て少し笑った。それで先ほどの悪口だろう。

と勝手に思った。

「千には？ 伝えたか？ 神楽が来たことを？」

「いえ。何も」

「……………そうか」

斑尾はあごに手をあて考える。

「千は竜技に神楽は悪巧みにと、天の際を持って生まれてはいるが、所詮は子供でしかないか。拍子抜けするほどあっけなく千を確保できた事といい、神楽を少し買いかぶりすぎていたかもしれない」

独り言のようにつぶやく。

斑尾たち北陸の支配者たちは、神楽に仕える者たちを『狐』と呼んでいる。特に神楽と千の生家である九狸家には、多くの狐が潜伏していると見られていた。疑わしい者は大勢居るが、しかし数人を除いて断定することは出来ずにいる。彼らはひたすら影に徹しており、表に出てくることがなかった。

だからこそ、斑尾はぎりぎりまで必要最小限の側近にしか、裏切りの事実を打ち明けなかった。三徳にすら、話さなかった。万が一にも神楽に情報を奪われないようにだ。

しかしこの重要な戦で何も行動を起こさなかったとすれば、表に出てこなかったのではなく、狐たちには出てくるだけの力がなかった、それだけかもしれない。

「まあ、よいわ」

神楽にかまっている余裕は斑尾にはなかった。これからの半年ほどの働きで、九狸家の運命は大きく変わってくる。

とにかくやるべきことは山積みだった。

雷怨寺を裏切って織田についたのだ。味方が敵に、敵が味方に大

きく入れ変わった。

配下の武将たちにも改めて説明し、海商にも今まで通りの協力と、さらには雷怨寺に物資を回さないよう手を打つ必要がある。

雷怨寺領を切り崩す戦争も、部隊を分散し、主要な海域の封鎖や、上陸部隊による城攻め、海上の遭遇戦と、かなりの広範囲に広がることになる。織田や紅蟹、温犬とも連絡を取り合い、雷怨寺の動向も注視しながら、それらを管理しなければならない。

武力だけでなく、調略も重要だった。

北陸の武家同士で、複雑に婚姻関係が結ばれている。九狸系の武将と雷怨寺系の武将で縁が跨っていることも多い。そのつてを使って寝返りを打診する。

相手によっては、斑尾自らが動く必要がある。城に帰還する船の中でも、たくさんの指示を出し、約束手形を書きまくってきた。

少しの時間も無駄には出来ない。僅かな人材も遊ばせる余裕はない。

「三徳よ。お前にも動いて貰わねばならない。まず卯木家の切り崩しを頼む」

「かしこまりました」

雷怨寺で一万石の領地を有する卯木家には、三徳の娘が嫁いでいた。

斑尾は立ち上がると、早足で千のいる居室を目指した。

千は琴の鍛錬をしていた。

まさしく鍛錬と表現するのが適切な優雅さの欠片もない硬質な音が響いている。

琴を教えていた青年は、斑尾を見て、席を外した。

琴を挟み、斑尾は千の体面に座った。

千は琴に視線を留めたまま、

「戦は？」

「勝った」

「夢幻は？」

「夢幻のことはもう忘れよ」

千が弦を軽く弾いた。もの悲しい音が流れ、消えていく。

「雷怨寺家は終わった。この北陸は織田の支配下に入る。後は掃討戦じゃ」

「姉ちゃんは？」

「どこにいるかは分からん」

斑尾は首を横に振った。

「戦が一段落したら、千には一度京に戻って、九狸家の代表として織田との折衝を頼みたい。九狸家みんなの命運が掛かっている」

「ん。分かった」

「……神楽には、もうこの北陸で居場所がない。京に行くかもしれない。その時は面倒を見てやってくれ」

「分かった。その時は面倒を見るよ」

千は琴を弾き、口ずさむ。

「人間五十年、下天のうちをくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」

歌は上手かった。ただ、琴は下手だった。

斑尾はしばらくじっと聴いていた。

本当に、あまり言葉を交わし合ったことのない娘たちだった。

結局、斑尾は無言で席を立った。

それから四日。

北陸は目まぐるしく混乱した。

雷怨寺家とそれに従う家々。

九狸家や温犬家など、織田に寝返った家々。

それぞれが放つ幾つもの書状と、その数倍になる偽書が飛び交った。

複数の海域で遭遇戦が繰り返され、要衝の砦を艦隊が取り囲む。

温犬や紅蟹など、同盟する勢力との間でも、小競り合いは起こる。

織田に下る側も、出来るだけ良い条件を引き出そうと必死だし、

斑尾も温犬公も、その支配下の侍たちも手柄の奪い合いだ。

斑尾は自ら海を駆けめぐりながら、ありとあらゆる対処に忙殺された。旗艦、鬼狸号は人の出入りで、混雑している。

そんな時に、斑尾の前に三〇隻の艦隊を率いて、神楽が姿を現した。

「おほほほ。お父様お久しゅうございます」

「雷怨寺家の軍師さまがこの様な場所にいかようなご用でしょうか？」

「これはまたご挨拶な。わたくしは、九狸家の長女でございますよ？」

「父の言うことを訊かず好き勝手に動き回って今更何を言うか」

斑尾は呆れた声を出す。

斑尾と神楽はこの数年、ひたすら対立してきていた。神楽は斑尾が取り付けた婚姻も全て蹴りつけた。一貫して雷怨寺家の人間として振る舞い、夢幻にべったりだった。

神楽は微笑んだ後、斑尾を睨み付けた。

「うふ。お恨みしているのは、わたくしの方です。お父様こそ水くさい。なぜ織田に寝返ることを言うてくださらなかったのですか？

おかげでわたくし、千に申し訳ないことをしてしまいました。わたしは九狸家のために、よかれと思って今まで雷怨寺家に取り入り頑張ってきました。お父様が織田に与していると知っていれば、絶対に千を雷怨寺家などに嫁がせようとはしませんでしたのに」

「……」

疑わしい目で、斑尾は娘を見る。

「ですがまあ、お互い水に流しましょう」

勝手なことを言ってから、神楽は斑尾の耳元に顔を寄せ、拗ねるようにささやいた。

「わたしだけ、沈む舟に置き去りにするつもりですか？」

そつと、神楽が懷から七つの書状を取り出し、斑尾へと手渡して離れる。

斑尾が目を見張る。

雷怨寺家に従う武将たちからの親書だ。

九狸家に属することを約束していた。

「お父上はご存じだと思いますが、もともと神楽商店を構成する海商たちは、京や境を本拠とする海商たちでした。中央海域で織田の支配が強固となり、中央海域と北陸との交易が難しくなり、北陸から引き上げるを得なくなったとき、彼らは半数近い船と人員を切り離してわたしに預けていきました。せつかく構築した北陸での地盤、それを全て捨てるのが惜しかったからです。北陸の独立が続く間は、わたしの元で、北陸、さらには毛利、上杉との交易に従事する。織田が北陸に進出すれば、素早く解体してまた京の本店が吸収する。そういう約束です」

「……なるほど。そう言うことが」

斑尾が唸った。

つまり、織田が北陸を制圧すれば、神楽商店は解散となる。神楽の組織は財源を失う。雷怨寺豪千の威を借りて好き勝手にやってきた神楽だが、軍師としての肩書きは、雷怨寺家が滅びようとする今、もはや北陸で何の役にもたちはししない。つまり、このままだと神楽は全てを失う。

ただし、今ならまだ神楽は海商たちに一定以上の影響力を発揮することが出来る。

そして、今この時ほど、神楽が北陸で築いた組織を、高く売りつけられる時はない。

神樂が構築した京の海商との繋がりには、織田に下る斑尾には喉から手が出るほど欲しかった。

斑尾から見て、神樂の行動はとても理に適っていた。

神樂が雷怨寺を諦め、九狸に帰属するには今をおいて他にない。

斑尾はいやらしく微笑んだ。

「いいだろう。親子共々、協力してこの九狸を盛り立てようではないか」

神樂もいやらしく微笑んだ。

「わたくしとお父様が協力すれば、九狸家をもっと大きくすることが出来ますわ」

斑尾は神樂を受け入れた。

ただし、油断はしない。

神樂の連れてきた三〇隻の船は、神樂からは完全に切り離れた。

更には分散して後方の輸送部隊に割り振り、大型の船には九狸の郎党を送り込む。

神樂がおかしな行動を取らないように、出来る限り彼女は斑尾の側に置いた。その上で、信用出来る侍を数人、世話役として神樂につけて、常に監視した。

神樂の指揮の下、次々と神樂商店から必要な物資が送り届けられてくる。

斑尾の負担は劇的に軽くなった。

神樂が斑尾と合流してから更に四日後。

雷怨寺艦隊が集結し、九狸領に侵攻しつつある、との報が斑尾に届けられた。

姫竜王と海賊王

雷怨寺、及び笹雉の艦隊が九狸城を目指し進軍してくる、その報告を受けて、八尾三徳はためらうことなく港に残った船の殆どを発進させた。

近隣の砦や、自軍の艦隊に事の次第を知らせるためと、船を無為に失わないためだ。

その上で、城下の町に、九狸本島にある別の町へと避難するように指示を出し、逃げるあてのない者と、戦う気概のある者を城の中へと招き入れた。

九狸城の三の丸は、海岸線に長く延びており、港と一体となっている。

ここで一定の期間、敵の上陸を封じる。
が、港としての機能を優先した造りでもあり、そう長くは持ちこたえられない。

ただし、二の丸と本丸は別だ。この二つは尾根に配置された山城であり、鉄壁の防御力を誇っている。かつて雷怨寺豪千の攻撃にも、上杉謙信の侵攻にも持ちこたえた実績がある。

城を練り歩きながら指示を出し続ける三徳の元に、千姫の部屋まで様子伺いに向かわしていた侍が帰ってくる。

「千姫さまはお疲れのご様子で、お休みのようです」

「……会ったか？」

「……いえ。会わせては貰えませんでした」

「………そうか。いや、よい。縁の深い雷怨寺家との戦じゃ。姫の心情、察するにあまりある」

周りに聞かせるような大きな声だった。

千姫が雷怨寺夢幻と婚姻するために帰省したことは城の者たちはみな知っている。ふさぎ込んでも不思議ではなく、説得力はある。

もつとも数日前まで千姫は相変わらず自由に歩いていたが。

その間、千姫の周りは彼女が選んだ侍女や侍たちで固められており、三徳の管理下にはなかった。三徳自身、やらねばならない仕事は山積みだった。数人の監視は距離を置いてつけるようにしてはいたが、手が出せない。まして若い姫君の屋敷の中までは把握しようがない。

雷怨寺家が攻め寄せてくるこの状況で、三徳がもつとも恐れたのは、内部から千姫に扇動されることだった。

遊びではないし、千姫が裏切れと言って裏切る者はそう居ないだろうが、九狸神楽が絡むと話は変わってくる。

三徳は、九狸神楽が『細作の道』を通らずに城に侵入していたことを、三回、把握していた。ただし、進入経路を見つけ出すことは出来ずにいる。

彼女の狐が、この九狸城に一人もいないと考える方が不自然だ。

内部の狐が、外部と示し合わせて行動すれば、たとえどれほど堅牢な城でも、穴の一つや二つは空く。そうした後、ぬけぬけと「千姫さまの指示で城の者が決起した」と噂を立てられれば、城内は動揺し、新たな裏切りを出しかねない。難攻不落の九狸城が千姫の裏切りで落とされれば、戦の衰勢も変わってくる。

九狸神楽が斑尾と和解して九狸家のために動き始めたとの報告は、三徳も得ていたが、全く信じては居なかった。

「とにかく、千姫さまの屋敷の周りは、厳重に警護しろ」
それだけの指示を出す。

出来るだけ早く、千姫が在室することを確認する必要がある。が、その為の下準備が必要だった。今の状況でこの前のように千姫の機嫌を損ねて暴れられては取り返しのかねないことになる。

幾つか籠城に必要な指示を出して、城の重点箇所を巡回してから、三徳は奥の院を目指した。

千姫に従う侍女の多くは、九狸千寿子の手勢だ。彼女を説得して、千姫の指揮下から侍女を解き放つ。この要望を、千寿子は少し渋っ

た。三徳は即座に要求を変更する。ならせめて千姫さまと直接会えるように取りはからっていただきたい、と頼んだ。

幾つかの段階を得て、三徳は千姫と会える算段をつけることに成功した。

しかしその頃には城はすでに雷怨寺家の軍勢に包囲されていた。

三徳は一人で、千の部屋へと入っていった。

彼女の部屋に、千姫は居なかった。

手紙が一枚、置いてあった。

『三徳へ。迷惑をかける。わたしのことは気にするな。もう城にはいない。後のことは任せた。守りに徹すれば落ちることはないよ。千』

その手紙を読み、三徳は胸をなで下ろした。

くしゃりと丸めると、火にくべて燃やす。部屋から出、

「千姫さまは少し気分がすぐれないそうだ。お前たちを信じて寝て、と仰られた。姫のご期待に応えるためにも、斑尾様が戻られるまで何としても城を守り通すぞ！」

外で待ち受けていた者たちに宣言する。

九狸神楽と千姫の姉妹が、敵に回ったのはもう確実だろう。

そして、すでに彼女は城外に出ている。

この手紙を残しながら城内に隠れ潜み、敵と内応すれば、二重三重の裏切りとなるのだ。彼女が慕われているからこそ、それは出来ない。人望を失えば、誰も従わないし、内応も成立しなくなる。全く残す必要のないこの手紙を残した以上、彼女たちは九狸城を蹂躪すべき対象からは外していると見ていい。

城のためにはこれでよい。

八尾三徳はすでに腹を切る覚悟を決めている。

敵の中に千姫を見つけた斑尾がどのような顔をするか、考えるまでもない。

しかしそれは先の話だ。この城に凱旋する者が斑尾ではなく神楽ならば首も繋がるが、それも先の話だ。

城は包囲されている。神楽の思惑がどこにあるかと、雷怨寺の軍兵は裏切った九狸家を恨んでいる。進入を許せば虐殺は止まらなくなる。

今は九狸家の筆頭家老として、大切な城と家臣、領民を守ることが、唯一為さねばならない仕事であり、そのことに全神経を集中させるのみ。

前田利長は織田の先遣隊を率いて、紅蟹の領海を巡航していた。

織田の大艦隊を迎えるには大きな要塞と港が必要だが、それを建設する候補地を探していた。紅蟹からは所有する城を一つ献上すると言われているが、柴田勝家が率いてくる北陸方面軍だけでも大船を中心に一〇〇〇隻を超すはずだ。織田信長が次の標的を北陸と定めれば、その数倍が動員されるだろう。船を泊める港も、物資を保管する砦も、複数用意しなければならない。

これらの拠点は、たとえ織田の本体が北上する前に雷怨寺家が滅びたとしても、必要になってくる。北陸の統治と、更には上杉侵攻の拠点のために。

一つの候補地で慎重に水深を測らせ、漁民から年間を通じた海の荒れようなどを尋ねている利長に、一人の密偵が至急の面会を求めた。

利長は漁民に多めの謝礼をにこやかに渡してから、ゆったりと船の中に身を移した。

雷怨寺と笹雉の艦隊、約六〇〇隻が、九狸城を包囲している。その報告を受けて、
「へえ」

前田利長は、軽く驚きの声を発した。

雷怨寺城に籠もっていたところで、彼らに勝機はない。一か八かの勝負に出るのは当然だが、しかしそれを実行できるだけの求心力を、まだ雷怨寺が有しているとは思わなかった。

さて問題は、こちらがそれにどう対応するかだ。

雷怨寺の目的は、おそらく九狸城ではないだろう。

三宿老家の艦隊を引きずり出して、大規模な艦隊戦で叩くつもりだ。

彼らが勝利しようと思えば、それ以外に方法がない。

「それにしても、九狸城を選んできたか」

九狸領は北陸のもっとも東に位置している。

九狸城を救援しようと思えば、雷怨寺直轄地を通る必要があった。幾つか雷怨寺領内で、引き抜きに成功した砦もあるが、まだ信用するには早すぎる。雷怨寺領を通行する間は、大艦隊が安全に寄港できる港はないし、兵站にも苦慮するだろう。北陸の奥深くであり、万が一の敗戦時には、撤退も困難となりかねない。

北陸の海域の中でも特に雷怨寺家にとっては優位で、前田利長たちには不愉快な戦場だ。

「素直に出向くのは、しゃくにさわるな。ならいつそ」

敵が九狸城を攻めている間に、北陸を一つ一つ調略、切り崩す。船団を分散して、守りが手薄となった城を一つずつ奪っていくか。

雷怨寺家も無視できず、分散して応じてくるなら、北陸全土の混戦となるが、それで疲弊するのは所詮は北陸勢であり、織田ではない。

もし、雷怨寺家がそれを嫌って九狸城を攻め続けても、九狸城は強固な山城だ。落ちるまでの間に、北陸の大半は攻略できる。そして九狸城が落ちたところで、前田利長にとってはやはり痛くない。後で取り返せば良いだけだ。

こちらが九狸城の救援に向かえば、雷怨寺はまさしく背水の陣で、決死の覚悟で挑んでくる。馬鹿正直に相手してやる必要はなかった。

それに前田利長は先の戦いを観戦して、主戦力となる北陸三公の、特に九狸と温犬を頼りなく感じていた。

織田の主力艦隊が北上して来るまでに、北陸の力を削げればいい。前田利長は猛将ではなく、優れた能吏だった。

此処は当たらずいなすに限る。そう判断した。

しかしそれはあくまで織田の都合でしかなく机上の理論でしかなく、前田利長はその作戦を選択することが出来なかった。

雷怨寺の行軍を察知した九狸、温犬、紅蟹の三公が、全軍を集めて合流したからだ。

もちろん、艦隊戦を受けて立つためにだ。彼らにとっては汚名をそそぐ千載一遇の好機であり、逃す手はなかった。

本城を攻められている九狸公は当然として、温犬公の意志も固く、前田利長に説得の余地はなかった。

そしてこの日初めて、前田利長は千姫帰還の事実を九狸公から聴き知った。

彼女が京を離れ、北陸に帰還し、九狸城にいることを。

前田利長は千姫と直接の交流はないながらも、竜王の勇名は聞き及んでいる。九狸城が落ち、竜王を雷怨寺に奪われれば、少々しんどいことになる。それに竜王の身に何かあれば、織田信忠を初め、竜王と交流のある将士が後でうるさい。

前田利長は三公との評定の末に、決戦を選択した。せざるを得なかった。

温犬、九狸の率いてきた艦隊は、それぞれ四〇〇隻。彼らが動員できるほぼ全軍に、雷怨寺から下った船も加わっていた。

紅蟹と織田の先遣隊を合わせると一一五〇隻になる。

それが一団となって九狸城を目指した。

九狸城が雷怨寺の艦隊に取り囲まれる二日前、千姫は神楽の用意した影武者と入れ替わって、すでに城を抜け出していた。その前日には、竜技戦の途中に、千柳も別の竜と入れ替えて城の外に出している。

神楽商会の船に乗って、戦と千柳は縞馬の海域に進入する。

千の役割はただ単純。縞馬党を率いれるだけ率いて、戦に参陣する、それだけだ。

「来ちゃったんだ」

火六夜は少し寂しそうに嬉しそうに呟いた。

「織田と、戦うの？」

「うん。戦う。旗揚げする。だけど、わたしには兵がない。だから、欲しい。最高に最強な兵が。だから火六夜。私と共に、戦ってくれ」

火六夜が少し照れくさそうに笑った。

「えへ。わたしが千の最初の兵か」

「侍大将」

「うん。侍大将。わたしが千の侍大将」

雷怨寺の子供たち。

九狸党で、姉の神楽が千の軍師なら、ずっと昔から火六夜は千の脇を守ってきた相棒だ。

「まかせて。わたしが千を守ってあげる」

「ありがとう。頼りにしてる」

千が礼を言うと、火六夜は柔らかく微笑み、首を左右に振る。

「感謝するのはこっただけだね。このままだと私たち、干上がってた」

千と火六夜は竜を並ばせ縞馬の館を目指す。

「神楽から話は聞いている。五〇〇人、仲間は集めた。いつでも出撃できる」

五〇〇騎の竜部隊ならそれなりの戦力には為る。

が、縞馬党の戦力は腕の未熟な者を外して、最大一二〇〇人構成だ。半数にも満たない。

「火矛蔵は？」

「……どうだろう？ この前に千が来てからお酒を飲んでないし、竜にも乗って出かけたりしてるし……戦いたくてうずうずしてるみたいだけど……年寄りたち、無意味に頑固でなかなか首を縦に振らない」

はあ、と火六夜がため息を吐く。

「でも、任せて。わたしに考えがあるから。あの単純馬鹿どもの扱いは得意だから。……失敗しても、少しは数を増やせる」

縞馬の館に近づくと、怒声が聞こえてくる。

「なんでだよ！ このままだと織田が勝っても雷怨寺が勝っても俺らは滅びるだけだろうが！」

若い縞馬が火矛蔵に向かい、声を荒げていた。火矛蔵は一言も答えず鼻くそをほじり聞き流している。

縞馬党は、それなりに大所帯だ。今は神楽の好意で必要な物資を賄っているが、その神楽からは、暗に打ち切りの通告を受けていた。神楽が決起に失敗すれば確実に潰えるし、成功しても、織田の侵攻を目前とした今、働かないと決まった者たちに無駄な失費は出来なくなる。

そして、信長は自らの領内に、一切の独立勢力を許さない。伊賀と甲賀を徹底的に弾圧し、比叡山すら焼き討った男だ。北陸を支配下に置いた後に、海賊を放置するはずもない。

縞馬が生き残るためには、今この時に神楽の要請に従って行動を起こす以外にない。そんなことくらい、縞馬火矛蔵だって分かっているはずだった。

火六夜と千に気付いて、怒声を上げていた青年は、気まずそうに口を塞ぎ、一步下がった。

「お父さん。千が来た。戦だよ。縞馬党の力が欲しいって」

「……」

「まだ気が変わらないの？」

「……」

「そう」

火六夜はつんとすまして、

「別にいらないわ」

言った。

「大切な大切な千の初陣に、酒に溺れた年寄りなんて連れて行ったら縞馬党の恥になるだけだしね」

「……」

「使えない人はいららないのです。お父さんはいりません！」

ぎりつと火矛蔵が齒ぎしりするが、何も言わない。

火六夜は火矛蔵の側に控える年配の縞馬党に冷たい視線を向け、
「牟田郎もいらない。邪魔になるだけ」

「なんじやとこの小娘！」

つばを飛ばして抗議する牟田郎に鬱陶しそうに手を振ってから、
「あなたもいらない。あなたもいらない。あなたもいらない」

次々と指さし、火矛蔵の取り巻きを戦力外通告していく。それから、につこりと微笑み、

「寝太郎は来てくれるよね？」

「う、お、おう。と、当然だ」

「ありがとう。心次郎は来てくれる？」

「ん、任せろ」

「頼りにしてる。ああ、左近はいらないわ。年寄りいらない」

そうやって火六夜は縞馬党を選別していく。此処に集まっている縞馬党は、身分が高く、各皆で何十人も配下を預かっている。一口説くだけでもそれなりの数を増やせる。もっとも寝太郎と心次郎には内々で話を通してあった。

じろりと、火矛蔵が火六夜を睨む。

「そうやってわしらを挑発すれば、嘗めるな小娘、このわしの力を思い知らせてくれるわ、とでも言って付いていくとも思ったのか

？」

「……」

「神樂の浅知恵だな」

くくくつと火矛蔵が笑う。

「……わたしの浅知恵よ。今まで神樂にあんだけ世話になって、そんなこと言う？」

火矛蔵がどう猛に笑む。

「ふん。大人しくしてやる見返りに、受け取ってやったただだ。もうこれ以上、酒は出せないだと？ ふん、生意気な小娘が。なら奪い取るまでよ」

ぐわははははっは、と笑う。

「……」

「行きたい奴は勝手に行け、だがわしは――」

「意地悪言うなよ。火矛蔵」

千が笑いかける。

「わたしとお前の仲じゃないか？」

「……ふん。たわけ。がきの遊びに付き合ってやるのはお前ががきの間だけじゃ」

「遊びじゃない。天下取りだ」

「……がきが、生意気な」

「なんだよ。約束しただろ？」

「何を？」

「一緒に全国制覇しようって」

「……何時？」

「忘れた。だが、確かにしたよ。九狸千と縞馬火矛蔵が乱世の中で出会って、その約束をしていないはずがない」

「……」

「一緒にやろう。このわたしの旗を、京に立てる」

「……」

「来てくれるんだろ？ 火矛蔵」

「む」

「お前が居なければ始まらない。頼む」

千が頭を下げる。

火矛蔵は顔を背けた。

「……………約束ならば、まあ、し、仕方あるまい」

「ありがとう」

千が笑う。火六夜がそっぽを向いて、不満気に鼻を鳴らす。ずおっと火矛蔵が立ち上がった。

酒も飲んでないくせに真っ赤な顔で、

「者ども！ 出撃じゃ！ 縞馬党の略奪祭じゃい！」

「おおおお！」

怒号が屋敷の中を埋め尽くした。

火矛蔵の館から、縞馬党が縞馬の海域に散っていく。

砦へと戻り、手勢を掻き集めるために。

一夜開けて、準備を終えた縞馬の竜武士たちが、隊列を組む。その先頭に、豪千の羽織を纏った、千。

目指すは、室戸湾沖だ。

決戦前夜

三公と織田の千隻を超える大艦隊が、海を埋め尽くすように進軍する。

雷怨寺領の砦たちは、ただ震え上がり、門を固く閉ざして見送るしかない。

雷怨寺領を通過する間、ただの一度の妨害もなかった。それどころか、三つの砦が自ら開城し、三公へと降伏していた。

無事に雷怨寺の領海を通り抜け、三公軍は、九狸領に到着している。

九狸城まで、三刻ほどの距離にある九狸領の室戸湾で、船の点検や修繕、物資の補給を行っている最中だ。

明日の朝まで、この港で時間を潰して、それから最後の船出となる。

先行する偵察船から、幾つかの情報が入っている。

海沿いの三の丸はすでに落城しているが、しかし二の丸と本丸は健在。

雷怨寺艦隊は、まだ九狸城を取り囲んでいるが、城への攻撃はなりを潜めている。

三公の艦隊が接近していることは、雷怨寺も察知しているはずであり、部隊配置も心構えもすでに海上での艦隊決戦に切り替わっているのだろう。

波も穏やかで、星空が輝いている。

このままの天候が続けば、明日の昼には、九狸本島の沖合で、最終決戦が始まる。

そのはずだった。

戦の前の、最後の夜だった。

斑尾は一人、小さな杯に酒を注ぐ。

豪千公には懂れていたし、最後には惚れ込んでいた。あの男なら天下統一も可能だと信じていた。彼の夢見た全国制覇は、いつしか斑尾にとっても夢になっていた。

雷怨寺夢幻を完全に見限ったのも、最近になってからだ。夢の残滓が斑尾の決断を阻害していたのだ。

しかし決断しなければならなかった。守りたいからだ。灰にしたいくはない。

頭を下げて守れるのなら、いくらでも地に擦りつけてやる。それが多くの領土を支配する大名の勤めだと斑尾は理解している。

斑尾は、ゆっくりと杯を煽る。

苦い思いを飲み込むように。

京を目指した、雷怨寺豪千、最後の大遠征。

その出立前に、豪千公は千を自らの後継者に、そして神楽を雷怨寺家の次代の軍師とする証書を二人に残していった。

子供相手に冗談のような話だが、冗談ではないぞ、と冗談のように笑っていたのを思い出す。

京で名声を得た千。

そして北陸で独自の組織を作り上げた神楽。彼女が加わったこの数日で、九狸艦隊の物資は流麗に回転するようになっていた。斑尾は娘たちを高く評価しているつもりで、まだ見誤っていたのかもしれない。

もしも豪千公亡き後を、千と神楽、夢幻や若い世代が引き継いでいれば、どんな北陸が生まれていただろうか。斑尾は口元でもの悲しく笑う。あり得ないことだ。

二人の親である斑尾すらが納得できなかったことを、他の豪族たちに受け入れられるはずもない。

全ての家々には脈々と歴史があり、みな、多くの宿命を背負っている。柵に縛られながら、荒海のような戦国の世で、船頭を務め、一族を導いている。

明日には、雷怨寺家が滅ぶ。

北陸は、織田の支配下に入る。

酒は好きではない。

それでも斑尾は毎晩、必ず一口は酒を飲む。一日も欠かすことなく。

特に今日の酒は美味しくなかった。

いつしか、うつらうつらと、斑尾は眠りについた。

神楽の目論む、九狸艦隊のつとりは、至極単純だ。

まずは斑尾たった一人を拐かす、それが始まりだ。そしてそれは内部からなら、それほど難しくはない。

斑尾の側近くで警護を担当するのは、『術葉衆』と呼ばれる一五人の侍たちだ。

各船団に斑尾の指示を伝えるのも、彼らの役目であり、いわば斑尾の手足であり秘書のような存在だった。

術葉衆は、斑尾の考案した組織ではない。九狸家の伝統として何代も前から存在し、九狸家重鎮の子息から選出されていた。一般的には『小姓』と呼ばれる制度であり、織田を初め、殆どの武家に存在する。次代の育成も兼ねており、選ばれることは大変な名誉だった。

必然、年代としては、斑尾よりも神楽に近い。

神楽は数年をかけて術葉衆や彼らの友人、家族の趣向や性格、行いを慎重に調べ上げ、三人まで、組織に引きずり込むことに成功していた。そして最近、郷土愛が強く織田の侵攻を面白く思わない一

人を、千の協力もあり、口説き落としていた。

ただし、特定の十五人から対象を選ばなければならない。必中とは行かず、この過程で、一人の術葉衆の説得をし損じ、さらに一人の術葉衆も狐となった後に、露見している。

術葉衆ごと解体されれば初めから策を練り直す必要があったが、斑尾は穏便な選択を――神楽の想定通りに――取った。そう取るようにいくつもの手を打った結果でもある。

それ以降、斑尾は自分と同世代を四人、術葉衆に組み込んで、重要な案件には必ずその四人を活用するようになった。

疑い出せばきりがなく、臣従する武家との間に軋轢が生じる危険がある。斑尾としては實在面と伝統との調和をとり、安心できる体勢を築いたつもりだろうが、中途半端だ。

この改革によって、斑尾は家中の統制も強化し、柔軟に使える手足を四本得て、情報の流失を完全に封鎖して見せたが、神楽の目的は情報だけではない。

術葉衆こそが、目的だった。

斑尾の直ぐ側に、狐が潜んだ。

酒に仕込んだ眠り薬で寝込んだ斑尾を、今の今まで斑尾の護衛役だった狐たちが箱に詰める。

決められた道順で、決められた者の手を通って、幾つかの荷物とともに、それが外へと搬送されていく。

「ふい、随分、肩がこりました」

鬼狸号から抜け出て、小さな漁村のある島に降り立った神楽は、ほっとした息を吐いた。漁村は、神楽の手の者によって固められている。

四日の間、斑尾の監視下に置かれていた神楽には、必要な情報が不足していた。現状を正確に把握するため、多くの報告をまとめて受ける必要がある。何人もの配下を鬼狸号に呼び込むよりも、自分が外に抜け出る方が目立たず簡単だ。万が一見つかったても、言い訳も用意している。

島で一三人と面会して、報告と指示をつつがなく終える。

「さて。ではそろそろお父様を苛めに行きましょうか」

神楽は、とろけるような笑顔を浮かべて指をわきわきさせた。側近たちが苦笑する。演技もあるが、神楽は自他共に認めて人を苛めるのは好きだ。が、もちろん趣味だけではない。

はつきりとした敗北感を斑尾に植え付けておくことと、九狸神楽が身内に甘くはない、ということを理解させておくことは、戦後、斑尾に対して甘い処置を執らざるを得ない神楽にとって、必要なのだった。

「そろそろ起きてくださいませんか？」

神楽がお腹に蹴りを入れる。

「うつ」

昏睡していた斑尾がうめき声を発した。

「あら？ 起きました？」

どこだ、此処は？

斑尾は鈍い頭の中で、眠る前の状況を思い出す。

鬼狸号の中……いや、揺れていない。虫の声がする。……陸上だ。

寝転がったまま、手元の刀を探そうと……手足が縛られている。斑尾は顔を上げた。数人の男が取り囲んで彼を見下ろしていた。皆、知った顔だ。九狸家家中の者たちだった。

その内四人は鬼狸号にも乗船している、斑尾が信用していた侍だった。

「お、おまえたち」

喉がからからに渴いて、声はひび割れていた。

取り囲む者の中に女性の顔を見つける。九狸神楽、娘だ。笑っている。

謀反。

この状況を完全に察したときに、斑尾は顔を歪め、叫んでいた。

「この女狐が！」

それが、とっさに出た言葉だった。

「こん」

「……」

「……こん？」

両手を招き猫の形にして、神楽が首を傾げる。

「……浮かれるなよ、神楽」

斑尾は絞るように低く抑えた声を出した。頭を振る。鈍い痛みが走る。

「おほほ。多少は大目に見ていただきたいですわ。随分と苦労しましたもの」

神楽はからからと笑った。

斑尾はぎりつと奥歯を噛み鳴らし、

「……謀反か？」

「聞くまでもないことでしょう」

確かに聞くまでもない。すう、と斑尾は息を吸う。

「……雷怨寺につき、織田と戦って勝てると思うのか？」

「さて。十に三つといったところでしょうか？」

神楽は微笑む。斑尾は娘を睨み付ける。

「戦じゃ。何が起こるかは分からん。絶対とは言わん。だが、十中八九負ける」

「まあお父様ならそうでしょうね」

神楽の嘲笑に、斑尾はまたぎりと歯をかみしめた。

「そんなに歯がみしてますと固い物が食べられなくなりましてよ」

「……小娘が」

斑尾は歯をむいて唸る。

「……良いだろう、勝ったでしょう。では、織田に勝ったとして、何になる？」

神楽はとろけるように微笑んだ。

「とても嬉しい気持ちになります」

「ふざけるな、たわけが！ 攻めてくる織田を倒したところで、何も得るものはない！」

斑尾が叫ぶ。

荒い息をついてから、斑尾は視線を神楽を取り囲む侍たちに向ける。

斑尾は、押し殺した声で、

「……そして、多くの物を失う。お前たちにその覚悟があるのか？」

それは神楽に言うより、神楽に付き従う九狸の侍たちへの呼びかけだった。侍たちは微動だにせずその言葉を受け流していた。

神楽は薄く目を細め、口元に笑みを浮かべていた。

斑尾は言葉を続ける。

「勝てる見込みのない戦じゃ。たとえ勝つても人も死ぬし、金も失う。田畑も港も荒れ果てる。いずれは織田の侵攻に耐えきれなくなる」

にいつ、と斑尾は笑った。

「しかし、織田に従えば別じゃ。働き次第ではいくらでも恩賞が望める。雷怨寺と笹雉領、その次には上杉と、その向こうには北条がいて佐竹がいる。西に向かえば毛利に長宗我部と切り取るべき島はいくらでもある」

「それは逆に言えば、まだまだ織田の天下ではない、とも取れますわね」

「石山本願寺が落ちて、中央海域を完全に織田が制圧した。これによって中央の交易と人の流れは活性化し、ただでさえ群を抜いていた織田の経済力は天井知らずじゃ。財はそのまま船になり火砲になる。これから加速度的に織田は強国となる」

「これから北陸も強国となればいいのです」

「どうやってだ？」

神楽はほっそりした腕にぐっと力こぶをつくって見せ、

「頑張つて」

「たわけ。英雄によって生み出された国は英雄を失うともろい。この北陸と同じように、稀代の英傑を失った武田はまず間違ひなく数年以内に自壊する。織田包囲網は完全に崩壊する。いや、すでに崩壊している」

「武田などあてにしてはおりません。が、使える部分はもちろん使います。お父様の仰ったとおりです。英雄を失った国は弱い。あの武田にしろ、上杉にしろ、北陸にしろ。ですがそれは織田も同じ事」

「あの男はまだ若く健康だ」

「豪千公も健康でお若くありました」

「……」

「おほほ。私たちはお父様と違いもっと若いのです。信長よりもきつと長生きして見せます」

「……お前たちはこんな馬鹿な女に従ってどうにかなると思っっているのか？」

斑尾が侍たちを見渡す。一人だけ、苦笑した。が、それだけだ。すでに彼らの決意は固まっていた。

「……むちゃくちゃだ。信長の死を待たつだ？ そんな時間が残されていないことすら何故わからんのだ？ それに信長には信忠という秀でた後継者もいる。天下はすでに定まっている。お前たちは何故その程度のことわからんのだ！」

「まだ天下は定まっております。たとえ天下が定まっても、また乱すことは出来ません。お父様が申したように毛利、長宗我部、上杉、武田、そして雷怨寺。織田の四囲は敵だらけです。そして、味方の中に敵が生まれることもあります」

皮肉気に斑尾を見る。

「この女は豪千公の亡霊に取り憑かれているだけだ！ そんな妄執で貴様らは九狸家を潰すつもりか！」

斑尾が本心から叫ぶ。

「豪千公などどうでもよろしい」

ぴしゃりと神楽が言い切る。その冷たい声音に、斑尾は口を閉ざした。

コホンと神楽は咳払いして、

「良い機会ですのでハッキリさせておきましょう。私はあの男が嫌いです。だいつきらいです。ですので、私たちが目指すのは新しい北陸です。古い北陸の再興ではありません。豪千などどうでもよろしい。もちろん、便利なお名前ですので好きなだけ使わせていただきますが」

おほほほつ、とこの場所に雷怨寺家の者がいれば激昂しそんなことを言ってから口元に手を当てて笑う。

それから神楽は眼差し鋭く、斑尾を見下ろした。

「英雄を失った国は弱い。確かにその通りです。ですがそれは裏返せば、英雄に率いられた国が強い、ということです。豪千ごときでこの北陸は天下に手が届きそうなほどに強くなった。それなら、千と私ならどうでしょう？ どこまで行けるのでしょうか？」

「……千を巻き込む気か？」

「当然もちろん当たり前でそのつもりです」

「お前が千に何を期待してるか知らないが、たかが小娘の一人、何も出来るものか」

斑尾が吐き捨てる。

「きつと天下が取れます」

「わしや豪千公でも果たせなかつた」

「あなたや豪千などと私と千をおなじにしなさんな」

神楽は顔をしかめて吐き捨てた。

「絶望的な状況になればなるほど、人は英雄を求めます。千の人望はすでにこの北陸で豪千を遙かに凌いでいます。見目麗しい若い娘ですしね。鬼のように強いです。私ですら時たま魅入られそうになりますし」

うふふつ、と笑って、

「私みたいな小娘一人でも雷怨寺家をほぼ掌握できました。さて、これで千が動けば一体どんなことが出来るのでしょうか？ 楽しみですわ。その前哨戦として、まず手始めにこの北陸をこっそりいただくことにしましょうか」

神楽はひとしきり笑ってから、斑尾に背を向けた。

「ではそう言うことでお父様。これだけはしゃいでも誰も来ないと言うことで、お父様も現状を良く理解してくださいと思ひますが、大人しくして下さいませ。べつに騒いでもかまいませんが。喉が渇きますことよ」

「待て神楽！」

「待てません。織田だろうが糞だろうが私の許可無くこの北陸を踏み荒らすことは何人たりとも許しません。軽く懲らしめてきますので後ほどまた会いましょう」

「きさまは、家の者をみちずれにする気か！？」

去っていく神楽とその取り巻きたちを斑尾は呆然と見つめていた。誰もいなくなり、涙を流した。

「うつく。……千寿子」

りーん、りーんと虫が鳴いていた。

決戦へ

当然のことだが、斑尾が居なくなつたからといって、九狸艦隊の指揮権が神楽に移るわけではない。

斑尾を首尾良く拉致した神楽は、空が白み始めるのを待つて、各艦隊の指揮官たちに、密使を送つた。

『斑尾が置き手紙を残して、姿を隠した』

その報告を受けて、青波兎粹。北玉雅秀。一尾長親。牛舌伸常。韋駄小六が、鬼狸号に内々に集結する。

術葉衆で、もっとも斑尾の信任が厚かつたのは、斑尾の一才年下、九狸千寿子の実兄、猫勺宗一だった。神楽の工作が発覚してから抜擢された、四人（枯葉衆と神楽たちは揶揄している）の中の一人だ。斑尾の参謀であり、斑尾に代わつて一軍を指揮することも多い。私利私欲なく融通の利かない人物であり、神楽とは対立関係にある。その猫勺宗一が異変を知つたのは、五人の家老が鬼狸号にやってきてからだ。

「斑尾様は、どこに？」

猫勺宗一が、執拗に神楽を問いただす。

「ですから、何度も申しているようにわたしに聴かれても困ります」神楽は少し拗ねたように顔を背ける。

「それに猫勺様。父の身边警護はわたしではなくあなた方、術葉衆にこそ責任があるのではございませんか？」

ぎりつと奥歯を鳴らし、猫勺宗一は腰の太刀に手を伸ばしかけ、

しかし思いとどまる。猫勺宗一は斑尾の副官として大きな権限を得ているが、その権限は斑尾が居てこそだった。身分だけなら今この中で猫勺宗一が最も低い。刀を抜けば、彼こそが手打ちにされる。

決戦の出立を直前に迎えた鬼狸号の一室。

五人の家老格が難しい顔で、二人の会話を聞いている。

その中の一人、青波吐息が、直ぐにでも猫勺宗一を斬れる位置で、腰の太刀に手を伸ばしていた。猫勺宗一は一步、神楽から距離を取った。

斑尾の置き手紙には、『外せない用事が出来た。後は神楽に任せろ』と書かれていた。

もちろん偽書だ。偽書以外あり得ない。

斑尾の警備に当たっていた三人の術葉衆が、行方不明になっている。さらに神楽の監視を行っていた二人の侍も——こちらは術葉衆ではない——姿が見えない。

斑尾失踪に、九狸神楽が絡んでいるのは、明らかすぎるほどだ。しかもこの九狸艦隊には九人の家老が参陣しているが、神楽は五人だけに使いを出している。残り四人、神楽は都合の悪い人物をここに呼んでいない。

計画的な謀反である。

ただし、証拠はない。警護できなかった猫勺宗一にも責任がある。そして、時期が悪い。

「今は家中で争っているときではありません」

いけしゃあしゃあと神楽が言う。

「今日の内にも、九狸家の命運をかけた一戦が始まります。引き返すことは出来ません。何故なら私たちの九狸城が、大切な家族の住まう九狸城が敵の軍勢によって攻められているからです。まずはとにかく織田、温犬、紅蟹の力を借りて、城を開放することが先決です。父が何を思い姿を隠したのか、其れを考えるのは戦に勝利してからにしましょう」

一座を見回してから、

「早急に、父に代わって指揮を執る者を決めねばなりませんね」

斑尾の実子である、九狸神楽か。

斑尾の右腕である、猫勺宗一か。

九狸家で、本家の次に大きな軍勢を率いる一尾長親か。

家格で選ぶなら、平安から続く名家の、北玉雅秀も候補となる。

一時的にも代役が務まるのは、この四人だけだ。しかし、神楽は女性であり、軍事の実績もなければついこないだまで九狸と絶縁状態にあった。猫勺宗一は一九年間、斑尾に仕えていて、戦の差配には定評がある。が、下級武士の出身である。神楽も含め、血筋のしつかりした此処にいる五人の家老とは、仲が良くない。

必然、この場で選ばれるとしたら、一尾か北玉が妥当になる。

神楽は、

「わたしは、猫勺様を推薦します」

場に、戸惑いの空気が広がった。唸った家老もいる。

「父の不在は出来るだけ、秘さねば為りません。此処におられる家老の方々が部隊を離れ、鬼狸号で全軍を指揮しては、兵たちも不審に思うでしょう。わたしが、父の手紙にあるよう、父になりかわって御座に座ります。そして指揮は猫勺様に執っていただきますよう。これなら、父が居た時とそれほど違いありません」

大違いではあるが、他の誰かが指揮を執るよりは、確かに移動は少なくなる。

「それともう一つ」

神楽が懷に手を入れ、そこから手紙を取り出した。

「千が九狸城から出て、雷怨寺と合流しました」

家老衆がざわつく。

その手紙を神楽から受け取り、北玉雅秀が食い入るように見つめる。

「尾張に尻尾を振る負け犬どもめ。

覚悟しろ。

天下はこの北陸の豪千姫が、平定する。

千

宣戦布告だ。

「父の不在も含めて、千のことも、内密に願います。このことを兵が知れば、きっと動揺しますから」

当然、此処にいる者たちを動揺させるために用意した手紙である。特にこの手紙を前にして、北玉雅秀の動揺は大きかった。北玉は、北陸では珍しい公家の血の混じった名家であり、血筋の劣る者には尊大に、しかし上流には卑屈なまでにこびる癖があった。彼は、帝や京の上流階級とも懇意な千を、熱烈なまでに信奉していた。

青波兔粹、牛舌伸常の二人が、神楽の案に素早く賛同を示した。

北玉雅秀は、不服ながらと前おいた上で、「それしかあるまい」と了承した。一尾長親が渋ったが、韋駄小六と共に説得に応じた。九狸軍は、猫勺宗一が指揮することになった。

出立を前に、前田利長と三公、最後の評定が開かれた。

九狸斑尾が病気により列席できない。

代役としてやってきた北玉雅秀からそのことを聴いて、二公と利長は顔を見合わせた。

北玉雅秀は、九狸の現状を言葉を尽くして説明する。

斑尾の指示により、御座には神楽が座り、戦の差配は、猫勺宗一が執る。家老の統制は取れており、問題なく、部隊を運用できる。

今更引き返せば、全軍に動揺が走る。その状況で九狸城が落とされれば、雷怨寺は息を吹き返しかねない。そうなれば、織田の援軍なしに北陸を平定することはままなくなる。

九狸のみならず、二公にとっても甚だ困ったことになる。

二公は心の奥に沸いた疑心を封じ込め、北玉雅秀の言を信じたことにして、頷いた。

ただし、前田利長は別だった。

「今日や明日、九狸城が落ちることもないでしょう。九狸公が復讐なされてから押し出しても遅くはありますまい。まず、九狸公とお会いしたい。病状のお見舞いもかねて、これから九狸公の船に場を移して、評定を再開しようではありませんか？」

にこやかに言って、前田利長が席を立つ。

北玉雅秀が青くなる。俯いたまま、立とうとはしない。

二公も押し黙ったままだ。

前田利長が、これ見よがしのため息を吐いて、座る。

「九狸公に、何かあったのですか？」

しばらく口を閉ざしていたが、促されるままに、北玉は訥々と説明する。聴かれていない千姫のことは伏せ、斑尾の行方不明と、その後、九狸で為された会話のみを伝える。

評定の場に、重い沈黙が流れる。

「九狸公を探しましょう。数日探して、何一つ手がかりが得られないようなら、その時、はつきりと九狸家の序列を決め直していただいて、戦をするのか、引き返すのか、もう一度集まり、話し合うことと致しませんか？」

せめて九狸家中が本当に纏まっているのか、その確認が出来なければ、前田利長としては安心できない。

結論が出かかる寸前、偵察船から報告が入る。

雷怨寺の艦隊が、九狸城の包囲を解いて、攻め寄せてくる。

一刻ほどで、この室戸湾に到着する。

前田利長は、舌打ちしかけ、慌てて造り笑顔を浮かべる。

向こうから仕掛けてくるなら、受けざるを得ない。

「仕方ありませんね。九狸公は、雷怨寺を蹴散らしてから、ゆっくりとお探することに致しましょう」

室戸沖の決戦

九狸の艦隊を中央に、左に紅蟹、右に温犬が鶴翼で布陣している。それに対して、雷怨寺、笹雉の艦隊は、魚鱗の陣で受けて立った。二倍する敵を相手に混戦となれば、一溜まりもない。

出来るだけ接する面を少なくし、連携を取りながら敵と当たる以外にない。

大船同士の砲戦が始まり、次に中型や小型船の船団同士の艦隊戦に移行する。

緒戦は、ごく静かに開始された。

九狸の足並みが乱れていた。雷怨寺の艦隊を取り囲みながら、まるで攻撃に参加しようとしていない艦隊がある。必然、その両隣の艦隊も突出するわけに行かず、九狸全軍でちくはぐな動きとなっている。そして中央の九狸がそんな様であるから、左右を任された紅蟹、温犬の部隊も穏やかな攻撃に徹している。

猫勺宗一は戦が始まって早々、歯ぎしりした。

戦の采配は、太鼓やホラ貝、手旗などを使い分けて、各船団に届けられる。

一つの船団のみなら、それで事足りるが、しかし艦隊ごとに緻密な役割を与えるためにも、または意見や情報を交換するためにも、人を派遣する必要がある。

その役割は、一五人の術葉衆が担当していたが、しかし今は斑尾の警護に当たっていた三人が、斑尾と共に行方不明だ。総指揮を執る猫勺宗一も、本船を離れられない。残る術葉衆は、一人。

それで九狸全軍の指揮と、紅蟹、温犬、織田同盟軍との連絡をこなさねばならない。

いまさら人数を補うことも出来ない。出自のしっかりした術葉衆だからこそ、斑尾の指示として、効力を発揮する。斑尾の失踪を知らない五人の家老はもとより、知っている四人の家老とて、猫勺宗一が即席で用意した身分の低い使いなど、歯牙にも掛けないだろう。それ以前に、すでに一尾長親は猫勺の指示と違う行動を取り、北玉と青波は戦闘に参加しようとしていない。時間が足りなかった。家老衆と話し合い、意思統一を図るには、あまりにも時間がなさ過ぎた。

それでも最善を目指して差配しなければならない。

闘っている一尾と、海域を離れて傍観している北玉は、この際放置して問題ない。

が、青波だけは捨て置けない。

青波艦隊は、雷怨寺包囲網の一面を形成しながら、動くとしていないのだ。青波艦隊が障害物となり、九狸家の連携が絶たれ、敵を楽にしている。

猫勺宗一は、術葉衆の一人を、青波艦隊へと送り出した。

何があなたが指揮を執れた。

猫勺宗一は、忌々し気に神楽を見上げた。

九狸家の指揮系統は、始まる前に破綻していた。

その上、猫勺宗一は、同乗する九狸神楽も警戒しなければならなかった。太鼓や手旗、ホラ貝などが彼女に奪われてしまうと、九狸軍の指揮系統は完全に崩壊する。せめてそれだけは守らなければならない。

鬼狸号の艦橋は、異様な雰囲気包まれていた。

本船自らが戦いに加われるような状況ではなく、自然、本船を守る主力艦隊も動けない。

猫勺宗一が、忌々しそうに神楽を見上げた。

悪戦苦闘する猫勺宗一に、神楽は御座の上から笑いかけた。猫勺宗一は、視線など最初から合っていなかったという態度で、顔を逸らした。

神楽の微笑みがより大きくなる。

御座に座る神楽の周りを、三十数人の侍が警護していた。

その半数は、元からのこの舟の乗員であり、残り半数は、神楽が雇っている笹雉に連なる武芸者たちだった。もはやここに来て己の野心を隠す必要はない。自らの身を守るため、そして猫勺宗一に圧力を掛けるために、堂々と振る舞えばいい。

五年間、この日のためにじつくりと煮込みに煮込んできた。

ここまでは、神楽の思惑通りに進んでいる。

ただし、ここから先は未知数だ。やるべきことはやり終わり、後は結果を待つだけだ。

千がどの程度、縞馬を引き連れてこれるかも未知数だが、縞馬党の実力も未知数。

神楽は、縞馬党が雷怨寺軍を蹴散らす様を縞馬の海域で目撃していたが、それはあくまで特殊な海域での勝利だ。大海原での縞馬党はさて、いかほどののか。

雷怨寺家の結束も、未知数だ。縞馬党が到着する前に崩壊するようだと、どうにもならない。

ここから先は、策謀家よりも将士の役割が大きくなる。

これで勝てない弱兵たちなら、どうせこの後の織田侵攻には耐えられない。

後は野となれ山となれだ。

神楽は御座にどっしりと座り、自らが張り巡らせた策謀の結果を、微笑んで見守る。

術葉衆を送り出してから、四半刻が経った。まだ、青波艦隊に動きはない。

それどころか、送り出した術葉衆が帰ってこない。戦のさなかだ。嫌な予感がするが、しかし不測の事態は常に起こりえる。猫勺宗一は、五人の警護を付けて、もう一人、術葉衆を青波艦隊に派遣する。

それから四半刻。

ゆつくりと青波艦隊が動き始めた。

ただし、敵に向かつてではなく、下がり始めた。戦線を離脱し、紅蟹の側面へと移動して、停止した。

猫勺宗一はもう一度、神楽を睨み上げた。

青波家の当主、青波兎粹は、家督を継いでまだ半年の若輩で、歳は神楽と同じ一七歳。神楽と同日に雷怨寺家に人質として差し出された、かつての『雷怨寺家の子供たち』の一人だ。彼のこの行動に九狸神楽が関わっていないはずがない。

青波艦隊に送り出した術葉衆は二人とも帰ってこない。二人とも青波吐息と比較的に懇意な者を選んでいるため、まさか殺されては居ないだろうが………これ以上青波に送っても無意味だろう。

猫勺宗一は残り九人の術葉衆から五人を選び、各艦隊に派遣する。青波の空いた穴に、別の艦隊を差し向ける。それと同時に、主力艦隊を形成する一軍を切り放して、青波の艦隊に備えさせる。

青波はまだ紅蟹に攻撃を加えたわけではない。その素振りも見せては居ない。

が、何時その暴挙に出るか分からない。家老衆の中でも艦隊規模

の小さい青波一つが暴れたところで何ほどのことはないが、備えを欠くわけにはいかない。

小松沖での戦争と同じく、織田艦隊は傍観だった。

それは三公との約束でもあり、互いに都合の良い形だった。

前田利長は不愉快だった。

戦が始まって一刻。

竜武士団同士の一騎打ちも、あちこちで見られ始めている。

ただ、全体として戦争は停滞している。

中央を任せた九狸の艦隊が、ぎくしゃくしているせいだ。

九狸家の家中に、織田に寝返ったことを、不満に思う者がいるのは間違いない。その者が、九狸斑尾の失踪にも関与している。

あり得ることではある。あり得ない方がおかしい。

利で考えれば織田に寝返るのが得策だが、しかし人は利だけでは動かない。一向宗のような特殊な例を除いても、戦国の世は常に利を度外視した人の心に翻弄されてきた。

織田信長が戦国の世にその名を轟かせた桶狭間の戦いからして、無謀への挑戦だ。文化の違う他地域への侵攻では、この手の反発には必ず遭遇する。織田が京を押さえてからも、浅井に荒木に松永など、時勢の見えない裏切り者は幾らでも湧いてくる。

都から遠く離れた北陸で、ふて腐れる者が出るくらい、想定内の枠内だった。

が、それでも不愉快だった。

紅蟹が差し出す人質の代わりに、前田利長は紅蟹の小松城に入り、支援物資を届けた。

紅蟹の気が変われば、命のない危険な務めだった。

九狸と温犬の裏切りもそうだ。あれが雷怨寺家の罠なら、のこの

こと沖合で海戦を受けて立った前田利長たちは、容易く殲滅されていた。

それを覚悟の上、自らの命と得られる勝利を天秤に掛けて、前田利長は決死の思いで挑んだのだ。そして、完全な勝利を得た。思った。

未だにその勝利は手のひらの上にある。……あるはずだ。

二倍する規模で、三公の艦隊が、雷怨寺艦隊を取り囲んでいる。

三公の動きは鈍いが、しかし数で勝る以上、小細工は必要ない。力業で押しつぶせばいい。

それに万が一、三公が破れたとしても、所詮は北陸勢のつぶし合いだ。前田利長にとって、織田家にとって何一つ損はない。同士討ちでぼろぼろになった北陸を織田の軍勢で刈り取ればいい。こちらの方が織田家にとっては益があるくらいで、きっと柴田勝家も喜ぶだろう。

それでも、不愉快だった。

思い返してみれば、幾つもの選択肢があったようで、全てを適切に選んできたようで、何一つ前田利長には選ぶ権利が与えられていなかった。小松沖での勝利から、何一つ、やりたいように出来ていない。ずっと、流されている。

それが不愉快で、そして、胸の奥から不安が湧いてくる。

その不安を裏付ける存在が、水平線から姿を現してくる。

千の率いる、縞馬党である。

室戸沖の決戦、その二

見晴らしの良い、大海原だ。

一二〇〇騎になる縞馬党の接近は、早い段階で三公軍の知るところとなる。

元々、二倍近い戦力の開きがあり、三公の部隊には余裕があった。紅蟹の艦隊が、船足の速い小早と、竜武士を中心として、迎撃体制を整えた。

海面を切り裂き疾駆する竜は、瀑布のような水しぶきを跳ね上げる。それは乗り手を敵の目から隠す煙幕の役割も果たすし、矢玉を防ぐ盾の役目も果たしてくれる。『竜の衣』と呼ばれる効果だ。ただし、未熟な乗り手はその瀑布を自らが浴びて、海に落とされる。

『竜の試練』となる。

敵陣へと向かい、千の乗る千柳が加速する。

千を包む、水の衣が羽ばたくように広がる。

見る見るうちに、火六夜たち若い縞馬は、引き離されていく。

「ちよっ！ はっ、はい！」

焦る火六夜たちを置き去りにする。火六夜の横を、

「ぐわっははははははっ」

縞馬火矛蔵が追い抜いていく。盛大に頭から水を浴びながら、大口開けた口の中に流れ込む波を噛み砕きながら、

「続け続けー！ 小娘なんぞに後れをとるなやあー！ー」

瀑布のようなしぶきの中を、歴戦の縞馬党が突撃していく。

単身、一騎駆けの状況となった千は、小早や関船を無視して、二〇騎編隊の竜武士の一団に突撃する。その後ろで、縞馬火矛蔵の号

令で、縞馬党が散開して布陣していく。

「九狸千、参る！」

大声で宣言して、竜武士団の先頭、鎧の上から羽織をはおった壮年の竜武士に打ち掛かっていく。

千が手にした得物は、普段慣れしたんだ競技用の棒だった。

刃先のない棒を使うのは、神楽の指示だ。神楽は千の竜技を見知っていて、その弱点も把握していた。もちろん千も、自覚している弱みだ。

千は穂先の付いた槍を扱い慣れていない、ということだ。

千が竜技を使い穂先のある槍で突けば、竜鱗の鎧など容易く貫通してしまう。足場のない海の上で、そうなった槍を引き抜くのは至難の業だ。少なくとも、千はそんな技術を持たない。

その上、人を殺し慣れていない。疾うに覚悟は決めているつもりでも、戦場で血にまみれたとき、どのような心理状態になるか、千自身も予測できない。

ただし神楽は言葉を選んだ。

千が負い目を感じず、納得して胸を張って戦えるように。

「殺すことが目的ではありません。戦に勝つことが目的です。戦に勝てば北陸は統一されて、彼らは雷怨寺の兵となります。ですから、叩きのめすだけで十分。それに相手を斬り殺すよりも、盛大に吹き飛ばす方が視覚的效果もより大きいでしょう。派手に、やってください」

千の竜技が一閃。

壮年の竜武士が槍で受ける。

突撃の威力、千柳の体重、波の力、全てを竜技に寄せ。

迷いなく、千は振り抜いた。

近隣の戦域から、声が消えた。

誰もが、空を見上げる。

三間を越す高さに、竜武士が打ち上げられていた。

長い滞空の後に、壮年の竜武士が海中に没する。

水しぶきが飛び散る。

千はその場にいる竜武士たちを見回した。

せいぜい派手に、暴れてやる。

ずいっと竜技用の棒を水平に向け、すうつと息を吸い、大音声。

「さあ来い、おまえら！　千姫主催の竜技会！　遠慮無用、好きなだけぶちのめされる！」

「うわっははははははははっ」

縞馬火矛蔵たちが、暴れ回る。

突っかかってくる竜武士は払いのけるが、彼らの標的は、戦船だ。千は船を相手にする戦を知らない。しかし縞馬党は熟知している。だから、千を竜武士にのみ専念させて、船の相手は縞馬党が受け持つ、船は千に近づけさせない。ごく自然に縞馬党はそれを実践していた。

『豪千』と大書された陣羽織を纏った千を中心に、縞馬党の支配域が構築されている。

鎧の上から羽織を羽織るのは、特に竜武士にとっては、名のある武将の証である。しかし、縞馬党は、火矛蔵も含めて誰一人として羽織を纏っていない。

「邪魔になる」からだ。

当然、そんな縞馬党は旗指物なども使わない。縞馬部隊の識別は、薄汚れた鎧に描かれた、伝説上の獣、『死魔』の紋様が有るかなしだ。

数騎の縞馬党が、連携を取りながら、小早舟を沈めていく。

小早は比較的小さな船だが、それでも戦船だ。五人から十人ほど乗っている。それらが、弓や鉄砲、槍で武装している。真っ向一騎の突撃は、自殺行為に他ならない。

縞馬たちは、敵に狙いを定めさせないよう縦横に動きながら、竜上から弓を射掛ける。かと思うと、十騎近い縞馬党が一斉に突撃する。

矢玉が当たらないよう、喫水線に沈むように身を低くしたり、時には水中を進むこともある。

死角から接近した縞馬党が、小早の真横や真下を挑発するように疾走した。

それだけで、船は波に煽られ揺れに揺れる。体勢を崩した舟上の侍に、他の縞馬党たちが一気に近寄り槍を突き出していく。

縞馬党が得意としている小早殺した。

戦というより、狼の狩りに近い。

侍の中でも竜武士は特に誉れを尊び、一騎駆けや一騎打ちを好むが、縞馬党は武士でなく、海賊である。個々人の強さや飼育する竜の多さも北陸随一だが、勇猛にして慎重な集団連携、それが縞馬党が北陸最強の海竜軍団である最大の理由だった。

北陸最強の海竜乗りでありながら、縞馬火矛蔵が「竜王」と呼ばれず「海賊王」と侮蔑され恐れられるのも、この「狩り」に理由がある。

縞馬党に守られながら、姫竜王が、次々と紅蟹の竜武士たちを、空へと打ち上げていく。

一二〇〇騎の縞馬党を遠目に、前田利長は口元を皮肉に歪める。

「あれが、縞馬か」

あれがおそらく雷怨寺の切り札だろう。

紅蟹の一角が、完全に壊されている。

恐ろしい破壊力だ。無地の布に染料が染みていくように、竜の軍団が海域に広がっていく。大型の安宅船にまで挑み、その航行能力

を奪っていく。

だが、問題はない。

竜武士の強さは、機動力にある。

その機動力によって、数的優位を生み出し、一気に標的を襲撃する。船に取り付き、舵や櫓を壊し、陣形を破壊する。

ただし、それだけで戦場を支配できるわけではない。

竜武士がこじ開けた穴を蹂躪する艦隊が無ければ意味はない。それがあって初めて竜武士の打撃は意味を成す。これだけ両軍の艦隊数に差があれば、竜武士がかき回したところで意味はない。厚みによって押しつぶされるだけだ。

しかし、縞馬党と紅蟹の交戦から、戦の様相ががらりと変わり始めていた。

一人の人物の名が、海上を吹き荒れていく。

その名が織田の艦隊まで、届いた。

「千姫——竜王だと！」

前田利長は、床几から立ち上がり、叫ぶ。

それからの動きは、前田利長にとっては悪夢だった。

派遣した術葉衆は、まだ一人しか帰ってきていない。今、鬼狸号に残っている術葉衆は、五人だけだ。

猫勺宗一は、天を仰いだ。

縞馬党の登場に合わせて、青波の艦隊が、紅蟹へと攻撃を加え始めた。

「あなたの、差し金ですか？」

猫勺宗一は九狸神楽に向かい、問うた。

「もちろん」

かぐやが微笑んだ。

「わたし以外に誰が居るのですか」

「あなたは、九狸家を滅ぼすつもりですか!？」

猫勺宗一は声を荒げる。

縞馬が加わり、青波が寝返ったところで、三公の艦隊と、雷怨寺を中心とする艦隊とでは、まだ規模に開きがある。三公の損害が大きくなるだけで、勝敗は変わらない。

それ以前にどちらが勝とうとも、

「このままでは勝敗の如何に関わらず九狸家は滅びますぞ!？」

斑尾が居なくなり、千姫が縞馬党を率いて雷怨寺に味方した。九狸艦隊の一角で、寝返りが生まれ、指揮系統もずたずただ。

たとえ勝てても、九狸家はお終いだ。これだけの醜態を繰り返せば、もう織田は九狸の価値を認めない。

九狸に従う家老たちも、九狸家に力があるから従っていたただけだ。斑尾の居ない九狸になど義理もない。みんな離れていくだろう。

神楽は、我が意を得たりと言わんばかりに、微笑んだ。

「確かに、このまま織田に与していたところで、九狸家に未来はないでしょう」

「……」

「ですが、九狸が一丸となって、反転すれば、」

「反転しても同じだ。すでに我々は一度雷怨寺に背いている。雷怨寺家が、」

「おっほほほほっ」

と神楽は芝居じみた笑い声で、宗一の言葉を遮った。

「受け入れるはずはないと、仰るのですか？」

猫勺宗一は、小さく頷いた。

神楽は口元を歪めた。

「ご冗談を。もうすでにお解りでしょう。お解りだからこそ、わたしに尋ねたはずです。わたしは、雷怨寺家と通じています」

「……」

「さあ決断なさい。安全圏で高みの見物を決め込んでいるつもりの

織田艦隊は、間抜けにも九狸^{わたしたち}主力艦隊の、直ぐ後ろにいます。いま反転すれば、織田の先遣隊を私たちが討つことが出来ます。大手柄、ですわよ？」

小首を傾げてみせる。

「……」

「九狸家が生き残るには、もはやそれしか道は残されておりません」
優しく、いたわるように神楽が言う。

「さあ、決断しなさい」

ぎりつと猫勺宗一が歯ぎしりする。

猫勺宗一が躊躇するその僅かな間にも、九狸の艦隊に異変が起る。

九狸千が縞馬を率いて、紅蟹を襲っている。

「どういうことだ！」

斑尾の不在を知らされていない九狸家家老の一人、豊里規丞は声を荒げた。

豊里は、鶴翼の一角を形成して、雷怨寺の艦隊と鉾を交えていた。元々がつい最近まで主家と仰いでいた雷怨寺家との戦争だ。怨敵たる織田の軍門に下り、雷怨寺を攻める現状を楽しく思っている者など居はしない。

そこに、縞馬を率いて千姫が敵として現れた。

彼の艦隊は、及び腰となっていた。

そこに、指令が届く。

「斑尾様からの厳命です。我らが姫を討たせるな。雷怨寺の包囲を解いて、千姫さまに続け。紅蟹を打てと」

それを伝えたのは、斑尾と共に行方不明となっていたはずの術葉衆の一人だった。

神楽の狐であり、斑尾を拉致した後、この時のために、協力者に匿われてこの艦隊に潜伏していた。

「斑尾様から下命です。我らが姫を討たせるな！ 紅蟹艦隊の腹背を突け！」

術葉衆の中で神楽に協力する者は四人。
行方不明となっていた二人と、猫勺宗一の指令を受けたまま、帰還しなかった二人。

その四人が、斑尾失踪を知らされていない家老たちに、寝返りの指令を吹き込んでいく。

「我らが姫に続け！」

その声が九狸艦隊のあちこちから上がっていた。始めは狐たちだが、次第に他の者たちにも伝播していく。

九狸艦隊の動きが鈍る。雷怨寺への攻撃が中断していく。
竜武士を中心に、縞馬へと合流する者が出始めた。

雷怨寺艦隊の最前線で、有馬国清が叫ぶ。

「九狸は放っておけ！ 縞馬の開けた紅蟹の穴に突撃せよ！ 縞馬に続け！ 雷怨寺家をなめさせるな！ 縞馬にも、紅蟹にも！ 雷怨寺をなめさせるな！ 死兵となってぶち破れ！」

動かなくなった九狸の前を悠々と通り過ぎ、雷怨寺艦隊が紅蟹に突撃する。

縞馬がこじあけ、雷怨寺がぶち破る。
かつて北陸を制した豪千公が、もつとも得意とした戦法だ。

「来たか。千」

帆柱の上で温犬虎狼は、どう猛な笑みを浮かべた。

毘沙門天号と名付けられた虎狼の乗船は、八〇挺艦の大船だ。その太い帆柱には階段が取り付けられて、物見櫓の役割を果たしていた。

温犬虎狼の部隊は、後詰めであり、まだ戦に参加していなかった。虎狼が物見櫓を駆け下りる。

「お待ちください！ 若！」

お目付役の大崎影沖が、すがりつく。

虎狼はそれを振りほどき、淡々と出撃の準備を進める。

「じいさん。親父に使いを出せ」

「…… なんと？」

「隠居しろ。それで丸く収まる」

「……」

老人は天を仰いだ。

温犬虎狼が九狸神楽と通じていることは、うすうす理解していた。そして現状、戦の風向きが変わったことも、肌で感じられる。

「行くぜ！ お前ら！ 俺たちの時代だ！」

「…… おう……！！！！！！！！！！」

虎狼の部隊が、海に身を投げる。

大崎影沖が声を振り絞る。

「やむを得ん！ 若を孤立させるな！ 若に続け！」

右翼の温犬で、温犬虎狼の部隊が、織田に向かい進軍を始めた。九狸家でも、二家老の部隊が紅蟹に食らいつき始めた。

それに後れて、北玉の艦隊が織田の艦隊を目指す。

両陣営の戦力比では、まだ僅かに雷怨寺家が勝る程度だった。ただし、勢いが違う。

縞馬の攻撃を受け、同盟軍から不意を打たれ、さらには雷怨寺の突撃を受けた紅蟹の艦隊は、辛うじて耐えてはいるが、崩壊し掛かっている。

未だ寝返りまで至らない九狸の家老衆も、雷怨寺への攻撃を中断し、迷い始めている。

温犬虎狼が裏切った温犬も、浮き足立っている。

事此所にいたり、猫勺宗一が指示を出す。

「織田艦隊を攻める！ 転進せよ！」

主力艦隊が、回旋し、織田へと牙をむく。

鬼狸号から、残った術葉衆が、状況に戸惑い立ちすくむ家老の船へと、送り出されていく。

九狸が反転して、攻め寄せてくる。温犬からも一部隊が迫ってくる。

前田利長が床几から立ち上がり、手にした采配を甲板に叩き付けた。

「ふざけるなっ！」

織田の先遣隊は、五〇隻でしかない。

九狸艦隊だけでも四〇〇隻だ。

戦って勝てるはずもないし、戦っている場合でもない。今にも紅

蟹の艦隊は崩壊し掛かっている。

「撤退だ！」

逃げる織田の後背を、九狸主力艦隊が追撃する。

二隻、三隻、四隻と、航行能力を奪われ、織田の船が立ち往生していく。

「なかなか良い逃げっぷりです」

神楽が褒める。

「これ以上追っても仕方ないでしょう」

父から訊いた話では、織田の先遣隊を率いるのは、前田利長だ。

討ったところでそれほど意味はない。それよりも、

「温犬公を逃がさないように、温犬の退路を断ちましょう。それと、温犬公に使いを出しなさい。降伏して家督を虎狼に譲れば、多少の金銭ですべて水に流して、本領の七割を保証すると。雷怨寺家の了承も得ています。雷怨寺家の軍師、九狸神楽が保証します。北陸は雷怨寺夢幻の元、新しい形で一つになります」

織田の先遣隊が逃げていく。

それがまた紅蟹艦隊の崩壊を速めた。

紅蟹の船は降伏したり、撤退したりと散り散りになり始めている。

「殿！ これ以上の戦闘は無意味です！ 撤退を！」

温犬の艦隊は、それほど損傷していない。蚊帳の外だった。が、この状況ではもはや勝ち目はない。縞馬も加わった雷怨寺、笹雉、九狸と戦う力はさすがにない。

「白旗をあげなさい」

「しかし！」

温犬公は首を横に振った。

「駄目じゃ。此所で落ちれば我が領土に飛び火する」

温犬領に逃げ帰れば、雷怨寺が追ってくる。勝ち目のない戦に、臣下人民を巻き込むことになる。

「では、織田に！」

「無駄じゃ。こんな様で織田に落ち延びたとて、ろくな老後はおくれやせんさ」

肩身の狭い思いをしながら、北陸侵攻の最前線に立たされるのは間違いない。

「馬鹿息子が向こう側に付いたのが、せめてもの救いか。出来る限り、残せる船は残してやろう。お前たちにはあの馬鹿の面倒を頼んだぞ。悪逆非道な狸姉妹に苛められぬよう、支えてやってくれ」

悪逆非道と言うところに、自然と力が入った。

「殿！」

温犬公の側近くに長く仕えた側近が、涙ぐむ。

たとえ降伏したとしても、雷怨寺を裏切った責任として、温犬公の死罪は間違いないだろう。

そこに、九狸からの使いが到着して、温犬公に神楽の伝言を伝える。

「委細承知。降伏いたそう」

温犬公は微笑み、返事した。

使いが去ってから苦笑する。

「物は言い様だな。降伏して家督を虎狼に譲れば、多少の金銭ですべて水に流して、本領の七割を保証するか」

言い換えれば、領土の3割を差し出して金も払え。その上、家督を譲った後の温犬公についての処遇には、触れられていない。そこは全く保証されていない。

「しかし本領が七割も保証されるのなら、降伏の条件として悪くな

い。それだけあれば、あの馬鹿息子も九狸姉妹に苛められずにすむ
だろう」

温犬公はにやりと笑った。

戦の後

神楽の望む最善に近い形で、雷怨寺家は勝利した。ただし、これで全てが円満に解決したわけではない。

四宿老家の内、三つまでが裏切ったのだ。

その裏切った九狸家、温犬家の誘いで、雷怨寺家を見限った武将も居る。

それを手当たり次第に罰して、穏便にすむはずがない。命がけの抵抗が容易に予想される。

「だからいつそ、雷怨寺夢幻の名において、全てを免罪しましょう」と、神楽は有馬国清に提案した。

九狸公と温犬公には隠居してもらう。

働かなかった者から船を没収し、働いた者に分け与える程度の裁量を行うが、それでお終いにする。

諸悪の根源である両公を生かすことによって、それ以下の者にも死罪や所領の没収など、重罰は行わない姿勢を示す。

当然、雷怨寺家の家老には、難色を示す者がいた。

しかし有馬国清が反対意見を押さえ込んだ。

「毒を喰らわば皿までだ！ 貴様に一任してやる！」

神楽には、是非とも必要な処置だった。

斑尾を死罪にすれば、神楽は親殺して家乗ったことになる。その悪評は後々までついて回るし、斑尾と仲の良かった九狸家家老衆は、より強く神楽を嫌い、警戒することになる。それこそ、何時どこで背かれるか分からない。

神楽は、命乞いの見返りとして、斑尾から正式に家督を譲り受け、体面を整えた。

ちなみに姿を消していた斑尾は、戦の最中、腹をこわして草むらにお世話になっていたことに……神楽によってされかけたところを何とか交渉して、過労によって倒れたことになっていた。

温犬家から没収する領土は二割となった。ただし紅蟹への再侵攻を終えた後には、論功行賞として返還されることが内々に決まっている。

もちろん、九狸家も温犬家と同額の金銭を雷怨寺家に支払った。所領も同じ程度没収され、同じように返還される予定だ。

縞馬党の当主。縞馬火矛蔵は、宿老の待遇を「くだらん」と拒否した。

雷怨寺夢幻や有馬国清との会談も、「会って話がないならそっちが来い」と拒絶した。もちろん、これは雷怨寺家も呑めない。

一応、両者の断絶は続いている。

ただし、雷怨寺家は、縞馬の戦力を欲しているし、敵に回したくない。縞馬も食料などの支援は欲しいし、織田が北陸に進出してくれば、討伐されることも理解している。互いに喧嘩したことには懲りていた。その状況での意地の張り合いだ。落としどころは幾らでもある。

雷怨寺家内部では、頭を下げてまで縞馬党と和解するつもりはないが、『千が集めてきた彼女の部隊』に、少し縞馬党が混じっている、黙認することとなった。

そんなわけで、縞馬党は、傭兵家業を始めることとなった。

雷怨寺家に随身する前、戦国初期から中期、北陸が幾つもの勢力に別れていた頃には傭兵として部隊を貸し出すことも多かったのだ。いわば昔の家業を復活させただけで、神楽に薦められたからではない、とは火矛蔵の言い分である。

唯一、割を食ったのは、紅蟹だ。

紅蟹公は捕らえられことなく、船上で自刃していた。そして紅蟹家は、完全に消滅することになる。広大な宿老家の領土は、切り取り次第、雷怨寺家に従った将士たちに配分されることになる。

特に重要な小松城には、有馬国清が入り、最前線で織田の侵攻に備えることになる。それと同時に、有馬国清は雷怨寺の家老から外れ、宿老の一人となる。雷怨寺家家老の三分の一が有馬家の傘下に移り、夢幻の元を去ることになった。

これらのことが、室戸沖の勝利から、わずか八日で決定していた。紅蟹への再侵攻も、艦隊の整備・再編と平行して、速やかに実行されている。

有馬国清が——嫌々な態度を示しながらも——神楽に協力的で、彼女の意思を尊重してくれた結果だ。

二人とも雷怨寺夢幻による北陸の統治を目指している。その上で、織田との徹底抗戦を目論む主戦派だ。感情的な反目さえ排除すれば、意外と息が合っていた。

それでも、八日でまとまったのは、大まかな概要でしかない。戦の後始末と、世代交代。織田に対する備えと、上杉や毛利との外交。全てに於いて詳細を煮詰め、実行していくのはこれからだ。雷怨寺家の軍師として、更には九狸家の新当主として、神楽の処理すべき仕事は、尽きることなく湧いてくるだろう。

戦の後、神楽にとって、予想外の評判が北陸で立ち始めていた。

「九狸神楽は、意外と親孝行娘」である。

神楽と対立していた九狸家、雷怨寺家の者たちが、特に率先してこの評価を口に出しているようだ。

死罪が当然の父、斑尾の命乞いをした、のは事実ではあるが、何

のことはない。

彼らは、理由が欲しいのだ。

室戸沖の勝利によって、神楽は九狸家の当主となり、さらには雷怨寺の家老衆を押さえて、軍師としての地位を確固たるものとした。編馬党や千、温犬虎狼とも強い繋がりがあり、支配下の海商を通して、毛利や上杉とも交流を持っている。

夢幻を中心とした新体制の中で、神楽の影響力は群を抜いている。神楽と対立していた者たちは、地位を保持するために彼女に取り入らねばならず、必死で褒めれるところを探した結果が、「意外と親孝行娘」なのである。

神楽は内心で苦笑しながらこの評判を神妙に受け入れた。

豪千公の実弟である有馬国清は、雷怨寺家中では絶対の支持を得ている。当主も夢幻から変更はない。

古くから『北陸の武侠』と称される武道の大家、笹雉家は、武家とはまた違う倫理で、強い統率力を誇っている。

温犬家も、旧温犬公が協力的であり、温犬虎狼への家督継承も含めて、円滑に進んでいる。問題かあるとすれば、隠そうともしない九狸家への反感が後々の火種になりかねないことくらいだ。

実のところ、雷怨寺家と三宿老家の中で、もっとも不安定なのが九狸家だった。

斑尾の政権は二三年続いていた。自然と、九狸家の重職には、斑尾と価値観の似通わせた者が多くなっている。その斑尾を追い落として跡を継ぐのが、「親孝行娘」ながらも対立著しかった神楽だ。些細な変更でも軋轢を生みかねないが、同じ理由で、改革は必要だ。神楽は雷怨寺家の軍師として、九狸家を離れることも多くなる。斑尾の構築した斑尾体制のままでは、とてもではないが治まるはずがない。

神楽とは折り合えない重職には、隠居して貰う必要がある。斑尾から遠ざけられていた人材の中で、登用したい傑物もいる。

九狸家では、家老がそれぞれの艦隊を所有し、指揮している。家

柄によって漠然とした序列はあるが、明確には定まっていない。全
て斑尾の指揮下に統率されて動いていたため、それでよかったが、
神楽には大艦隊の指揮経験がなく、斑尾と同じ事は出来ない。

かといって、斑尾の代わりが務まる人材も見あたらない。九狸家
一五家老の中には、九狸家の親族が三人いるが、どれも斑尾の腰巾
着で、小粒だ。海千山千の家老衆を統率することなど思いもよらな
い。

出来ればこの際だ。家柄ではなく、指揮能力に応じて艦隊を再編
してしまいたい。鉄は熱い内に打て。組織の改革は、戦の余韻が冷
める前に、混沌とした間に終わらせておく必要がある。

室戸沖の勝利から、十日後。

千の雷怨寺城到着を待つて、夢幻と千の結納を済ませ、いくつか
の重要な案件と日程を定めてから、神楽は、雷怨寺城を後にした。
満を持して、九狸城へと向かう。

千と夢幻の舟戦

姉の呼び出しを受けて、雷怨寺城にやってきた千は、健やかに疲労していた。

遊び疲れたが、大役を担った遊び疲れだった。

戦が終わってすぐ、姉の神楽は、雷怨寺艦隊に移動し、そのまま雷怨寺城に留まっていた。父の処遇も含めて雷怨寺家の方針が定まらなければ、その傘下の九狸家は何も決めれない。

その間、姉の代わりに、千は九狸城へ入城し、揺れ動く家中の統制に尽力した。

城の守兵たちには迷惑をかけたことを詫び、戦に参加した者たちには、全ての将兵が一丸となって新当主・神楽と千のために戦ったことに美辞麗句な感謝を伝え、そういうことにしてしまったから、手当たり次第、酒を振るまう。

その後に、竜技会だ。

全ての将兵が参加できたわけではないが、立ち替わり入れ替わる彼らの相手を、千は三日の間、務め続けた。千が率いる精鋭部隊の選考もひっそりと兼ねていた。

その次は、縞馬党だ。

報酬を縞馬島に運び入れて、酒盛りをしたり、漁をしたり、訓練に参加したりと、縞馬党の慰撫のために、此処でも最大限の努力を払った。

遊び疲れたように見えて、実に働き尽くめだ。
何と良くできた妹だろう。

雷怨寺城から突き出た半島の先に、さほど高くない望楼がある。
訓練の監視を行うために建てられた望楼だ。

千は今、火六夜と並んで、その望楼の上から訓練海域を眺めていた。

夢幻が竜に乗っている。

乗り慣れていないのだろう、竜との呼吸は合っていない。

手にした棒で、不格好に体制を整えることもある。

波に翻弄され、時たま吞まれて見えなくなることもある。

一騎打ちの竜戦で、相手は夜叉門正村だ。

向かっていつては叩き落とされ、また這い上がっては向かっていく。その繰り返しだ。

千は頬杖をつきながら、ぼんやりと呟いた。

「随分と痛めつけられてるなあ」

「教育係に就任したんだってね、正村」

「親衛隊長とも言っていたな。人数はまだ集まっていらないけど」
千が雷怨寺城に入城してから、四日が経っていた。

その間、訓練海域で正村にしごかれる夢幻を、何度となく目にしていた。十日ほど前から始まったらしい。

竜だけでなく、舟を使つての訓練も行っている。

ただし使われる船は、五挺艫の小早船や、たった一人でも櫓を漕げる小さな沿岸用漁船など、とても北陸の大君主に必要な訓練ではなかった。どちらかといえば一兵卒に相応しい状況だろう。

「顔つきがだいぶん変わったな」

「そう？」

火六夜が首をひねる。

「うん。昔はあんな顔だった」

顔というより、表情だ。生き生きしてきてる。

「夢幻の顔なんて覚えてないし」

「懐かしいね」

「それは認める」

眼前の光景を目に、火六夜も同意した。

子供時代に寺で頻繁に行った模擬戦も、十挺艫以下の小早舟か、

小さな漁船を使っていた。

もしかすると正村は、昔のことを思い出させるつもりなのかもしれない。

子供の頃の夢幻は、頑固だけでなく諦めが悪い餓鬼大将だった。落ち込むことも多かったが、立ち直りも早い。『雷怨寺の子供たち』の頭領として、無意味な自信と責任感、行動力を持っていた。

昼頃に、夢幻と正村が引き上げてきた。

千は、望楼の上に用意していた茶道具を広げ、菓子を振る舞う。その時に夢幻が言い出した。

まっすぐ千の瞳を見つめて、頭を下げた。

「千に相応しい男になるまで、千と並んで恥ずかしくない男に僕が成長するまで、二人の祝言を待ってもらいたい」

千は少し頬を染めて、目を泳がせてから、夢幻の瞳を見返した。

「私と並ぶ？ どうやって？」

口元に挑発的な揶揄を浮かべる。

室戸沖島の一戦。

すべてが姫竜王の武勲として、北陸中に浸透しつつある。

実際に活躍したのは縞馬だし、劣勢を耐えきったのは有馬の指揮する雷怨寺艦隊で、さらに戦に終止符を打ったのは、九狸の裏切りだ。

しかし戦の趨勢を決めた瞬間は、間違いなく千の登場にある。

戦場全域を辛うじて見渡せるのは、大船に乗った武将くらいだ。水主や、水面近くで激闘を繰り広げる戦士には、詳細な戦の推移を把握できる状況にない。彼らが知れるのは、千の名が戦場を駆けめぐり、わずかな間に戦がひっくり返った事実と、同僚の噂だけだ。

北陸武家の上層に流れる情報は別にして、下級武士から民衆に伝わる噂は、それに綺麗な飾りが追加されていく。

日本群島最強の姫竜王！

あの縞馬火矛蔵もひれ伏し、九狸家をなびかせた豪千姫の威光！
這々の体で織田の艦隊は北陸から逃げ出した！

雷怨寺豪千にしろ、武田信玄にしろ、英雄とは、座っているだけでも武名が轟いて行くが、千は竜に乗って自らも三十騎を超える竜武士を叩きのめしたのだ。噂は尾ひれが付いて、すでに百騎を超えている。

この千姫に、さてどうやって並ぶ？

千は瞳で夢幻に問いかける。

紅蟹の制圧は、どれほど誇張して喧伝しても、やはり勝って当たり前の戦で、千の名声とは比肩しようもない。

地道に北陸を統治しながら、織田の侵攻を食い止め続けていれば、夢幻も名君と呼ばれる日が来るだろうが、千の武名も今が終点ではない。これからが本番だ。

「そんなには待たせない。必ず、並んでみせる」

夢幻は、根拠のない自信を見せた。

千は、笑った。

「いいよ。待つ。ただし、」

すうつと、港に停泊している舟船を指さす。

「舟戦をしよう。それで私たちに勝てたら、いくらでも待ってやる」
「よし、ほえ面をかかしてやる」

言葉とは裏腹に、夢幻の顔は緊張で満たされていた。

千と夢幻の舟戦、その二

舟戦は、十人五舟でやり合うことに決まった。

その人数を集めねばならない。

幸いなことに、あてがある。

いったん夢幻たちと別れて、千と火六夜は、まず夢狸号を目指していた。

雷怨寺城の城下町には、北陸最大の繁華街や歓楽街が区割りされている。長く雷怨寺家と交戦していた縞馬党にとっては、久しぶりの外遊びの機会だ。夢狸号は、乗れるだけの縞馬党を、ぎゅうぎゅうに搭載してやって来ていた。自分たちで竜に乗って訪れた者たちも含めると、三百名近い縞馬がこの近辺にいるはずだ。彼らは夢狸号と千の用意した長屋に分散して気ままに寝泊まりしている。

「馬鹿だねえ」

火六夜が、からかう目線で千に笑いかける。

千も苦笑した。

「本当に、馬鹿だ」

夢幻と千との婚姻は、とんとん拍子で進んでいる。

両家の都合が優先された結果だ。

雷怨寺家が用意した山のような結納品は、姉の神楽がそのまま九狸城に持参していつてしまった。九狸家改革を優位に進めるための、政治的材料としての意味合いが強い。

北陸平定が一段落付いてから、内祝言を挙げ、本格的な祝いは、冬に入ってからになる。

そこまで決まっているのだ。

千も夢幻も、姉と家老衆の前で了承している。

待てと言われずともそれまではお預けだし、そこからは生半可な熱意で延期できるものではない。千が京に戻る意志を持たない以上、

この婚姻はすでに成立したも同然であり、あの姉を相手に、夢幻が言い含められるはずがない。

だいたい、千に相応しい男になるまで待つて欲しいは、告白とさほど変わらないというか、もう告白でしかない。

「ま、ちよつと遊んでやるのも、悪くはないさ」

千はにやけそうになる顔を引き締め、うそぶいた。

訓練海域に、双方の十名が整列する。

「まず最初に規則の確認をしよう」

「適当でいいよ。そんなの」

「いや、駄目だ。おまえらはしれつとやってしらばつくれるからな」
夜叉門正村の指摘。

「まあね。……もしかして、正村も参加する気か？」

夢幻の横に、正村が平然と並んでいた。

「いつまでも仲間はずれは可哀想だろ？ 奥方さま」

「自分で言うなよ。っていうか、奥方さまはやめろ」

千は釘を刺してから、

「じゃあ、奉行は誰がやる？」

姫竜王と北陸君主の舟戦だ。生半可な人物に裁けるとは思えない。

「不要だ」

夢幻がきつぱりと答える。

「みんなで判断すればいい。中途半端な結果なら引き分けにしよう」

約束事の確認を終えて、それぞれが同型の小舟に分乗する。

全長で二間半の、一人でも漁に出られる沿岸用の小さな漁舟だ。

その真ん中に、旗が立っている。この旗を奪われた舟は退場だ。大將舟の旗が奪われた時点で、敗北となる。今回は千か夢幻、大將が海に落ちて、敗北の規則が適用されることになった。この辺りは

その時々で決まりが変わってくる。

訓練海域の端と端に、両軍の舟が移動する。

「これはちよつと不利かも？」

「うん。かもな」

火六夜の指摘に、千は頷く。

夢幻の集めた仲間、夜叉門正村、八道寺、奥平、仁神、中窪と、夢幻も含めて六人がかつての『雷怨寺家の子供たち』で締められていた。この遊びを熟知した面子である。

特に正村がやっかいだ。

槍の名手で、笹雉流槍術の免許皆伝一步手前だが、それ以外の武芸も一通り嗜んでおり、千や火六夜では太刀打ちできない。

今回の白黒戦は、得物の使用や、蹴ったり殴ったりなどを禁止している——女のみ、男の背中と腹は蹴って良い——が、それでも正村の膂力は侮りがたい。なんせ銅製の鞘で野良竜を三匹も撲殺してしまうほどののだ。

あの男を止めれる者は、千の集めたこの中には居ない。

「竜戦では絶対に負けないんだけどね」

「そりゃね」

竜技なら千姫一人で無双できる。縞馬党のみでも勝てるだろう。

「でもま、簡単に負けるつもりはないさ。だろ？」

「もちろん」

火六夜が胸を張る。

縞馬党は、竜部隊のみで編成し行動することが多い。

しかし、舟戦の訓練も全員が積んでいる。銃の扱いにも精通している。かつては百挺艦を越える大船『死魔旨号』も所有していた。敵を知るためでもあり、実践を想定した訓練に活用されていた。規定された訓練を乗り越えた者のみが、戦に出ることが許される。息を合わしての戦闘は縞馬党のお家芸だし、火六夜が選んだ八人は、舟上での相撲で好成績を修める者たちだ。

「四舟飛び猿、開始四舟突撃。正村は後回しで、一隻ずつ落として

いく」

千の決めた作戦を、火六夜が仲間たちに解説していく。

「それが防がれたら大将舟に飛び猿、全舟で総突撃」
につ、と千が笑う。

反対側の海域で、夢幻たちも話し合っている。

「向こうは大将舟に千と火六夜が乗っていたな」

「火六夜は攻撃要員であり、守りには向いていない」

「となると、四舟飛び猿で来るよね？」

「火六夜が得意とする技だ」

あえて声に出すのは、正村は連れてきた四名の部下に聴かせるためだ。

「大将。作戦はどうする？」

「飛び猿なら捨て舟は無視。初見の相手が多い。堅実に、戦の推移にあわせて臨機応変でいこう」

夢幻の回答に、雷怨寺党の面々が頷く。各自、それぞれの同乗者の質問に答えていく。

千と火六夜以外の八人が、どんな人間か分からない。しかし千と火六夜は雷怨寺党の役割分担をほぼ正確に把握しているはずだ。不用意に動く足下をすくわれるおそれがある。

だからまずは守る。

守って相手を見る。

五舟全てに『白黒戦』を熟知しかつての雷怨寺党が分乗しているため、相手の作戦を確認してから最善を選択する余裕がある。逆に相手は、急な変化に対応しきれないはずだ。凌いでいけば、圧倒的に雷怨寺党が有利になる。

「さあ、行こう」

夢幻の合図に、各舟が前進する。

少し遅れて、千の五舟も動き出した。

両艦隊の距離が半分まで縮まった。

火六夜が、隣り合う三番舟に飛び移った。

そして、二番舟の男が、火六夜の代わりに、千の一番舟に移動する。四番舟の女が、二番舟に移る。一人乗りとなった四番舟は、船団から離れ、訓練海域の外周へと逃げていく。

実質的に一隻を捨てて、火六夜を余らし攻撃に専念させる。

夢幻たちが予想した、四舟飛び猿の戦術だ。

一隻に二人ずつの所属だが、舟を離れてもかまわない。

ただし最初に乗っていた舟の旗が取られた場合は、所属していた人間も失格となり、相手方が大きく三つを数えるまでに、海に飛び込まなければならぬ。

夢幻の五隻は、そのまま前進を続ける。

捨て舟は無視。最初に決めたとおりだ。

逃げる舟に追いついて乗り移り、旗を奪うのは容易ではない。その間、主戦場が劇的に不利になる。

一人舟を五隻で追い回す方法もあるが、その一隻を囷としながら残りの四隻が間に割って入ったり、横から襲撃してきたりで混戦になる。舟に舟をぶつけ合う密集戦は、『飛び猿』がもっとも活躍する環境だ。

「火六夜には二隻、他は一对一！」

簡潔に、夢幻が指示を出す。

夢幻の五隻は、大将舟を真ん中にして、五間ほどの間隔を開けて並んでいた。

そのうちの二隻が、火六夜の乗る三番舟を挟み込むように移動する。他の三隻は、それぞれ一定の間隔を開けて、一隻ずつを牽制する。

千が右手を挙げて、

「からす！」

特に意味はない。敵の何番舟を狙うか、即席で決めておいた符丁だ。

千の大將舟も含めた四隻が揃って敵の二番舟に猛然と漕ぎ寄せる。雷怨寺党の五隻は手慣れていてた。

指示を受けるまでもなく、奥平の三番舟が自軍二番舟と千軍二番舟の間に、仁神の四番舟が自軍二番と千軍五番の間に割って入った。
「五一！」

ここで夢幻の指示。

五番舟は敵の一番舟を攻めろ、という意味だ。

中窪の五番舟が、火六夜の三番舟を無視して千の乗る大將舟に挑み掛かる。夢幻の大將舟も、千の大將舟に向かう。

二隻に狙われ、慌てて千が後退する。旗を奪われても、千が海に落とされても敗北だ。

「五三！」

夢幻は深追いしなかった。中窪の五番舟を、火六夜の三番舟に差し向け直す。

これで、火六夜には二隻、他は一对一の形に戻ったことになる。

「やっぱそう甘くはないか」

初撃は難なくはじき返された。

その後二回、標的を変えて同様の攻撃を行ったがそれも捌かれている。

雷怨寺党は、完全に防御に徹していた。

こちらの弱いところをじっくり探っているのだろう。

十人五舟の必勝法は、いかにして数的有利を生み出すかに集約する。

一隻につき、二人乗っている基本体勢は、三人以上で同時に攻めれば、簡単に旗を奪うことができる。ただし、無理に三人も差し向ければ、こちらはそれ以上に守りの薄い舟が生まれてしまい、攻め立てられることになる。

一方的に勝負が決するのは、だいたいは櫓の操作を間違って流さ

れたり、味方が邪魔になつて戦闘に参加できない舟が生まれたときだ。

縞馬党の動きも悪くはないが、少し展開で遅れている。相手が複雑に動いたとき、対応しきれそうにない。

一隻どころか、一人が海に落とされただけでも、なし崩しの不利になるのが、十人五舟だ。やるなら早いうちが良い。

「蔵王権現見参！」

千が号令をかける。

雷怨寺党は、何事かと身構える。

が、言葉の怪しさとは裏腹に、ただ単に縞馬党は一度引いて舟を集合させていく。一人舟となっていた四番舟も集まってくる。

夢幻たちは、千軍の動きを見守った。

「基本形に戻るのか？」

一瞬、そう判断したが、違った。

火六夜が千の舟へと飛び移っただけ。

大将舟から順番に、三人、二人、二人、一人、二人の形である。前列に二番三番が併走して並び、その後ろに四番と五番が従う。最後尾に千の大将舟。

夢幻の大将舟めがけ、全舟が密集して猛進してくる。

「玄武の陣！」

夢幻の号令。

大将舟を守るように、雷怨寺四隻がハの字に展開する。

右の前衛、八道寺の二番舟に、縞馬党の二番舟が外側に押し出すように衝突する。左の前衛、奥平の三番舟にも、縞馬三番舟が同様にぶつかっていく。

舟が大きく揺らぐ。海に落とされないよう敵味方とも、舟にしがみついていた。二隻ずつが絡まったまま、外側に緩やかに流されて

いく。

空いた隙間を、残りの三隻が進軍。

雷怨寺党の後衛二隻が立ちふさがる。

さすがというか、完全に、夢幻への進路を消していた。

——が、お構いなした。

四番舟に四番舟、五番舟に五番舟が突撃。その揉み合う中、千の大將舟も相手の五番舟を挟み込むように位置取り、突っ込んでいく。陣形も何もあったものではない。

玉を突くように舟と舟がぶつかり合い、予想できない動きで配置が変わっていく。

結果、互いの四番舟が同じ方向にはじき出され、互いの五番と千の大將舟が、かなり近い位置で停止した。

「よしっ」

一か八かの運試しだが、成功だ。

激しい揺れが続く中、身を低くした火六夜が、中窪の五番舟に飛び込んだ。

火六夜の侵入に、中窪は旗の前に仁王立ちとなった。そこに、千の舟からもう一人、五番舟からも一人が乗り移る。

「ちくしょうっ」

中窪がほえた。

火六夜に背を向け、旗に迫る縞馬党に突進する。胴に手を回してがっつりと抱き付くと、

「もはやこれまで！」

敵もろとも、中窪は海へと身を投じた。その直後に、火六夜が旗を奪取した。

「五番舟討ち取ったり！」

火六夜が高々と旗を掲げる。

「火六夜、戻れ！」

千がせっぱ詰まった声を出す。

「げっ」

振り返った火六夜が慌てて舟へと跳ね戻った。千が急いで櫓を漕ぐ。

夢幻の大將舟が、仁神の四番舟と連携を取って、一人舟となっていた四番舟を襲撃しているのだ。搭乗している縞馬党は櫓を捨てて防戦一方となっている。

「にげろっ、ねばれっ」

千の指示も、今更だ。

正村が縞馬を抱え上げて海に放り込み、

「四番舟、討ち取ったり！」

旗を引き抜き、頭上にかざす。

しかし、別の方向からも少し間の抜けた勝ちどきが上がった。

「二番舟、討ち取ったり~~~~~！」

雷怨寺党の二番舟の上で、縞馬党の女性が嬉しそうに旗を振っている。

「でかしたっ」

千が舟上で小躍りする。

「てめえばか！ なにやってるやがる！」

正村が二番舟の指揮官、八道寺を罵倒する。

「むっ、胸が！ あっ、あて！」

八道寺の言い訳だ。

飛び跳ねて喜んでいる縞馬党の女性の胸も、また飛び跳ねていた。正村が奪い取ったばかりの旗を足下にたたき付けて悔しがった。

「あてっ、なんだ！ あてっつかか？ 慎ましやかな奥方さまへのあてっつかか！ てめえ少しは気をつかえ！」

「おまえが気をつかえ」

ちなみに、女性の胸を触ったりいやらしく抱きつくとか失格となる規則が運用の中で生まれており、今回もはつきりと確認済みだ。

「ひと~~~~っっ」

夢幻が声を張り上げる。

「あずさっ、飛び込んで！」

火六夜が声を張る。

「ふたーっ」

旗と胸を振っていた縞馬党の女性が、海に頭から飛び込んだ。

二番舟が一人となる。もし相手の二番舟を仕留める前なら、大變な危機だった。

金星である。

それから仁神が、縞馬党の一人が二日酔いで海に吐き始め戦闘力の半減した三番舟を討ち取り、火六夜が突撃を敢行して、奥平の三番舟を仕留めた。その際、千の大將舟に致命的な隙が出来た。底うように五番舟が間に割り込み、正村に仕留められている。

雷怨寺党は、大將舟、四番舟にそれぞれ二人ずつ。

千の率いる縞馬党は、大將舟に千と火六夜。二番舟にも少し前に大將舟から一名が移り戻って、縞馬二名。

千と夢幻の大將舟は、舷側を擦りあい、牽制しあって併走している。少し離れた海域では、縞馬の二番と雷怨寺党の仁神が、緩やかな舟足で睨み合っている。

ここまで拮抗して人数が減ると、もう慣れも不慣れもない。

ように見えて、やはり経験がものを言った。

雷怨寺党の四番舟を預かる仁神が行動に出た。

縞馬の二番舟へと舟を横付けして、飛び移った。

二番舟の二人が仁神を取り押さえた。海に落とそうと揉み合いが始まる。

大將舟は大將舟で、熾烈な攻防を繰り広げていた。

火六夜の敏捷性と、正村の怪力。

かいくぐれば火六夜の勝ちで、捕まえれば正村の勝利だ。

正村の体勢を少しでも崩そうと、千の方から、舟に舟、櫓に櫓をぶつけている。

だもんで、二番舟の状況に気づくのが遅れた。

「一人離れる！」

千が叫んだときには、仁神は舟を思いっきり揺らすように足を踏ん張り、縞馬二人の袖を強く掴み、後ろ向きに力一杯跳躍した。縞馬たちは慌てて船縁を握ろうとしたが間に合わなかった。ひっくり返りそうに傾く小舟から、三人の身体が海に落ちていく。

一人二殺。

白黒戦で一時期に猛威を振るって、禁止されたこともある技だ。

これで、三人対二人になった。しかも相手には正村が残っている。二番舟の一人に合流されたら勝ち目はない。

「火六夜」

「うん」

千は片側の櫓のみ力一杯に漕ぎ、夢幻の舟に舟を押しつける。

ぐらつく足場をもともせず、火六夜が敵舟の舳先に飛び移る。

火六夜は振り落とされそうになり、しかし両手両足で踏ん張ってから、舟の中央、旗に飛びかかった。

が、すんでのところで正村に腕を掴まれ、引き離される。

残念。

しかし考慮の上。

火六夜は身体全体で正村の左腕にしがみつき、全体重で海に引きずり落とそうとする。

正村は踏ん張った。

千も夢幻の舟、船尾に飛び移った。

旗と千の間に、夢幻が立ちふさがる。

火六夜が正村を封じてる間に、大将同士で一騎打ちだ。

隙をうかがう余裕はない。

千は、あえてがっぷり四つに組掛かった。

「なんだ。思ったより力があるじゃないか」

「剣術はずっと続けてた」

「ふーん」

そついうわりに、夢幻の足は震えてる。

「千！」

火六夜の悲鳴。

臂力の差はいかんともしがない。

引っぺがされて、火六夜が海に放り捨てられた。

火六夜の小柄な身体が、千の眼前を飛んでいって、大きな水しぶきを上げて海へ沈む。

「俺たちの勝利だな」

無人となった千の大将舟に、正村が飛び移る。

「残念、勝てなかったか」

千は、力を抜き、夢幻から離れた。

そして、緩やかに抱擁するように、もう一度、夢幻に抱きついた。わずかに感じる胸のふくらみと体温に、夢幻が身体を硬くする。にやり、と千が笑った。

「正村、急げ！」

夢幻がもがき、叫ぶ。

千が両腕に力を込めて、夢幻の背骨を軋ませる。足を払い、もろとも海へ。

「しまった！」

夢幻は千と揉み合いながら波に吞まれた。

「大将舟、討ち取ったりー！」

二人の落ちる水音と、正村の勝ち名乗りの声。

わずかに正村の方が早い、ほぼ同時だ。引き分けとなった。

「火矛蔵でも連れて来ればよかった」

ゆつくりと港を離れる夢狸号の舷側に寄りかかり、千がぼやいた。その後、三日の間に、七回の白黒戦を行ったが、三勝三分け二敗で、雷怨寺党か勝利を収めていた。

「火矛蔵なら正村にも対抗できたろうに」

千の隣で、同じ陸を眺めていた火六夜が眉をひそめる。

「だめだめ。父ちゃんには負けたら絶対に暴れるから。どこまでも卑怯な手を使うし。それに雷怨寺城になど誰が行くか！ って吼えて立てたのは父ちゃんだしね」

「でも恨めしそうな目でちらちら見てただろ」

「気づかないふり。気づかないふり。……お土産も要らなかったのに」

船には酒と酒のつまみが積めるだけ積んである。今回、神楽が用意した報酬は武具や糧食、金銀が大半であり、嗜好品は少なかった。「今後のことを考えると師匠の機嫌は取っておかないとな」

千が微笑むと、ぶすつと火六夜がそっぽを向く。

千が火矛蔵に弟子入りしたことが不満らしい。火六夜は、若手のみの集団に千を迎えたかっがつていた。結局、千の薦めでみんな揃って火矛蔵の下で鍛え直されることになった。室戸沖の決戦で、熟練した縞馬党の働きを目にし、日頃反発していた若年層も技術の差を認めざるを得なかったからだ。

室戸沖の一戦は、火六夜たちだけでなく、千にとっても、不本意な内容だった。

相手は白刃の得物で殺しに来るのだ。

隙だらけの相手だが、いつもより神経を張りつめ、大きな間合いで攻撃をかわして、手加減無用で叩き伏せた。竜技としては美しくはないが、それ自体に不満はなく、戦なのだから適切な判断だったと思う。

しかし気が付いたときには、挑んでいく敵の姿が途絶えていた。無我夢中で迎えた戦の終了。

味方の大勝利を知ったとき、ただ、千は愕然としていた。

頭の中が真っ白になり、顔が熱くほてっていた。

安心でもなく喜びでもなく、心を占拠するのは、恐怖でもなく、羞恥心だった。

竜技会では、船は全て障害物でしかない。接触しない距離を測れ

ばよく、船も邪魔にならないよう一定の距離を開けて緩やかに動いてくれる。船上の人も、竜技を見ているだけであり、銃撃してこない。それは陸上にあふれる観客も同じだ。

しかし、戦場は違う。

敵味方に分かれ、陣形を組みながら、あの手この手を使ってこちらを捕捉殲滅しようとしてくるのだ。

敵を叩きのめすことに熱中していて、つまり眼前の敵に気を取られ、戦場に出る前には意識していたはずのそのことが、きれいさっぱり頭の中から抜け落ちていた。大局どころか足下すらまるで見えていなかった。

生き残れたのは、精強を誇る縞馬党に囲まれ、姉の神樂がお膳立てした初陣が、圧倒的に恵まれた環境だったからに他ならない。

織田を相手に、こんな戦が続くはずがない。

千は出来るだけ迅速に、芸能の竜士から、戦場の竜武士に生まれ変わらなければならなかった。

でなければ、あつという間に散るだろう。築き上げた姫竜王の名を汚して。

「とにかく、修行だ」

挑戦することは嫌いじゃない。

これから強くなればいい。

今は羞恥心も薄れ、踊りたいほど昂揚している。

竜技を極め、敵のいなくなつたこの半年、どこか弛緩した日々が続いていた。平和に浸り、平和を愛し、平和に倦んでいた。

竜技に身を投じた当時、森長可に挑む前夜、前田慶次郎の挑戦。死と隣り合わせの戦場は、かつてを凌ぐ極限の興奮に千を導いてくれるだろうか。

試したい。

自分がどこまで征けるのか。

「そうだ。姫竜王の旗を考えないと」

「そんなことよりさ、いいの？ 千。あんな約束して」

「ん？ なんの？」

「夢幻が千に追いつけるわけじゃない？」

「ははは。戦いこそが我が人生。今の私には夢幻のことなんてどうでもいいさ」

余裕たつぷり答えてやる。

「それに夢幻が何を言ったところで姉を説得できますかい」

「馬鹿だねえ」

火六夜がため息を吐く。

「夢幻は他の誰よりも意固地で頑固者なんだよ。自分が並んだ、っ
て思うまで、絶対に千に告白なんかしないよ？ 永遠に待たされる
よ。結婚しても絶対に千には手を出さないよ、あいつ」

「……」

「えへへっ。千は永遠の乙女だね」

「……」

千は、すでに島影に隠れ見えなくなつた雷怨寺城の方角に視線を
移す。

本日晴天。

なれど波高し。

姫竜王の戦いは始まつたばかりである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8408h/>

日本群島、戦国、姫竜王

2010年10月10日03時53分発行